

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

IX

2003年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2006.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原遺跡東部地区発掘調査報告 IX

2006.3

2003年度に行った1件の調査結果を収録する。現地表下4mまでをおもな調査対象とし、弥生時代から江戸時代までの遺構・遺物を確認した。

弥生時代から古墳時代初頭については、一部が遺存していたのみであるが、溝などを検出した。

古墳時代から平安時代は調査区内に自然流路があったことがわかった。土師器・須恵器をはじめとする遺物が多く出土している。平安時代には、流路の東岸に井戸・溝・土壙を検出しており、集落の一部であったことが明らかとなった。

平安時代以後は、流路のあとは湿地状となっており、鎌倉時代になっても、小規模な流路が残っている。室町時代以後は耕地として利用され、室町時代から江戸時代の遺構として井戸・小溝群などが検出された。

これら各時期の遺構の方位は、埋没した流路の方位と同様であり、古墳時代以降、現代に至るまで土地利用が流路の影響を受けていることが注目されよう。

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

Ⅸ

2003年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2006.3

財団法人 大阪市文化財協会



古墳時代から平安時代の流路出土遺物

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

IX

2003年度大阪市長吉東部地区

土地地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2006. 3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は、2003年度に行った大阪市長吉東部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査の成果を収録した『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅸである。

今回の調査では、ほとんどの部分が流路に位置しており、集落跡のように生活の痕跡が集中して見つかるという華々しい成果ではない。しかしながら、多くの水を提供する川は人々の生活に密着したものであり、時には水資源として積極的に利用し、また、時には水害を起こすものとして抗う対象であった。川の中から出土した多くの遺物は、近隣から流されたものとはいえ、川とともに生きた証である。長原遺跡東部地区にはこれら大小の河川が数多く埋没しており、これまでの調査によって各時代の人々と川との係わりが明らかになりつつある。幾度もの水害に見舞われながらも、自然を巧みに克服し、共存していく先人の知恵を窺い知ることができよう。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで、数々のご協力を賜った関係各位の皆様に心より感謝の意を表する次第である。

2006年3月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は、財団法人大阪市文化財協会が2003年度に実施した、大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所による、平野区長吉出戸7丁目の土地区画整理事業に伴う発掘調査(NG03-9、NGは長原遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市建設局が負担した。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査研究部調査課長(当時、現研究資料課長)京嶋覚の指導のもと、同課調査第2係平田洋司が担当した。調査の面積・期間などは第I章第1節に記した。報告書の執筆・編集は、調査研究部調査課長田中清美・同調査係長積山洋の指導のもとに平田が行った。
- 一、調査における基準点・水準点の設置はアジア航測株式会社に委託した。
- 一、遺構写真は調査担当者が撮影し、遺物写真は楠華堂楠本真紀子氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には多くの補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 本書で用いた層位学・堆積学的用語については、[趙哲済1995]に準じる。
2. 遺構名の表記は、溝(SD)、井戸(SE)、土塙(SK)、柱穴(SP)、自然流路(NR)の分類記号の後に、層準ごとに番号を付している。
3. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では「TP±〇m」と記した。基準点の数値は世界測地系を用い、挿図中の方位は、座標北を示す。
4. 出土遺物は通し番号を1より順に付した。
5. 本書で頻繁に用いた土器編年や器種分類については次の文献に拠った。本文中では煩雑を避けるため、これら引用文献をその都度提示することは割愛している。古墳時代の須恵器：[田辺昭三1981]、飛鳥・奈良時代の土器：[古代の土器研究会1992]、平安時代の土器：[佐藤隆1992]、鎌倉・室町時代の土器：[鈴木秀典1982]。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 長原遺跡東北地区の発掘調査	1
第1節 経緯と調査地の位置	1
1) 長原遺跡の概要	1
2) 調査に至る経緯と既往の調査	1
第2節 調査の経過と概要	6
1) 調査の経過	6
2) 調査の概要	7
i) 弥生時代以前	ii) 古墳時代
iii) 飛鳥～平安時代	iv) 鎌倉時代以降
第Ⅱ章 調査の結果	9
第1節 層序	9
1) 層序の概要	9
2) 調査地の層序	9
第2節 弥生時代以前の遺構と遺物	16
1) 第10a層上面検出遺構	16
2) 第9b層出土遺物	17
3) 第8層出土遺物	17
4) 第8層上面検出遺構	18
5) 小結	18
第3節 古墳時代の遺構と遺物	19
1) 第7層の河道	19
2) 第7層出土遺物	19
3) 小結	23
第4節 飛鳥～平安時代の遺構と遺物	25
1) 第6層基底面・第7層上面検出遺構と遺物	25
i) 自然流路	ii) 溝
iii) 土塋	iv) 井戸
2) 第6層上面検出遺構と遺物	29
3) 第5層出土遺物	31
4) 第4c層内・基底面検出遺構と遺物	33
i) 溝	ii) 土塋

iii) その他の遺構	
5) 小結	34
第5節 鎌倉時代以降の遺構と遺物	37
1) 第4b層出土遺物	37
2) 第4b層上面検出遺構と遺物	38
i) 鎌倉時代の遺構	
ii) 室町時代の遺構	
iii) 江戸時代以降の遺構と遺物	
3) 小結	44
第Ⅲ章 調査成果のまとめ	45
1) 弥生時代以前	45
2) 古墳時代から飛鳥時代	45
3) 奈良時代から平安時代	45
4) 鎌倉時代以降	49
引用・参考文献	50
あとかき・索引	
英文目次	
報告書抄録	

原色図版目次

1 平安時代の遺構・流路断面

上：第4c層内・基底面検出遺構(東から)

下：NR601断面(北西から)

図版目次

1 弥生時代以前の遺構

上：深掘り部第10b層以下断面(北東から)

中：第8層上面検出遺構(西から)

下：SD801(南東から)

2 古墳時代の遺構

上：第7層の河道全景(東から)

中：第7層による第8層以下の削り込み(東から)

下：西端部第7a層と第7b層の境界(北から)

3 飛鳥～平安時代の遺構

上：第6層基底面・第7層上面検出遺構(西から)

中：NR601(南東から)

下：NR601断面(北西から)

4 平安時代の遺構(二)

上：SE601(南から)

中：SD604・605(南東から)

下：第4c層内・基底面検出遺構(東から)

5 平安時代の遺構(三)

上：東部第4c層内・基底面検出遺構(西から)

中：東部第4c層内・基底面検出遺構(北西から)

下：SD401・SX401(南東から)

6 平安時代の遺構(四)

上：SK401(北から)

中：SK402・403(北から)

下：SX403(南から)

7 鎌倉時代以降の遺構(一)

上：第4b層上面検出遺構(東から)

中：東部第4b層上面検出遺構(西から)

下：西部第4b層上面検出遺構(東から)

8 鎌倉時代以降の遺構(二)

上：SB201(南から)

中：SK201(南西から)

下：SK201(北西から)

9 鎌倉時代以降の遺構(三)

上：SE201(南西から)

中：SE205(西から)

下：SE204(南西から)

10 弥生時代以前の遺物・古墳時代の遺物(一)

11 古墳時代の遺物(二)

12 飛鳥～平安時代の遺物(一)

13 飛鳥～平安時代の遺物(二)

14 平安時代の遺物(三)・鎌倉時代以降の遺物

挿 図 目 次

図 1	長原遺跡の位置	1	図17	東部第6層基底面・第7層上面検出遺構	29
図 2	長原遺跡の地区割と周辺の遺跡	2	図18	SD601～603・SK601断面図	30
図 3	長吉東部地区土地区画整理事業施行予定地と既往の調査	4	図19	SE601平・断面図	30
図 4	調査地の変遷	7	図20	第6層上面検出遺構	31
図5-1	南壁・西壁地層断面模式図(1)	10	図21	SD604～608断面図	32
図5-2	南壁・西壁地層断面模式図(2)	11	図22	第5層出土遺物	32
図 6	第10a層上面検出遺構	16	図23	第4c層内・基底面検出遺構	33
図 7	SX1001・SD1001	16	図24	SD401・SK402出土遺物	34
図 8	第9b層および第8層出土遺物	17	図25	東部第4c層内・基底面検出遺構	34
図 9	第8層上面検出遺構	17	図26	SK401・402、SD401、SX401・403断面図	35
図10	SD801断面図	18	図27	第4b層出土遺物	37
図11	第7層段階の河道	19	図28	第4b層上面検出遺構(1)	38
図12	第7a層および第7b層出土遺物(1)	21	図29	第4b層上面検出遺構(2)	39
図13	第7a層および第7b層出土遺物(2)	22	図30	SD301・302・201～205断面図	40
図14	第6層基底面・第7層上面検出遺構	25	図31	SE203出土遺物	41
図15	NR601出土遺物(1)	26	図32	SE204出土板材	42
図16	NR601出土遺物(2)	27	図33	SK201平・断面図	43
			図34	SB201平・断面図	44
			図35	平安時代の長原遺跡の様相	47

表 目 次

表 1	長原遺跡東北地区におけるおもな調査	3	表 3	長原遺跡の標準層序(2001)	13
表 2	長原遺跡東北地区の基本層序(2000)	12			

写 真 目 次

写真 1	土留作業風景	6	写真 3	須恵器鉢53	23
写真 2	重機掘削風景	6	写真 4	管状土錘23・25・26	23

第Ⅰ章 長原遺跡東北地区の発掘調査

第1節 経緯と調査地の位置

1) 長原遺跡の概要(図1・2)

長原遺跡は大阪平野の南部、大阪市平野区长吉長原・長原東・長原西・出戸・川辺・六反に所在する。1973年における地下鉄谷町線の延伸工事に伴う調査での発見を契機として、発掘調査が継続して行われてきた。その結果、東西約2 km、南北約2 kmにわたる後期旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡であることが明らかとなっている。大阪市文化財協会では、長原遺跡を便宜的に8地区に区分し、それぞれ北・東北・東・東南・中央・南・西・西南地区と呼称している(図2)。

地形的には瓜破台地の先端部から台地東側の沖積地に位置し、北東に向って緩やかに下がっている。このため、遺構面は南西部で浅く、北東側で深く検出される傾向にある。

2) 調査に至る経緯と既往の調査(図3・表1)

1995年度から計画された長吉東部区画整理事業の対象地域である平野区长吉出戸・六反地域は、周知の遺跡である「長原遺跡」に全域が含まれていた。このため当事業における埋蔵文化財の取り扱いについて、大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所、大阪市教育委員会文化財保護課、財団法人大阪市文化財協会の三者で事前協議を行い、「長吉東部地区埋蔵文化財に関する協定書」を締結した。発掘調査の実施における埋蔵文化財の取り扱い全般を定めたもので、各年度における具体的内容は年度ごとの契約書で定めることとした。これに基づき、1995年10月より発掘調査が順次行われることとなった。

初年度である1995年度には、都市計画道路長吉1号線予定地の北端部にて1件の発掘調査(NG95-57次)が行われた。この調査では、古墳時代後期の流路および柵のほか、飛鳥・平安時代の掘立柱建物を検出した[大阪市文化財協会1998]。

1996年度には前年度の調査の南側にて調査を実施した(NG96-9次)。弥生時代後期から古墳時代初頭の水田のほか、飛鳥時代の掘立柱建物を検出した。また、本年度には都市計画道路長吉3号線予定地でも2箇所において調査が行われた(NG96-40・66次)。弥生時代後期の

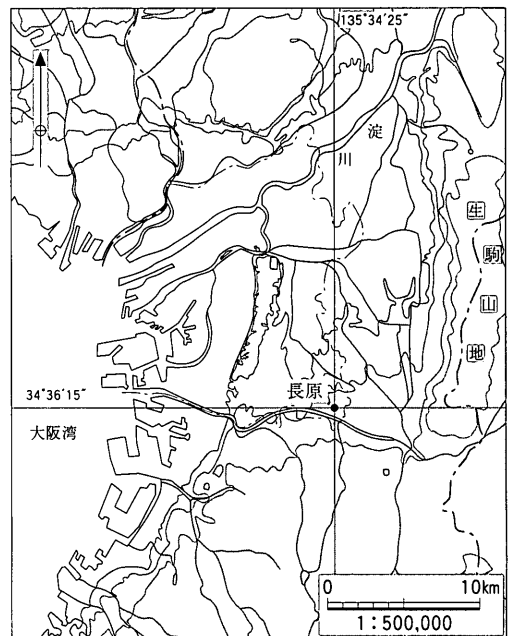


図1 長原遺跡の位置

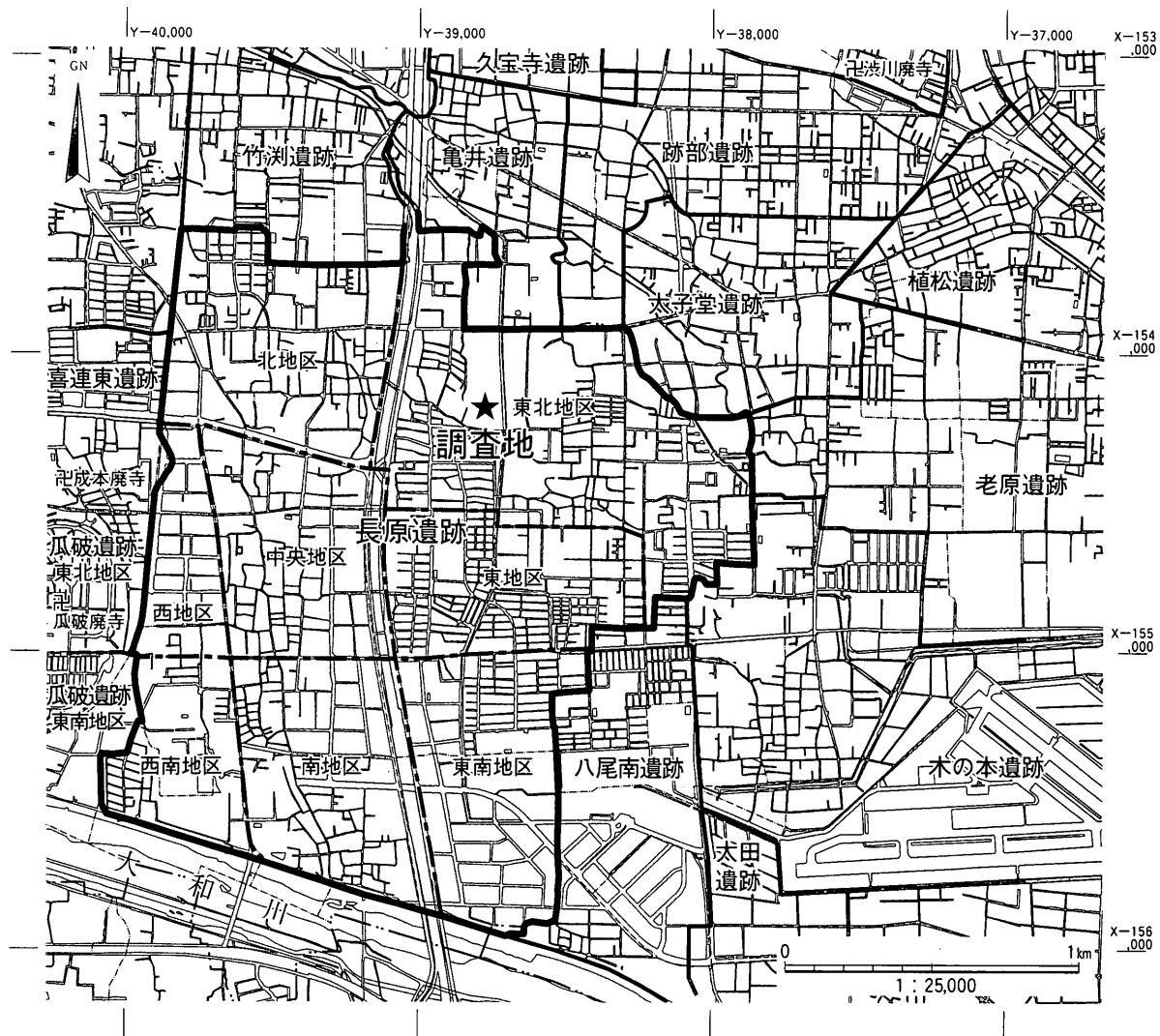


図2 長原遺跡の地区割と周辺の遺跡

水田、古墳時代後期から飛鳥時代の掘立柱建物のほか、平安時代の遺構群を検出した。

1997年度には調査件数も増加し、都市計画道路長吉2号線予定地で3箇所(NG97-12・13・52次)、同長吉3号線予定地で1箇所(NG97-43次)、同敷津長吉線予定地で1箇所(NG97-56次)の計5件の調査を実施した。NG97-12・52次調査では、旧石器時代の石器製作址、弥生時代中期の水田、古墳時代の土手状遺構のほか、飛鳥・平安時代の遺構群が見つかった。

1988年度には、都市計画道路敷津長吉線予定地で2箇所(NG98-19・20次)の調査を実施した。古墳時代中期の盛土遺構を検出し、祭祀に伴うと考えられる滑石製勾玉や白玉のほか、多量の土器が出土した。

1999年度には、都市計画道路敷津長吉線予定地で2箇所(NG99-19・41次)の調査を実施した。NG99-41次調査では住居状遺構・土器集積を含む、縄文時代早期から後期の遺構群をはじめ、弥生時代から古墳時代の水田、古代から近世の水田などを検出した。

2000年度には、都市計画道路敷津長吉線予定地で、1箇所の調査(NG00-6次)を実施した。西接するNG98-20次調査に連続する古墳時代中期の盛土遺構のほか、平安時代の流路を検出した。

2001年度には、都市計画道路敷津長吉線予定地の1箇所の調査(NG01-14次)を実施した。古墳

表1 長原遺跡東北地区におけるおもな調査

調査	おもな内容	文献
城山mh2	弥生時代前～中期周溝墓状遺構、古墳	大阪文化財センター1980
城山mh3	弥生時代中期遺物、古墳時代大溝、奈良時代遺物	大阪文化財センター1980
城山B・C区	弥生時代中期方形周溝墓、古墳、飛鳥時代自然流路	大阪文化財センター1986a
城山D・E・F区	弥生時代中・後期集落、古墳時代中期水田・土壠、飛鳥～平安時代溝、中世水田	大阪文化財センター1986b
城山G区	弥生時代土壠群、飛鳥時代～中世水田	大阪文化財センター1986c
NG1	弥生時代中期溝・土壠墓、古墳時代中期溝、飛鳥時代大溝	大阪市文化財協会1978
77年度試掘	奈良時代溝	大阪府教育委員会・難波宮址顕彰会1978
NG12	飛鳥時代杭列・流路・土器溜まり、平安時代土壠	大阪市文化財協会1979a
NG16	弥生～古墳時代中期遺物、弥生時代溝、古墳時代前・中期溝・井戸	大阪市文化財協会1979b
NG17	縄文時代晩期・弥生・古墳時代後期遺物	大阪市文化財協会1979c
NG80-1	TP+7.2mで奈良時代溝、TP+6.9mで砂層(NG8層)	大阪市文化財協会1981a
NG80-2	弥生・古墳時代遺物	大阪市文化財協会1981b
NG23	弥生時代中期遺物、古墳	大阪市文化財協会1980
NG25	縄文時代晩期・弥生時代中期遺物	大阪市文化財協会1980
NG83-1	弥生時代中期住居、古墳時代中期住居	大阪市文化財協会1984a
NG83-5	TP+8.0mで砂層	大阪市文化財協会1984b
NG83-22	TP+7.6mで奈良時代包含層	大阪市文化財協会1984c
NG83-43	TP+7.8mで砂層	大阪市文化財協会1984d
NG83-54	TP+8.1mで砂層(NG5層か)	大阪市文化財協会1984e
NG83-63	弥生時代中期集落、弥生時代後期土器棺墓	大阪市文化財協会1984f
NG83-65	弥生時代中期遺物、古墳時代中期土壠状遺構	大阪市文化財協会1984g
NG84-4	古墳時代中期溝・土壠、飛鳥時代水田、古墳時代砂層なし	大阪市文化財協会1985a
NG84-18	TP+8.2mで泥質土層	大阪市文化財協会1985b
NG84-49	TP+7.7mで砂層	大阪市文化財協会1985c
NG84-86	弥生時代後期～古墳時代中期遺物、庄内期井戸・建物、古墳時代中期土壠	大阪市文化財協会1985d
NG85-17	縄文時代晩期遺物	大阪市文化財協会1986
NG88-6	TP+7.8mで砂層(飛鳥時代初頭の須恵器が出土)、飛鳥時代包含層、奈良時代溝	大阪市文化財協会1989
NG95-57	TP+8.2mで砂層(古墳時代後期中葉の須恵器が出土)、古墳時代後期柵、平安時代集落	大阪市文化財協会1998a
NG95-77	TP+8.0mで砂層(古墳時代後期前葉の須恵器が出土)、古墳時代後期柵	大阪市文化財協会1996
NG96-9	弥生時代後期水田、TP+8.2mで砂層、飛鳥・平安時代集落	大阪市文化財協会1999
NG96-40	TP+7.5～8.2mで砂層、飛鳥～平安時代溝	大阪市文化財協会1999
NG96-66	弥生時代中期～庄内期遺物、TP+7.8mで砂層、古墳時代後期～奈良時代集落	大阪市文化財協会1999
NG96-79	旧石器・縄文時代遺物、弥生時代後期～庄内式期遺構、飛鳥・平安時代遺構、TP+7.5mで砂層	大阪市文化財協会1997
NG97-12	旧石器時代遺物集中部、縄文時代遺物、古墳中期時代木製品、飛鳥時代竈屋・掘立柱建物	大阪市文化財協会2000
NG97-13	古墳時代自然流路、平安時代溝	大阪市文化財協会2000
NG97-41	縄文時代晩期～弥生時代前期流路、弥生時代中期溝、古墳時代水田、奈良～平安時代遺構	大阪市文化財協会1998b
NG97-43	弥生時代後期溝、古墳時代自然流路、飛鳥時代溝・土壠	大阪市文化財協会2000
NG97-52	旧石器・縄文時代遺物、古墳時代中期木製品、古墳時代後期土手状遺構、飛鳥時代遺構	大阪市文化財協会2000
NG97-56	縄文時代後期踏込み跡、平安時代土手状遺構	大阪市文化財協会2000
NG98-19	古墳時代中期土壠状遺構・土師器・須恵器・玉類・製塩土器	大阪市文化財協会2001
NG98-20	古墳時代中～後期流路、古墳時代中期土壠状遺構・竪穴住居、古代～中世耕地	大阪市文化財協会2001
TS97-7	平安時代後期井戸、土壠	八尾市文化財調査研究会2000a
TS98-8	奈良～平安時代初期の小穴、中世井戸	八尾市文化財調査研究会2000b
NG99-15	縄文時代石器集中部、弥生中～後期・古墳中期集落、飛鳥時代耕地	大阪市文化財協会2002b
NG99-19	縄文時代後期土壠、弥生～古墳時代前期水田、平安時代～近世耕地	大阪市文化財協会2002a
NG99-41	後期旧石器時代遺物、縄文時代早～前期住居址、古墳時代前期水田、平安時代流路・土手	大阪市文化財協会2002a
NG00-6	古墳時代中期盛土遺構、古代溝、平安時代流路	大阪市文化財協会2003a
NG00-30	奈良時代ピット、平安時代土壠・流路	大阪市文化財協会2004a
NG01-14	古墳時代前期溝、古墳時代中期水田・溝群、飛鳥～奈良時代流路(墨画土器・獣骨出土)	大阪市文化財協会2004b
NG01-25	中世水田	大阪市文化財協会2004a
NG02-1	弥生時代中期集落、古墳時代畠状遺構、奈良時代流路	大阪市文化財協会2005
NG02-4	古墳時代盛土、中世水田	大阪市文化財協会2004a
NG02-5	縄文時代中～後期土器、弥生時代前～中期溝・水田、古墳時代前期水田、古墳時代中期木製品	大阪市文化財協会2005
NG02-9	旧石器時代遺物、平安時代集落	大阪市文化財協会2003b
NG03-5	弥生時代方形周溝墓、古墳時代集落	大阪市文化財協会2004c
NG03-9	古墳時代～平安時代流路、平安時代井戸・溝・土壠、江戸時代井戸・小溝	本書収録

時代中期および平安時代の水田のほか古墳時代後期から奈良時代の自然流路を確認した。なかでも自然流路からは、墨画土器・ミニチュア土器のほか牛馬骨など祭祀に係る遺物が多く出土している。

2002年度には、NG01-14次調査地の西に当る都市計画道路敷津長吉線予定地で1箇所(NG02-1次)、NG97-12次調査地の東隣に当る長吉2号線予定地で1箇所(NG02-5次)、計2箇所の調査を行った。NG02-1次調査では弥生時代の竪穴住居を初めとする集落跡のほか、古墳時代の畠状遺構、奈良時代の流路跡などを確認した。NG02-5次調査では弥生時代前・中期の溝や水田のほか、古墳時代前期の水田などを確認した。また、遺構に伴うものではないが、縄文時代中期後半の里木Ⅱ式、後期初頭の中津式の縄文土器、目盛板・多枝付木製品など古墳時代中期の木製品が出土している。

これら長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査の成果については、それぞれ調査年度の翌年度に整理作業を行い、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ～Ⅷとして刊行している。

また、同区画整理事業に伴うもの以外で近年、当地域で行われた調査としては、今回調査地の東方やや南寄り約300mに当るNG02-9次調査がある。後期旧石器時代の石器製作址のほか平安時代の掘立柱建物・溝・水田跡が検出されており、墨書土器も出土している[大阪市文化財協会2003b]。南西200mに当るNG03-5次調査では、弥生時代の方形周溝墓のほか、古墳時代の集落、飛鳥時代の耕作跡などが検出されている[大阪市文化財協会2004c]。

第2節 調査の経過と概要

1) 調査の経過

今回の調査地は、都市計画道路長吉2号線の予定地であり、NG97-13次調査地の西隣に当る。東西70m、南北10mの700m²について、現地表下4mまでを調査対象とした。NG97-13次調査地との重複はない。掘削深度が深くなることから四周に土留めのためのH鋼を打設して調査を行うこととなった。また、調査で生じた排土は、場外に仮置きし、調査終了時に埋戻すこととした。

平成15年9月4日より、周囲の仮囲いなどの周辺の整備作業を行った。9月9日よりH鋼の打設作業を開始し、9月24日に終了した。9月26日からは重機による掘削を開始し、10月3日まで行った。重機による掘削は後述の第3層までとし、以深は人力により掘削を行った。途中、遺構検出作業、実測、写真撮影などを適宜行いながら調査を進めた。なお、土層観察のため調査地南壁および西壁に沿っては、アゼを残し、掘削深度が深くなるに従い適宜除去した。10月17日、11月5日、12月4日、12月26日には高所作業車を利用して写真撮影を行った。また、10月24日には基準点の移設作業を行った。下部に流路が存在していたため、周囲から激しい湧水が生じ、調査期間中は排水に苦労することとなったが、ポンプアップの作業を並行しつつ、予定深度までは掘削を行うことができた。

調査地内は平安時代以前については流路に当たっており、比較的浅く底の検出された西端部を除いては、流路途中までの掘削にとどまった。年明けとなる平成16年1月5日からは東側から埋戻し作業を開始する一方、西端部の流路下位の調査を行った。1月9日には、西端部において一部深掘りを行い、以深の地層の堆積状況を確認した。1月10日からは西端部でも埋戻しを開始し、1月17日には同作業を完了した。1月19日からはH鋼の引き抜き、周辺整備などの旧状に復する作業を行い、1月31日、現地における作業をすべて終了した。



写真1 土留作業風景



写真2 重機掘削風景

2) 調査の概要(図4)

以下、今回の調査成果について主要なものを記す。

i) 弥生時代以前

後述の流路によって大きく削平を受けているため西端部でしか遺存しておらず詳細は不明である。一部で確認したのみであるが、いわゆる地山層はTP+4.2m前後に位置する。弥生時代の遺構には中期前葉の可能性がある溝・小流路のほか後期の溝を検出した。

ii) 古墳時代

調査区全域において自然流路が確認された。肩部および底については今回の調査区内では検出することができず、規模および形成時期については不明であるが、従来の調査成果より幅100m以上、深

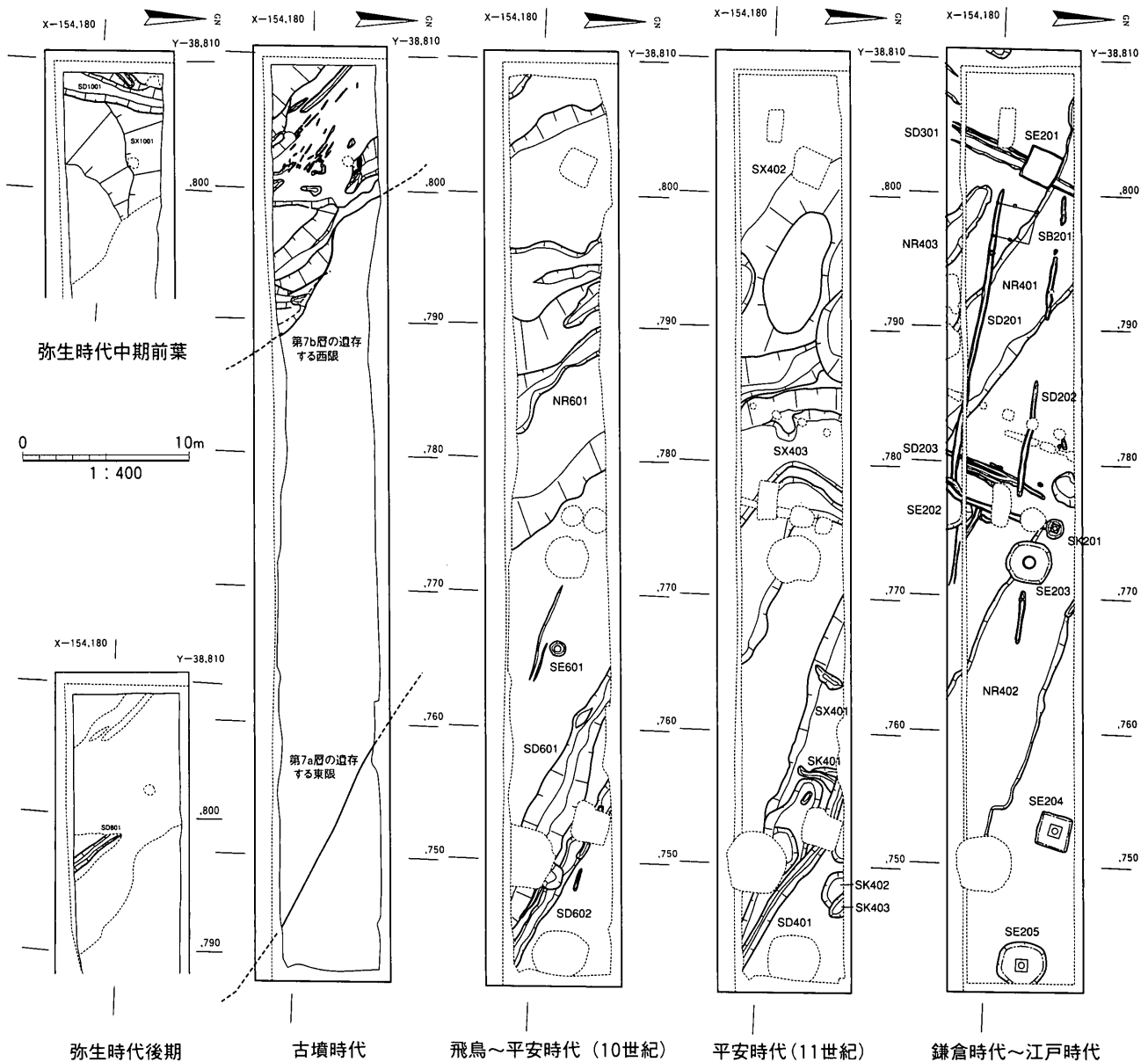


図4 調査地の変遷

さ 5 m 以上で古墳時代中期に遡るものと推定される。

iii) 飛鳥～平安時代

飛鳥～奈良時代の様相は明らかでないが、前段階の流路が引き続き存在していたと考えられる。平安時代、10世紀の段階では、調査区東部で溝・土壙など生活に係わる遺構が検出されたのに対し、西側では前段階からの自然流路が確認された。11世紀になると自然流路は、湿地状の窪みとなる。平安時代の集落の中心についてはより東にあり、集落域と自然流路の境を確認したと考えられる。

iv) 鎌倉時代以降

鎌倉時代については、遺構は確認できなかったが、作土層が認められたことから耕作地であったと推定できる。室町時代についても耕作に係わると推定される小溝群が確認されたことから、耕作地として利用されたと考えられる。江戸時代も溝のほか多数の井戸が検出され、同様に耕作地として利用されていた。これらの遺構の方位は正方位ではなく、前段階の流路の方向と同じであることが注目される。現在の調査地周辺の地割りもこれと同方位であることから、現在に至るまで土地利用が流路の影響を受けていたことが明らかとなった。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 層序

1) 層序の概要

調査では現地表下約4 mまでの地層を連続して確認した。なお、現地表面の標高が東でTP+10.0 m、西でTP+9.0 mと西へ向かって1 m程度下がっているため、観察できた深度は東でTP+6.3 m、西でTP+5.0 mまでである。また、西端部では部分的な掘削によって、現地表下6.0 m (TP+3.0 m) までの層序を確認した。

後述するように調査地は古墳時代から平安時代の河道に当っており、河成堆積層である第6・7層が厚く堆積する。弥生時代以前の地層は、これにより大きく削剥を受け、西端の一部という狭い部分で確認したのみである。この河道は平安時代に降る第6層によりほぼ埋没し、東側では遺構が認められるようになるのに対し、西側では平安時代を通して、湿地状の堆積物である第5層が認められる。鎌倉時代と考えられる第4b層は作土層であり、以後、氾濫堆積層である第4a層を除き、調査地内では最終的に現代の第0層による厚い盛土が行われるまで作土層が連続している。

2) 調査地の層序(図5、表2・3)

調査地における地層の観察と記録はおもに調査区の南壁で行った。以下、各層の特徴を記載し、長原遺跡東北地区基本層序(以下、RK○層と記述)[高橋工ほか2000]および長原遺跡標準層序(以下NG○層と記述)[趙哲済2001]との対比を行うこととする。なお、長原遺跡東北地区基本層序・長原遺跡標準層序の特徴については表2・3に示しているので参考されたい。

第0層 現代盛土層および攪乱で、層厚は30～180 mある。東で厚く、西で薄く存在する。現地表面は東から西に向かって約1 m緩やかに下がっているのは本層の厚さの違いのためである。RK 0層、NG 0層に比定できる。

第1層 オリーブ褐色細礫混りシルト質細～中粒砂からなる現代作土層で、層厚は20 cm程度ある。RK 1層、NG 1層に比定できる。

第2層 におい黄褐色細礫混り細～中粒砂からなる作土層で層厚は20 cm程度ある。RK 2層、NG 2層に比定できる。

第3層 におい黄褐色粗粒砂などからなる作土層で層厚は20 cm程度ある。本層以上は、おもに重機により除去を行った。RK 3層、NG 3層に比定できる。

第4a層 におい黄褐色粗粒砂～暗灰黄色細粒砂からなる水成層で、部分的に遺存する。もっとも厚い部分で層厚40 cmある。RK 4A層、NG 4A層に比定できる。

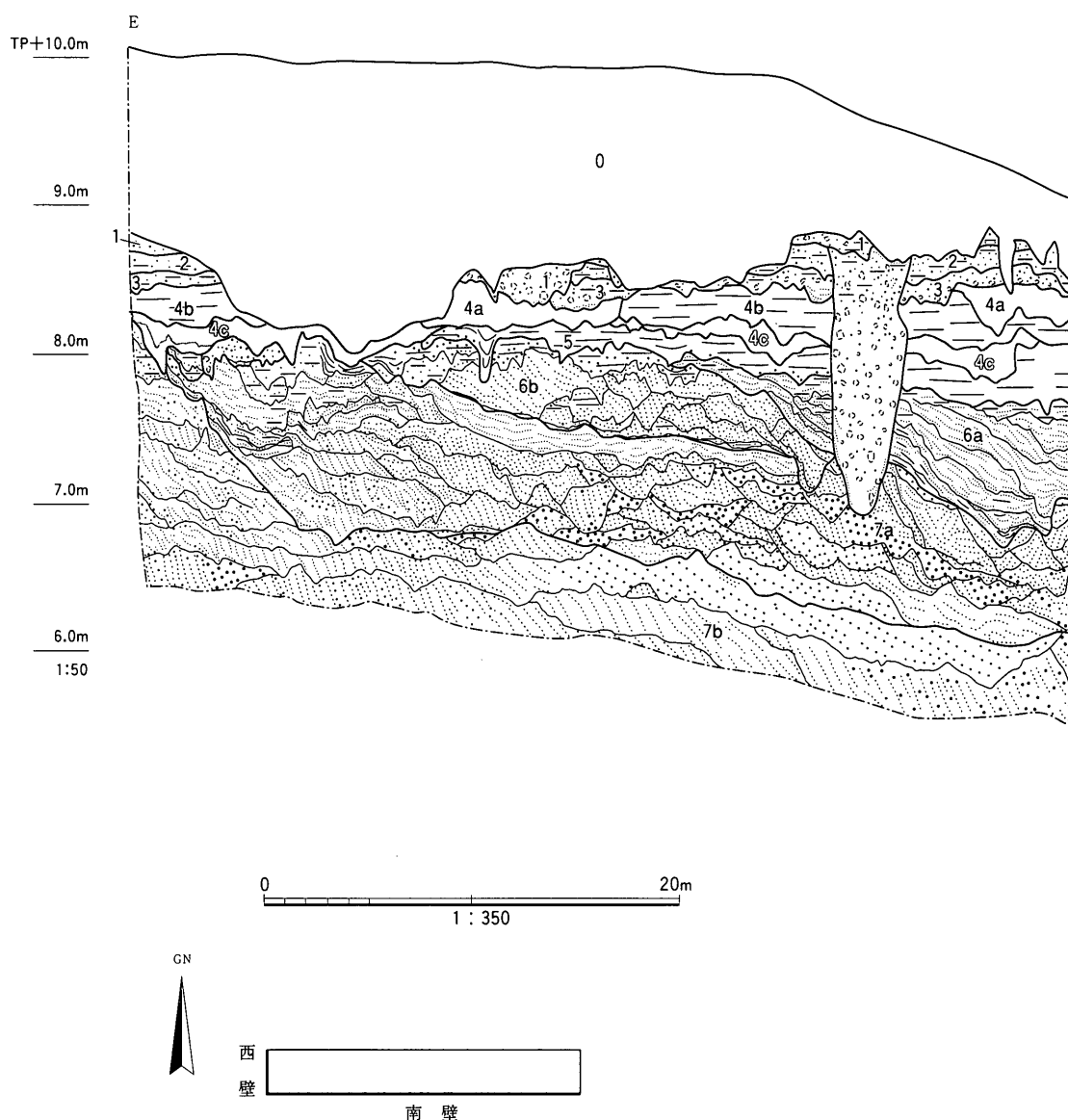


図5-1 南壁・西壁地層断面模式図(1)

第4b層 におい黄褐色粘土質シルトなどからなる作土層である。層厚は30～40cmで全域に遺存する。出土遺物は多くないが、瓦器片を含むことから、RK4B層、NG4B層に比定できる。遺構検出作業は本層上面より行った。

第4c層 におい黄褐色粘土質シルト～灰オリーブ色粘土からなり、層厚は10～20cmある。西に向かうにつれて上下層との区別は明瞭でないが、いくぶん暗色化する部分を本層として認識した。瓦器を含まず、黒色土器が出土することからRK4C層、NG4C層に比定できる。調査地東部では土壌化が著しく、東部における本層準には後述の第5・6層の形成と併行する可能性が高い。

第5層 暗灰黄色粘土からなる水成層である。ラミナは顕著でなく、湿地状の堆積物と考えられる。植物の根の痕跡と考えられる酸化鉄斑が認められた。西部でのみ層厚40cmで遺存する。黒色土器を含むことから、RK4C層、NG4C層に比定できる。第5・6層は調査地中央以西の流路内でのみ認識できる。

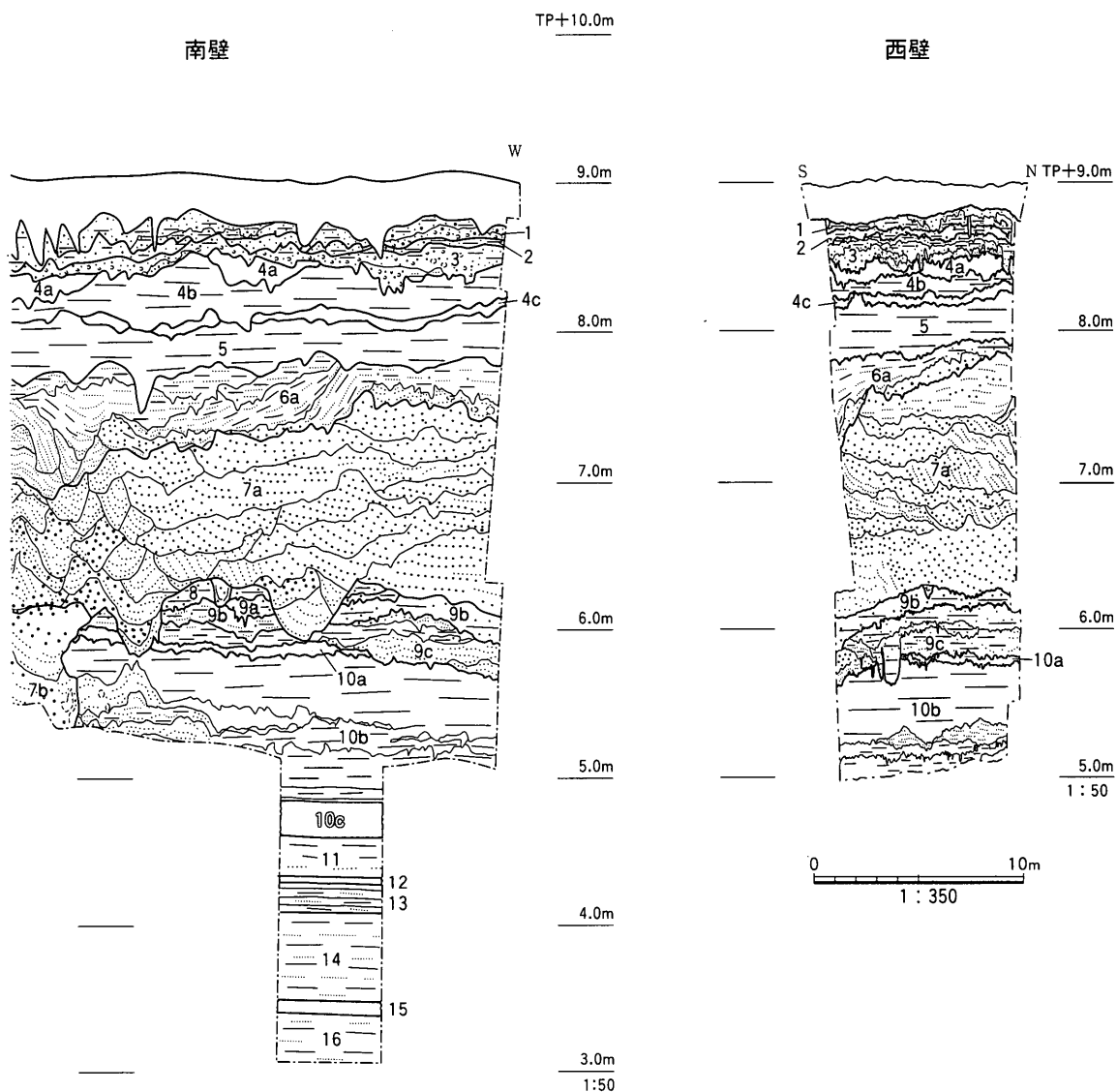


図5-2 南壁・西壁地層断面模式図(2)

第6a層 灰オリーブ色シルト質細粒砂～灰色粗粒砂などからなり、ラミナが顕著な河成層である。西部のみで遺存し、層厚は40～100cmある。後述のNR601の埋土である。遺物の多くは古墳～飛鳥時代の土師器・須恵器であるが、黒色土器なども含むことから平安時代に位置づけられる。本層上面では溝状の窪みを検出したが、人為によるものではないと考えられる。また、本層以下、第7a層上部では噴砂など地震の痕跡が顕著に認められるが、地震の発生した時期については明らかにできなかった。RK4C層、NG4C層に比定できる。

第6b層 灰色細粒砂～明黄褐色粗粒砂などからなる河成層である。西に行くほど厚く堆積し、最大層厚は60cmある。西半は第6a層により削られており、遺存していない。本層の基底付近では踏込みが認められる。また、基底面では平安時代の井戸・溝などが検出された。RK4C層、NG4C層に比定できる。

第7a層 暗灰黄色細粒砂～黄褐色礫などからなり、ラミナが顕著な河成層である。西に行くほど厚

表2 長原遺跡東北地区の基本層序(2000)

層序		層序 概念図	主たる岩相	層厚 (cm)	自然現象 自然遺物はか	おもな遺構・遺物		模式地	NG層序 との対比	時代		
RK0層			現代客土							近代・現代		
RK1層			現代作土	10-20					1			
RK2層		i	オリブ灰色細～中粒砂混り粘土質シルト	≦15		↓小溝群	国産陶磁器 (96-66次)	NG96-66北部	2	江戸		
		ii	灰～オリブ灰色細粒砂混りシルト	≦15								
		iii	オリブ灰色細粒砂混りシルト	≦15								
		iv	灰色粘土質シルト	≦10		↓小溝群・畝間						
RK3層		i	灰オリブ色粗粒砂混りシルト	≦20			中国製青磁 (96-9次)	NG95-57 NG96-9	3	室町～鎌倉		
		ii	黄褐色粘土質シルト	≦10	↓鳥島溝							
		iii	灰オリブ色粗粒砂混りシルト質細粒砂	5-15								
		iv	オリブ色シルト質極細粒砂	≦20	↓小溝・水田 (99-41次)	瓦器 (C-Ⅲ期: 96-9次)						
RK4A層			黄褐色シルト質極細粒砂～隙混り粗粒砂	15-20	↓自然流路	瓦器 (C-Ⅲ期: 97-52次)	NG96-79 NG97-12 NG97-52	4A		平安		
RK4B層		i	オリブ褐色粘土質シルト	≦15	↓不整形落込み	瓦器 (C-Ⅲ期: 96-9次)	NG96-9	4B				
		ii	オリブ褐色シルト	≦10	↓土器埋納遺構	瓦器 (C-Ⅲ期: 96-9次)						
		iii	黄褐～暗灰黄色 灰オリブ色シルト～細粒砂	10	▽井戸 平安Ⅲ期 ～平安Ⅳ新	堀立柱建物 瓦器 (C-Ⅱ期) 平安Ⅳ期 (96-9次)						
		iv	黄褐～暗灰黄色 灰オリブ褐色粘土質シルト	10		瓦器 (C-Ⅱ期) 平安Ⅳ期 (96-9次)						
RK4C層		i	オリブ褐色中粒砂混りシルト	8		平安Ⅲ期 (96-40次)				平安		
		ii	黄褐色中粒砂混りシルト	≦8	↓溝		NG96-40	4C				
		iii	灰オリブ色中粒砂混りシルト	6-10								
		iv	にぶい黄褐色中粒砂混りシルト	8-12	↓溝							
		v	暗灰黄褐色シルト	≦14	↓溝	平安Ⅲ期 (96-40次)						
		vi	灰黄褐色細粒砂混りシルト	10	↓土器埋納遺構	平安Ⅱ～Ⅲ期 (96-40次)				奈良		
		vii	暗灰黄色中～細粒砂混りシルト	5-20	↓溝	平安Ⅰ・Ⅱ期 (96-40次)	NG96-66	5A・B～6A				
RK5層			暗灰黄色シルト質細粒砂	≦15		↓銀跡					奈良	
RK6A層			暗褐色～黒褐色シルト～細粒砂	10	▽溝・堀立柱建物 TK43	↓溝・土壌	飛鳥ⅠorⅡ (96-79次)	NG96-79	6B～7A			飛鳥
RK6B層			灰色シルト	10	～平城宮土器Ⅵ	↓溝・土壌・井戸	飛鳥ⅠorⅡ (96-79次)					
RK6C層			暗灰色粘土質シルト	10		↓溝						
RK7A層		i	オリブ褐色シルト～細粒砂	≦40	植物遺体多	一溝 (97-43次)	飛鳥Ⅱ (97-43次)					
		ii	灰色砂礫	≦70			TK10新相 (97-43次)	NG97-43	7B0			
		iii	黄褐色細～粗粒砂	≦180				NG97-43		古墳後期		
		iv	暗オリブ灰色粘土質シルト～明黄褐色砂礫	≦250	▽土手状遺構 (95-57次) 一堤防状盛土 (98-20次)	TK10 (95-57・97-52次など)	TK23-47 (97-41次)	NG95-57 NG96-66	7Bi			
		v	黒色シルト～粘土質シルト	30	▽溝 (00-6次)	▽水水平断層 (99-41次)	TK23-47 (96-66次など)	NG97-41				
		vi	灰黄色砂礫	≦210				NG96-66				
		vii	灰オリブ色中粒砂～砂礫	≦110			TK216 (98-20次)	NG97-43				
RK7B層		i	灰オリブ色シルト	5-25	植物遺体を多く含む	一踏込み～盛土 (98-19・20、00-6次) 水田 (00-6次)	曲物 (97-12次)	NG96-79 NG97-12 NG97-41	7Bii	古墳前期		
		ii	オリブ黒色粘土質シルト	7	植物遺体を多く含む	一水田 (99-19・41次)	土師器 (船橋O-Ⅰ/Ⅱ: 97-12次)	NG97-12				
RK8A層			暗緑灰色シルト	5-20			布留式土器 (96-66次)	NG96-66	7Biii		弥生後期	
RK8B層			緑灰色粘土質シルト	7		一水田 (99-19次)	庄内～布留式土器 (96-9・97-41・52次)	NG96-66				
RK8C層			暗灰色シルト	≦10			弥生Ⅴ様式 (96-9次)	NG96-9				
RK8D層			暗緑灰色シルト	5-20			弥生Ⅴ様式 (96-66次)	NG96-66				
RK9A層			暗オリブ灰色シルト～極細～粗粒砂混り粘土質シルト	≦20		一土壌・溝 (97-43次)		NG97-41	8A	弥生中期		
RK9B層			暗灰色シルト～シルト質粘土	≦18			弥生Ⅳ様式 (96-66次)	NG96-66 NG96-79	8B			
RK9C層		i	暗オリブ灰色砂礫～細粒砂混り粘土	≦30		一水田面・溝 (97-52次)		NG97-12	8Ci		弥生前期	
		ii	オリブ黒色シルト質粘土	20				NG97-52	8Cii'			
		iii	緑灰色シルト	≦3		一土壌・溝・踏込み (97-41次) ▽水水平断層	縄文段原式・弥生Ⅰ様式 (97-41次)	NG97-52	8Cii			
RK10A層			オリブ黒色シルト	5				NG96-79	9A			
RK10B層		i	灰オリブ色シルト	40						縄文晩期		
		ii	暗オリブ色粘土質シルト	≦5				NG95-79	9B			
		iii	暗オリブ色シルト	≦25								
		iv	オリブ黒色シルト	≦25								
		v	緑灰色シルト～灰色中粒砂	≦5		土器集積・炉 (99-19次) 踏込み (97-41・56・99-41次) 一噴砂 (99-19次)	北白川上層Ⅱ～Ⅲ (99-19次)					
RK10C層		i	黒色シルト	10						9Ci	縄文後期	
		ii	緑灰色シルト	8			縄文土器	NG96-79	9Cii			
		iii	黒色シルト	8			縄文土器 (97-12次)		9Ciii			
		iv	黒褐色シルト質極細粒砂	15								
RK11層		i	灰色砂礫	≦250			北白川上層Ⅱ (99-19次)	NG96-79 NG97-12	10-11			
		ii	暗オリブ灰色粘土	≦70								
RK12A層		i	黒色シルト	5	化石 立石木	▽里木Ⅱ式 (96-79次)	4740±140SI (Gak-14942) (97-52.98-20次)		12Ai	12Aii	縄文中期	
		ii	黒色シルト質細粒砂	10			4910±140SI (Gak-14942) (97-52.98-20次)					
		iii	オリブ黒色シルト質細～粗粒砂	12			(97-52.98-20次)					
RK12B層		i	暗褐色細粒砂質シルト	15			(97-52.98-20次)					
		ii	緑灰色シルト～灰色粗粒砂	30-120			(97-52.98-20次)	NG96-79 NG97-41 NG97-52	12B			
		iii	灰黄色粘土質シルト	30-40			(97-52.98-20次)					
RK12C層		i	灰色中～細粒砂質シルト	12		▽周溝・土壌・焼土 船元Ⅱ (99-41次)	(97-52.98-20次)					
		ii	灰色極粗粒砂～黒褐色シルト	≦90			(97-52.98-20次)					
RK12D層		i	黒色中粒砂質シルト	30		生痕化石 植物遺体	(97-52.98-20次)			12C		
		ii	オリブ黒色シルト質細粒砂	5		生痕化石	(97-52.98-20次)					
		iii	黄灰色シルト質極細粒砂	5		縄文大森山灰 (K-Ah)	マサカタ製石器遺物 (96-79次)					
		iv	オリブ黒色極細粒砂質シルト	10		生痕化石	7230±40BP (Beta-146531) (99-41次) 押型・捺入 (99-41次) 石器製作址 (97-52次)			12D	縄文早期 縄文草創期	
RK13A層		i	灰オリブ色シルト	10-20		マサカタ製石器遺物 (96-79次)	(97-52.98-20次)					
		ii	灰オリブ色火山灰質シルト	5-10		阪手火山灰		NG96-79 NG97-12 NG97-52	13Ai 13Aii			
RK13B層		i	灰色砂礫質粘土	10-20		石器製作址 (97-12次)・ナイフ形石器 (97-52・96-79次)		NG96-79	13B			
		ii	オリブ灰色ガラス質火山灰	5	平安神宮火山灰 (AT)			NG97-52				
RK13C層			オリブ灰色粘土質シルト	10				NG97-52	13C	後期旧石器		
RK14層			緑灰色砂礫混り粘土質シルト	20-40				NG97-12	14			
RK15A層			緑灰色シルト～シルト質粘土	100-150				NG97-12-52	15			
RK15B層			灰色砂礫	≦100		一ゾウ足跡化石	凡 例 一は上面検出遺構 一は下・基底面検出遺構 ▽は地層内検出遺構	NG96-79	16A			
RK16A層			緑灰色シルト質極細～細粒砂	20-30								
RK16B層		i	暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土	120				NG96-79	16B	中期旧石器		
		ii	暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土	10-20								
		iii	灰色火山灰極細粒砂質シルト	10	吾妻火山灰 (Aso-4)							
		iv	緑灰色粘土層	40								

表3 長原遺跡の標準層序(2001)

層序	層序 概念図	岩相	層厚 (cm)	自然現象 自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	C.14yB.P	時 代
最上部層	NG0層	現代盛土	—	—	—	—	近代現代
	NG1層	現代作土	15-25	—	—	—	近世
	NG2層	含細礫灰褐色～黄褐色シルト質砂	6-24	↓地震	↓小溝群・畝間 菅花・唐津・瀬戸英治・備前など 瓦質土器・陶磁器	(400)	室町
	NG3層	含細礫淡黄褐色～灰褐色土質シルト	12-20	↓地震	↓小溝群・畝間・鳥居 瓦器(C・Ⅲ～Ⅳ期)	—	鎌倉
	NG4A層	含細礫黄灰色中粒砂	8-15	—	瓦器 一水田面	—	平安
	NG4B層	暗褐色 礫質砂～ シルト	av.20	—	黒色土器 陶磁器 須恵器 土師器	↓小溝群・畝間 瓦器(C・Ⅱ～Ⅲ期)	
	NG4C層	含細礫黄灰色中粒砂 灰褐色シルト 明黄褐色砂質シルト	av.5 av.15 av.20	—	一水田面 ↓小溝群・畝間 瓦器(C・Ⅰ～Ⅱ期)	(800)	奈良
	NG4D層	10～45 cm にぶい黄褐色シルト質砂	av.20	—	▽掘立柱建物 一水田面 平安Ⅰ～Ⅲ期	—	
	NG5A層	灰色砂礫・シルト質細粒砂礫層を挟む	10-80	—	一鉄路 平城宮Ⅴ～Ⅵ	—	飛鳥
	NG5B層	暗灰色細粒～極細粒砂	2-8	—	一水田面 平城宮Ⅲ	(1,300)	
	NG6A層	暗灰色砂・粘土質シルト	≦20	タニシ	—	—	飛鳥
	NG6B層	暗緑灰色中粒～細粒砂 粘土質シルト薄層と極細粒砂礫層の互層 含砂・礫黒褐色～暗灰色シルト質粘土	≦5 av.10 ≦15	タニシ	一ヒトと偶蹄類の足跡 一水田面 飛鳥Ⅲ～Ⅳ	—	
	NG7A層	灰色粘土・シルト・細礫質粗粒砂 含砂灰色粘土	≦5 av.10	一乾痕	一水田面 飛鳥Ⅲ	—	古墳後期
	NG7B層	明黄褐色砂礫～暗オリブ灰色粘土質シルト 黒褐色砂・礫質粘土・黒色シルト	≦250 ≦35	—	一土手 長原古墳群 埴輪Ⅴ期・TK23・47～MT15	(1,400)	
	NG8A層	暗褐色極細粒砂・粘土質シルト互層 暗褐色粘土質シルト	≦170 ≦5	—	一水田面 埴輪Ⅱ期 TK216	(1,600)	古墳中期
	NG8B層	暗褐色極細粒砂・粘土質シルト互層 暗褐色粘土質シルト	≦170 ≦5	—	一水田面 布留式・庄内式・畿内第Ⅴ様式	(1,700)	古墳前期
	NG8C層	菅灰～黄灰色砂・礫～粘土 暗褐色砂質シルト	≦40 av.10	—	一方形周溝墓・溝 畿内第Ⅲ～Ⅳ様式・凸基式石墓	(2,000)	弥生後期
	NG8D層	暗褐色砂質シルト にぶい黄褐色極細粒砂～中粒砂	av.25	—	一水田面・溝・ヒトの足跡 木葉形石墓	—	弥生中期
	NG8E層	灰色シルト質粘土 黄褐色シルト質粘土	av.10 ≦15	一乾痕	一自然流路の堤 一石器製作所・畿内第Ⅱ様式・石斧	—	弥生前期
	NG9A層	黒褐色砂・シルト質粘土	3-15	一乾痕	一水田面 畿内第Ⅰ様式・長原式・石墓	—	縄文晩期
	NG9B層	灰オリブ～黒褐色砂礫 暗黄褐色シルト質粘土・植物片多含	≦90 10-40	—	土偶 石棒 畿内Ⅰ様式・限作	(2,300)	
	NG9C層	暗灰オリブ色シルト質粘土 暗灰オリブ色シルト・砂	3-14 10-35	一アサカシ イヌガキ	▽石器製作所 ▽土器棺墓 ▽壺状住居・貯蔵穴	—	縄文後期
	NG9D層	黒褐色～暗褐色含シルト質粘土 灰色シルト質粘土～砂礫	2-8 2-10	一乾痕	一遺物Ⅳ式 凹基式石墓	(3,000)	
	NG10層	オリブ黒～灰色シルト・粗粒砂質粘土 暗灰色シルト～粘土質粗粒砂	7-25 av.5	一火山灰層(≠BB7?)	—	—	縄文
	NG11層	緑灰～オリブ灰色礫質砂・シルト	≦80	一地震	—	北白川上層Ⅱ～Ⅲ式	
	NG12A層	灰色シルト質粘土 礫質黒褐色礫質粘土～シルト	≦16 ≦15	一乾痕	—	里木Ⅱ式・北白川C式・石墓	→4,740±140St (GaK-14942)
	NG12B層	暗褐色細粒砂質シルト 暗黄褐色シルト～灰色礫混り砂	av.20 av.10	一地震?	—	→4,900±140St (GaK-14941)	縄文中期
	NG12C層	黒灰色シルト～オリブ黒色シルト質粘土 黄褐色砂礫～灰色シルト質粘土	av.10 ≦15	(火山灰の2次堆積あり) 一シガ・トリの足跡	輪元Ⅱ式	—	
	NG12D層	黒褐色～灰色粗粒砂 黒褐色シルト質粘土・植物片多含	5～10 av.10	—	▽土器 ▽石器製作所 凹基式石墓	→4,900±100Cb (GaK-14941)	縄文前期
	NG12E層	灰色中～粗粒砂・礫混り オリブ黒色シルト	av.40 ≦20	—	—	—	
	NG12F層	灰色砂・一部シルト質 黄灰色ガラス質火山灰	≦30 ≦5	一横大路火山灰層 (Ah)	—	→6,300	縄文早期
	NG12G層	オリブ黒色極細粒砂質シルト 灰色礫混り砂・シルト層を挟む	20～30 ≦60	—	押型土土器	—	縄文草創期
低位段丘構成層	NG13A層	灰色細粒シルト 灰黄～灰白色細粒シルト (火山灰質)	≦5 av.7	一暗色帯 一乾痕	▽石器製作所 削器・ナイフ形石器・剥片・石核	(15,000)	後期旧石器
	NG13B層	黄褐色～灰褐色シルト質粘土 黄褐色粗粒シルト質火山灰	≦5 ≦5	—	剥片・石核	→25,000	
	NG13C層	暗灰黄～暗褐色シルト質粘土	av.12	一乾痕	—	—	中期旧石器
	NG14層	灰白～緑灰色シルト質砂～砂質粘土 灰色砂礫～砂質シルト	20-80	—	▽石器製作所 搔器・ナイフ形石器・細部調整剥片石器	—	
	NG15層	黄灰色～緑灰色粘土～砂礫 シルト・砂礫	150-450	ヒメマツバダ 一ナウマンゾウの足跡	—	—	→87,000 →91,000
	NG16A層	暗灰～灰褐色シルト・礫混り砂互層	≦150	一化石林・ナウマンゾウとオオツノジカの足跡化石 一吾彦火山灰層層理 (A s o-4) 一北花田火山灰層層理 (K T z) 一ゾウの足跡状の凹み	—	—	
	NG16B層	暗褐色泥炭質粘土：沼沢地性層 灰色火山灰質砂質粘土～シルト：河成～沼沢地性層	≦20 ≦25	—	—	—	→91,000
	NG16C層	灰色砂礫：河成層	≦260	—	—	—	
	NG17A層	オリブ灰色砂質粘土：古土壌	av.10	—	—	—	→91,000
	NG17B層	オリブ灰色砂質粘土質シルト：沼沢地性層 緑灰色粗粒砂質シルト：河成～沼沢地性層	av.20 av.10	一ナウマンゾウ臼歯 (ラメラ片)	—	—	
中位段丘構成層	NG17C層	緑灰色極細粒砂～細礫：河成層	av.10	—	—	—	→91,000
	NG18層	緑灰色砂質シルト～緑灰色砂礫	av.65	—	—	—	
低位段丘構成層	NG19層	暗緑灰色砂質粘土～緑灰色砂礫	av.50	—	—	—	→91,000
	NG19層 (下眼未詳)	緑灰色砂混り粘土質シルト、下部で粗粒になる	35<	—	—	—	

→;上面検出遺構 ↓;下面検出遺構 ▽;地層内検出遺構 Cb;炭 St;土壌

[趙哲済2001]に一部加筆

く堆積し、西部では層厚120cmで後述の第8層を覆っている。古墳～飛鳥時代の遺物を多く含むことから、RK7A層、NG6B～7A層に対比できる。第7層は西隣、および南東のNG97-13・97-43次調査では、数層に細分できたが、今回の調査地内では安定した流れ内であったためか、7a・7b層に分けたのみである。また、7a・7b層の違いは東部の肩に近い部分では比較的明瞭であるのに対して、深くなる部分では、両層とも礫主体の組成となっており、細分が困難な個所もあった。

第7b層 黄褐色粗粒砂～礫からなる河成層で層厚は160cm以上ある。西部において第8層以下を大きく削り込んでおり、流路の本流を構成すると想定できる。古墳～飛鳥時代の遺物を多く含み、RK7A層、NG7A～7B層に比定できる。

第8層 暗オリーブ灰色粗粒砂混りシルト層で層厚は20cmある。本層以下は西部でのみ遺存していた。弥生時代後期～終末期の土器片が認められることからRK8B層、NG7B層に比定できる可能性がある。

第9a層 暗緑灰色粗粒砂などからなる水成層で層厚は10cm未満である。RK9A層、NG8A層に比定できる可能性がある。

第9b層 オリーブ黒色粗粒砂混りシルト層で層厚は20cm未満である。畿内第Ⅳ様式の弥生土器甕片が出土した。RK9B層、NG8B層に比定できる可能性がある。

第9c層 暗緑灰色細粒砂～粗粒砂などからなる水成層で、厚い部分で層厚は30cmある。第10a層を削り込んでいる。本層以下からは遺物が出土しなかった。RK9A層、NG8C層に比定できる。

第10a層 オリーブ黒色シルト層で、暗色帯を形成する。層厚は10cm未満である。RK10A層、NG9A層に比定できる。

第10b層 暗緑灰色シルト～緑灰色シルトなどからなる水成層で、数層に細分可能である。層厚は100cmある。現地表下4m以下となる本層下部以下は部分的な掘削により確認したのみである。RK10B層、NG9B層に比定できる。

第10c層 黒色シルト層で暗色帯を形成する。層厚は20cmある。RK10C層、NG9C層に比定できる。

第11層 緑灰色シルト～極細粒砂などからなる水成層で層厚は30cmある。RK11層、NG10・11層に比定できる。

第12層 黒色シルト層で暗色帯を形成する。層厚は10cm未満である。RK12A・B層、NG12A・B層に比定できる。

第13層 オリーブ黒色～灰色極細粒砂質シルト層で層厚は20cmある。サンプリングの結果、火山ガラスを含み、いくつかに分定できる可能性があるが、全体として生物による擾乱を受けており、明瞭な境界は認められなかった。RK12C～RK13B層、NG12C～NG13B層に比定できる。本層上面の高さはTP+4.3m前後である。

第14層 灰白色細粒砂質シルト層で層厚は60cmある。RK15層、NG15層に対比できる。

第15層 緑灰～黒灰色シルト層で暗色帯を形成する。層厚は10cm程度である。RK15層、NG15層あるいはRK16層、NG16層に比定できる可能性があるが、今回の調査結果のみでは判断することが

できなかった。

第16層 緑灰色細粒砂質シルト～シルト質細粒砂などからなり、層厚は40cm以上ある。第15層と同様、RK15層、NG15層あるいはRK16層、NG16層に比定できる可能性がある。

X-154.180



第2節 弥生時代以前の遺構と遺物

古墳時代から平安時代の河道のため、該当する地層は西側10～20mの部分で遺存していたにすぎず、様相は明らかでない。また、縄文時代以前と考えられる第10b層下部以下では、部分的な掘削であるため、遺構・遺物ともに認められなかった。

1) 第10a層上面検出遺構(図6・7)

第10a層上面では、落込みであるSX1001と、溝状の窪みであるSD1001を検出した。いずれも埋土は水成層である第9c層であった。

SD1001 南南西から北北東方向の溝状の窪みである。南では幅3.0m以上、北では幅2.0mと南から北に向かって幅を減ずる。検出面からの深さはもっとも深い部分で0.35mある。遺構ではな

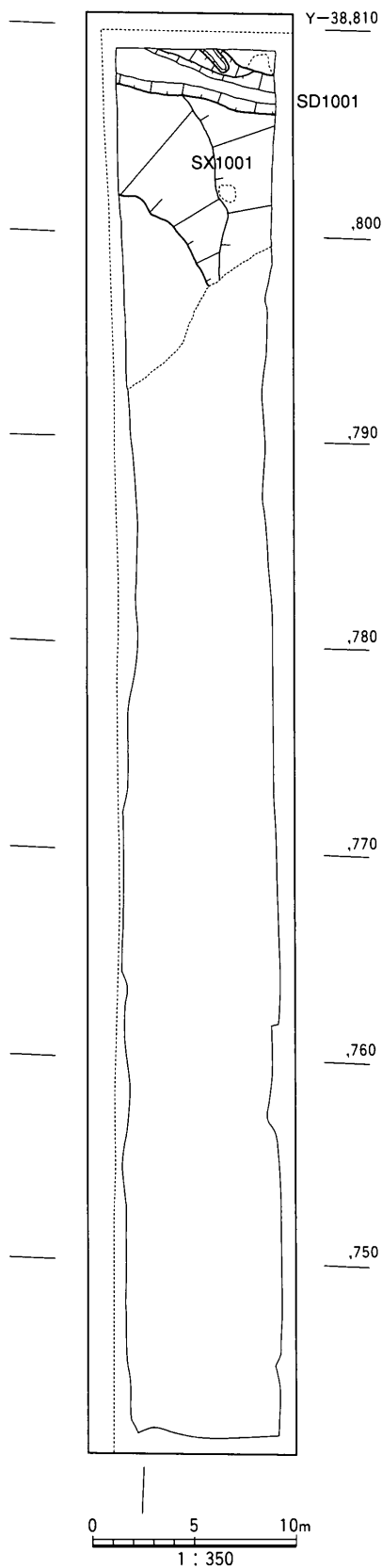


図6 第10a層上面検出遺構

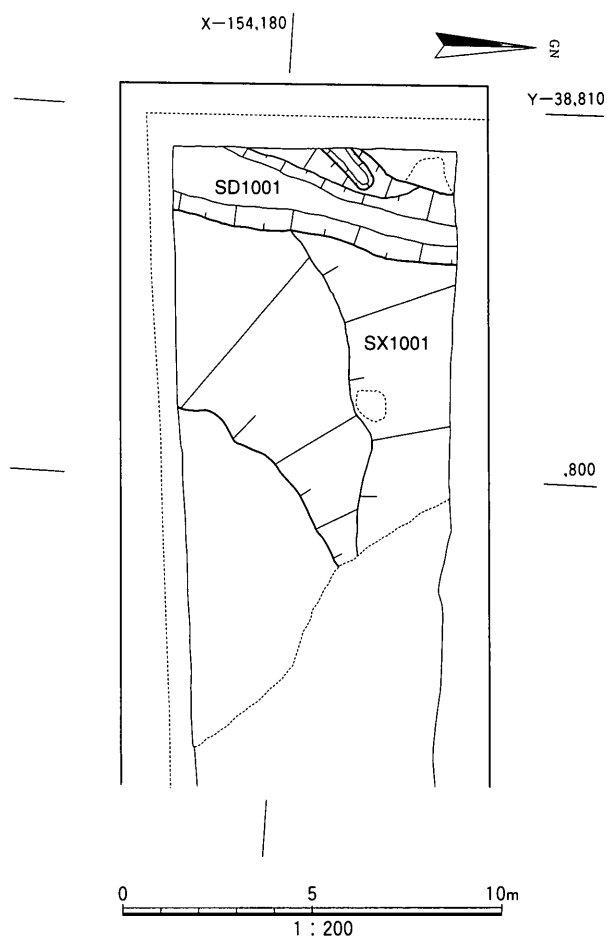


図7 SX1001・SD1001

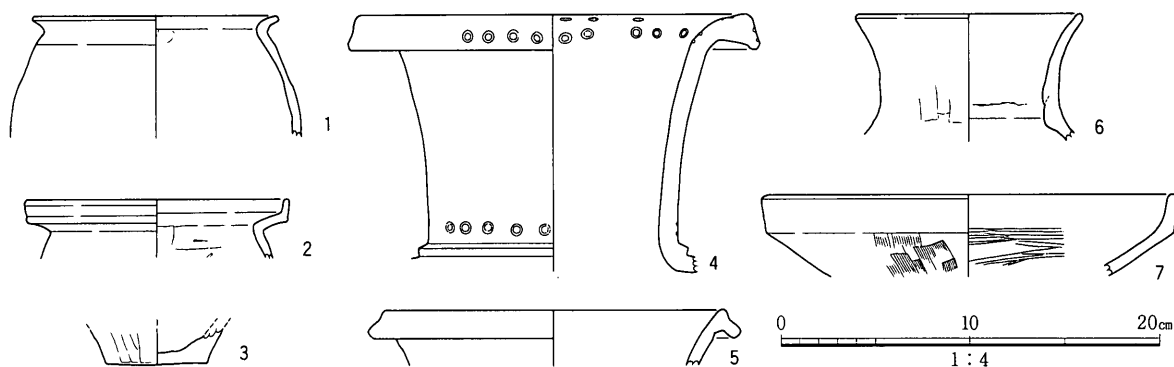


図8 第9b層および第8層出土遺物

第9b層(1)、第8層(2～7)

く自然の水流による窪みの可能性もある。

SX1001 北西方向に下がる落込みで、南東の肩を確認した。もっとも深い部分で検出面からの深さは0.2mある。調査区北西隅でやや底のレベルが高くなることから南西から北東方向の小規模な流路状の窪みである可能性がある。

これらの遺構からは遺物は出土しなかったため、時期は明らかでないが、標準層序から推定される上下の層の年代観より弥生時代中期前葉と推定できる。

2) 第9b層出土遺物(図8)

第9b層からは、弥生土器甕1が出土した。口縁部から体部にかけての破片で、短く外反する口縁部から胴の張る体部へと移行する。磨滅しており細部の調整は明らかでない。畿内第IV様式に位置づけられよう。

3) 第8層出土遺物(図8・図版10)

第8層からは弥生土器甕2・3、壺4～6、高杯7が出土した。甕2は口縁端部が直立する。体部内面は頸部以下にヘラケズリ調整を施す。丹後あるいは但馬地域からの搬入品であろう。甕3は底部が平坦で、外面には板ナデ調整を施す。広口壺4は口縁端部が肥厚し、平坦面をもつ。口縁部と頸部との境には1条の突帯が巡る。口縁部の外端面および口縁部内面、頸部下端外面には竹管文が配されている。広口壺5は口縁端部が垂

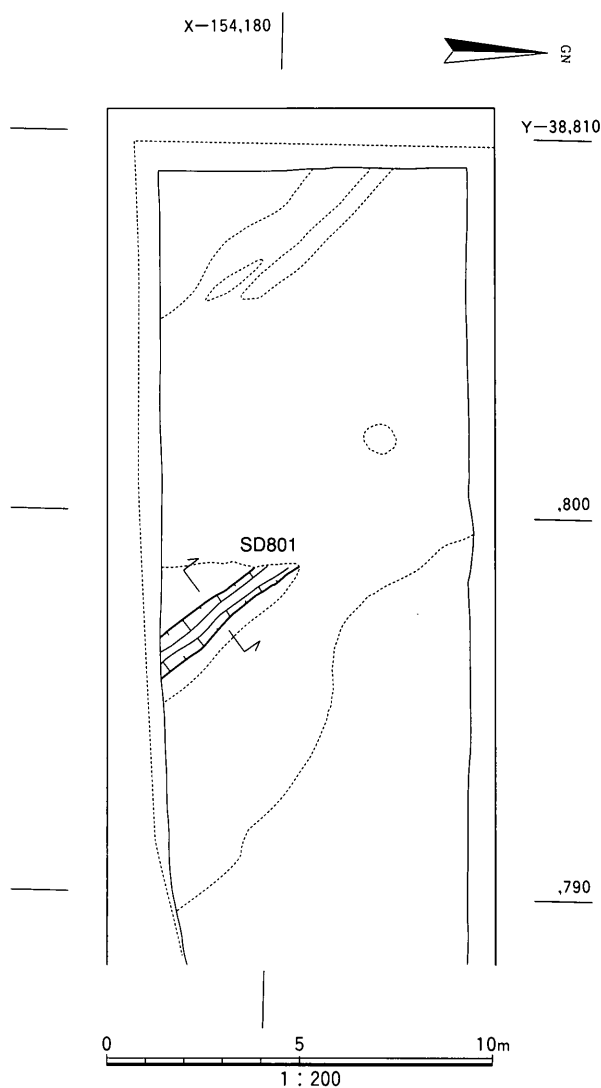


図9 第8層上面検出遺構

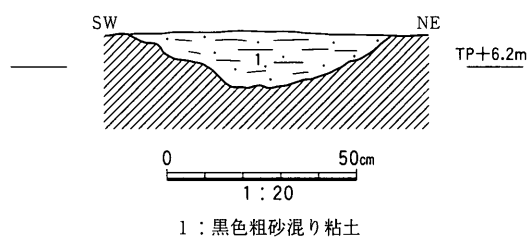


図10 SD801断面図

下する。広口壺6は口縁部がやや外反しながら立ち上がる。端部は丸くおさめる。高杯7は口縁部が屈曲して、立ち上がる。杯部外面はハケメ調整、内面はヘラミガキ調整を施す。広口壺4・5、高杯7は角閃石を含む生駒西麓産の胎土である。これらの土器は、畿内第Ⅳ様式に遡る可能性がある3を除いてはいずれも第Ⅴ様式の範

疇で考えられよう。

4) 第8層上面検出遺構(図9・10、図版1)

第8層上面は第7層の削剥により凹凸が著しいものの溝SD801を検出した。

SD801 幅0.6～0.9mの南東から北西方向の溝で、4.2m分を確認した。方向は第7層による削剥と同じであるが、第7層を埋土とするこれらとは明らかに埋土が異なることから、第8層上面の遺構と判断した。北西部は第7層によって失われている。検出面からの深さは0.15mある。埋土は黒色粗粒砂混り粘土である。遺物は出土しなかったが、第8層より弥生時代後期の土器が出土していることから、弥生時代後期の遺構の可能性はある。

5) 小結

現地表下約4mまでの調査であったこと、古墳時代の流路の削剥により遺存している範囲がごく小面積であったため、弥生時代以前の状況については不明な部分が多い。弥生時代後期については、この時期と推定できる溝を検出していること、遺物が一定量含まれることから集落の一部もしくは、近隣に集落が存在した可能性が高いと推定される。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

1) 第7層の河道(図11・図版2)

弥生時代後期と推定される第8層以上の地層は第7層の削り込みのため連続性が失われている。第7層は河成堆積層であり、河道および氾濫堆積層と考えられる。切合い関係からは第7a層と第7b層に細分可能であるが、東で検出した第7a層の肩部付近以外では、同様に礫を主体とした構成であることから、第7a層基底付近では実際に両者を掘り分けることは困難であった。両者とも流れの向きは南東から北西方向である。

下部に当る第7b層は調査地西端から10～20mより以東で確認された。調査地より東に続く。底は検出できていない。礫を主体とする粗粒な構成である。西部では第8層以下を大きく削り込んでおり、壁面はオーバーハングしている。攻撃面に当たると考えられ、調査地以北では河道がやや北向きに流れを変えていた可能性がある。

上部に当る第7a層は調査地東端部および20m以西に遺存する。調査地より西へさらに続く。第7b層および第8層を削剥している。礫を主体とし、とくに西部に向かうほど粒径が粗くなる。このことから西部の第8層以上が削剥されたのは第7a層によるところが大きいと考えられる。西端部では第8層上にて水流によって形成された溝状の窪みが多数認められた。また、南西隅に向かってさらに0.3mほど周囲より下がっていくようすが観察されたが、調査地外に流路が存在するのかどうかは今回の調査だけでは明らかにできなかった。

この河道および河成堆積層はNG97-13・43次調査[大阪市文化財協会2000]でも確認されており、西方では近畿自動車道建設に伴う調査[大阪文化財センター1986]で検出された流路につながる可能性がある。NG97-13・43次調査では堆積状況の観察から北東から南西へと移動しながら河道が形成されていたことが判明しており、今回の調査でも同様の過程が観察できた。

2) 第7層出土遺物(図12・13、写真3・4、図版10・11)

第7層からは下位の層準に伴うと考えられる遺物を含む、弥生

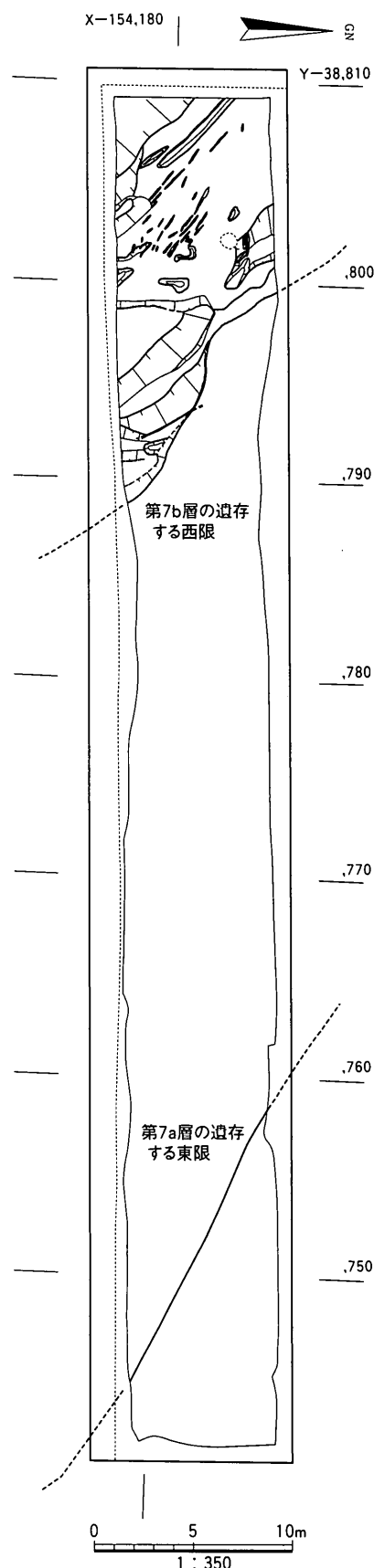


図11 第7層段階の河道

土器・土師器・須恵器など多量の遺物が出土した。

8～12は壺である。8は弥生土器の広口壺で頸部に7条以上のヘラ描き沈線を施す。畿内第Ⅰ様式新段階のものである。9は弥生土器の広口壺で口縁端部は下方に肥厚させる。口縁端部には縦位の櫛描による沈線および竹管文を施した2個1組の円形浮文が付けられている。また、頸部外面および口縁部内面には波状文が施されている。畿内第Ⅴ様式である。10・11は古式土師器の二重口縁壺である。10は口縁部が直立ぎみで端部は面をもつ。11は口縁部が外方へ大きく開く。12は古式土師器の広口壺で、口縁部が大きく外反する。体部内面上端にはユビオサエの痕跡が認められる。これらは庄内～布留期のものであろう。

13は布留式の小型丸底土器である。口縁部の上端部を欠損する。やや平底状で扁球形の体部外面にはハケメ調整が施されている。

14～19は甕である。14は畿内第Ⅴ様式系の甕で、体部の張りは大きくなく、外面に左上がりのタタキメが施される。体部内面は板状工具によるナデ調整である。15は庄内式の甕で、口縁端部が立ち上がり、外面には面をもつ。体部外面には右上がりの細かいタタキメが認められる。内面の調整は風化のため明らかでないが、おそらくヘラケズリであろう。16は古式土師器で、口縁端部が立ち上がり、端部は内傾する面をもつ。体部内面はヘラケズリ調整である。吉備地域からの搬入品の可能性がある。17～19は土師器で、17の口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。体部外面および口縁部内面はハケメ調整で、体部内面の頸部以下はヘラケズリ調整である。18は口縁部がわずかに内湾する。体部外面にはハケメ調整を施す。19は完形である。体部はやや縦長の球形で、口縁部は直線的に外方に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。体部外面はハケメ調整で、内面にはユビオサエの痕跡が顕著に認められる。口縁部は内外ともにナデ調整である。これらは古墳時代中～後期のものであろう。

20は土師器高杯である。有稜で、杯部との段は明瞭である。杯部は内外面ともにていねいなヘラミガキ調整が施されている。5世紀代のものである。

21は土師器杯である。口縁部は内湾し、端部は丸くおさめる。外面は横方向のヘラケズリ、内面はていねいなヘラミガキ調整が施される。

22は曲げ底の土師器竈である。掛口・庇・焚口の一部が遺存している。地面へ設置のための突起は断面が厚く作られている。生駒西麓産の胎土である。

27～54は須恵器である。27～40は杯蓋である。27の天井部は平坦で口縁部との境の稜は鋭い。29～32は天井部がやや丸みをもつ。34は口縁部が外方に開く形態である。天井部と口縁部の境の稜は鈍いが、口縁端部のつくりは比較的ていねいである。35～39は口径が大きく、天井部と口縁部の境は鈍い稜か、もしくは凹線状の凹みによって区分されるものである。35の口縁端部外面には櫛目状の刻み目が認められる。この口縁部の刻み目については、堺市日置荘遺跡の出土例をもとに考察が行われており、杯蓋のみに施され、杯身には見られないことから、成形技法の一工程ではなく、むしろ装飾的な意味をもっていたこと、また、MT15～TK43型式にかけて盛行することなどが指摘されている[江浦洋1988]。40は天井部から口縁部へ緩やかに移行し、天井部には直線で頂部を囲むようにヘラ記号が施されている。

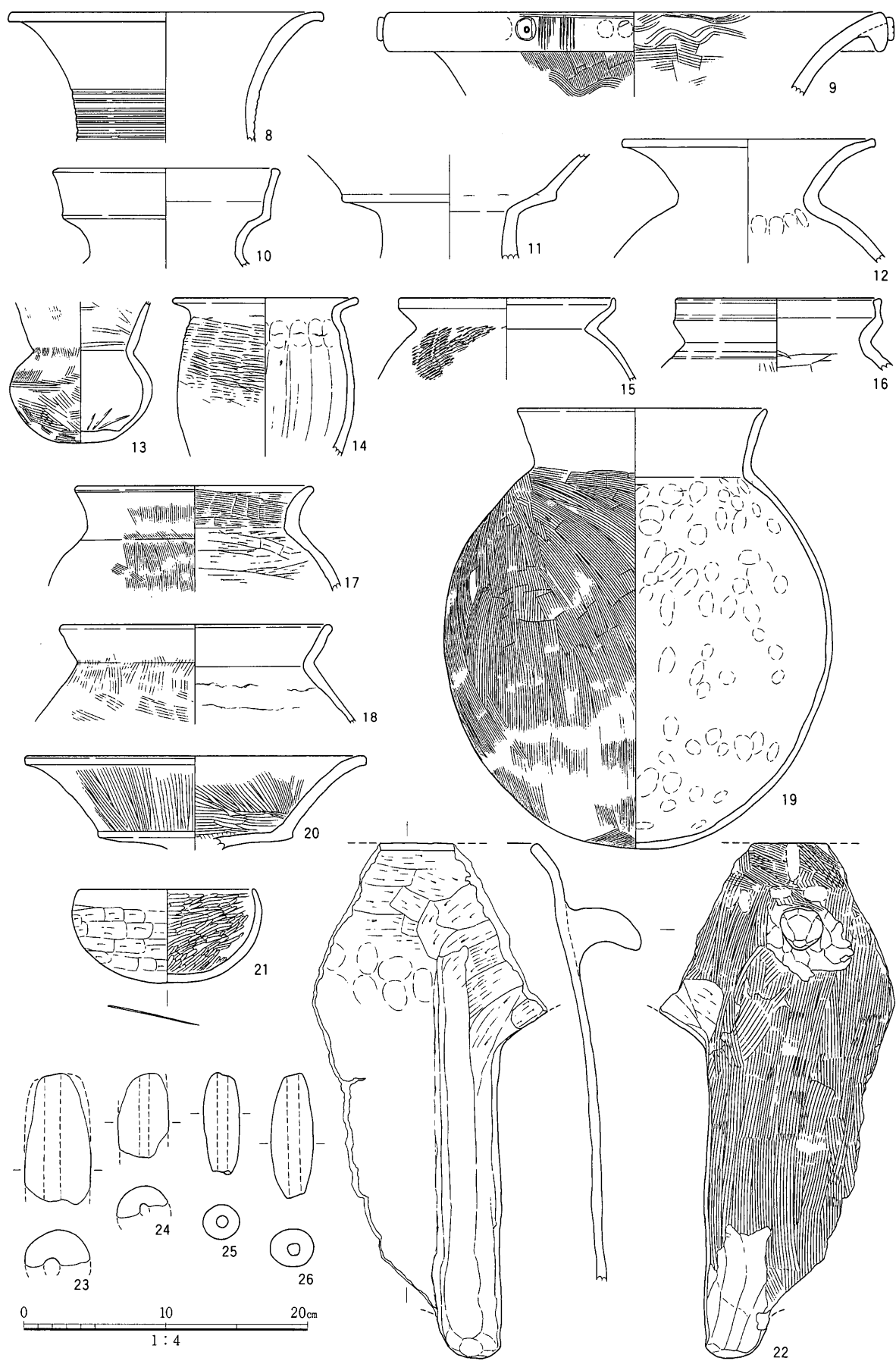


図12 第7a層および第7b層出土遺物(1)

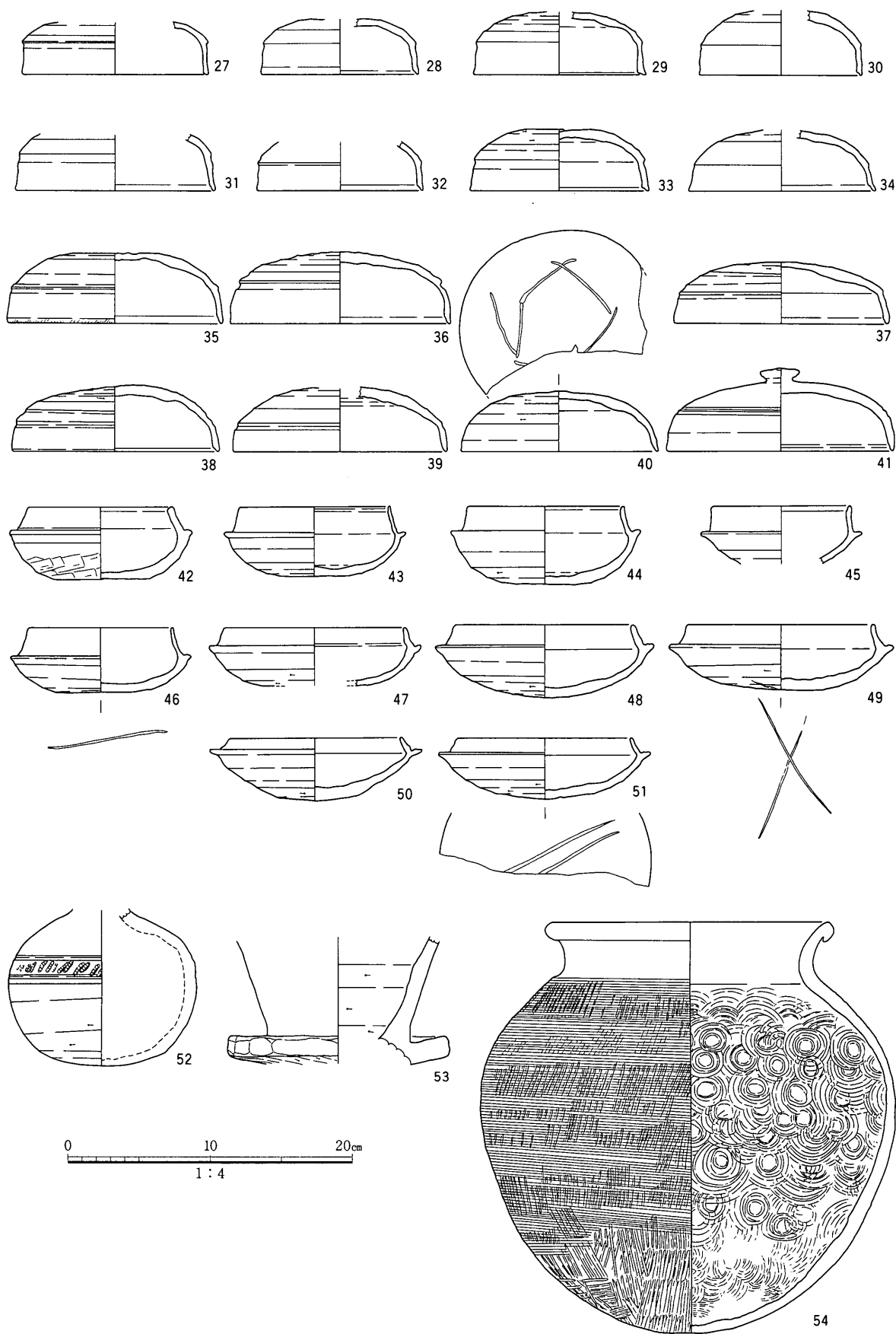


図13 第7a層および第7b層出土遺物(2)



53

写真3 須恵器鉢53



23

25

26

写真4 管状土錘23・25・26

41は有蓋高杯の蓋である。扁平なつまみを有し、天井部と口縁部との境には2条の浅い凹線が巡る。

42～51は杯である。42は全体に厚手で、底部は手持ちヘラケズリである。43～46は立ち上がりが長い。45はとくに口径が小さいが、破片のため歪みがあるかもしれない。46の立ち上がりは薄く、端部は丸くおさめる。底部にはヘラ記号がある。47～51は口径が大きく、立ち上がりも短く内傾する。49・51の底部にはヘラ記号がある。

52は小型の壺である。球形の体部で、体部最大径より上位に2条の沈線を施し、その間を刺突文で充填する。体部下半はヘラケズリ調整である。

53は鉢である。底部は外方に大きく突出し、端部は面取り状にヘラケズリを施している。

54は完形の甕である。口縁端部は外方に折り曲げ、肥厚させている。

これらの須恵器は42がいわゆる初期須恵器であり、27がTK208型式、28～32・43～46がTK23～47型式、33・43がMT15型式、34～39・41・47～49がTK10型式、40・50・51がTK43型式におおむね位置づけられよう。

23～26は土師質の管状土錘である。23・24は欠損が大きい、25・26と比べ大型である。重量は23・24で残存する部分で91.7 g、34.6 g、25・26は45.4 g、65.4 gである。

これらのことから第7層は古い遺物が混るものの、形成時期は5世紀末葉～6世紀後半に主体があったと推定できよう。また、第7a層と第7b層は東部においてでしか、厳密に遺物の掘り分けを行うことができなかったが、確実に第7b層に含まれるものについては須恵器の型式でいえばTK10型式までであった。

3) 小結

古墳時代には調査地は全体を通じて自然流路に当たっていた。規模や深さについては今回の調査結果だけでは明らかにすることができなかったが、周辺の調査結果も合わせると幅100m以上、深さは5m以上あったと推定される。この流路は、これまでの調査でも確認されており、古墳時代中期～後期前葉に形成された西で北にやや振れる方位の六反自然堤防の南裾に沿って流れていたと推定されている。堆積状況の観察からこの流路は北方向へと氾濫による土砂を供給し、六反自然堤防を発達させながら次第に南方向へと位置を移動していったと考えられる。今回の調査では砂礫を主体とした粗粒な堆積物であり、氾濫によって周囲に排出された土砂の量は多量であったと考えられる。この氾濫によ

り、六反自然堤防南の低地はかなり埋積されたと推定することができよう。流路内からは多数の遺物が出土したが、これらは上流である南東方向にあった集落からもたらされたものであろう。今回の調査地に限っていえば、この流路は飛鳥時代にも埋まりきらず、最終的に埋没するのは平安時代になってからのことである。

第4節 飛鳥～平安時代の遺構と遺物

1) 第6層基底面・第7層上面検出遺構と遺物(図14～19・図版3・4・12・13)

前段階まであった第7層段階の河道は、中央部以西においては第7層の古墳時代の段階では埋没しきらずに遺存している。一方、東部では一部において窪みが認められるものの、ほぼ埋没しており、溝などの遺構が認められるようになる。

調査地中央部においては前段階からの流路の窪みをさらに削剥する自然流路、東においては井戸・溝などの遺構が確認された。自然流路は別として、東部において遺構が形成されるのは平安時代になってからのことである。

i) 自然流路(図14～16、図版3・12・13)

NR601 調査地中央から西寄りで検出した南東から北西方向に流れる自然流路である。第6a層を埋土とし、幅約27m、深さ1.2mある。細～粗粒砂を主体とし、第7層に比べると細粒な構成物質からなる。なお、地震の痕跡として本層が噴砂現象を示す個所が複数見られたが、地震が起こった際の地表面については明らかにできなかった。

出土遺物には土師器・須恵器・黒色土器などがある。

55～57は土師器杯である。55は杯Cで杯部は深く、内面には放射状の暗文を、外面には横方向のヘラミガキ調整を施す。飛鳥Ⅰに位置づけられよう。56は杯Cで、杯部内面に放射状の暗文を施し、体部外面にはユビオサエのあとがある。飛鳥Ⅲと考えられる。57は杯Aで、内面に暗文は認められない。底部はユビオサエである。平城宮土器Ⅲを前後する時期と考えられる。

58～61は土師器碗である。58は口縁部が内湾ぎみに立ち上がる。外面にはユビオサエのあとがある。時期を決しがたいが、平城宮土器Ⅱ～Ⅳの頃と思われる。59は口縁部がナデによりわずかに外反する。体部にはユビオサエのあとがある。平城宮土器Ⅲを前後する頃ののものであろう。60は口縁部が強いナデにより内側に曲げられ、短く立ち上がる。平城宮土器Ⅴと考えられる。61は口径に比して深い体部をもつ。口縁部

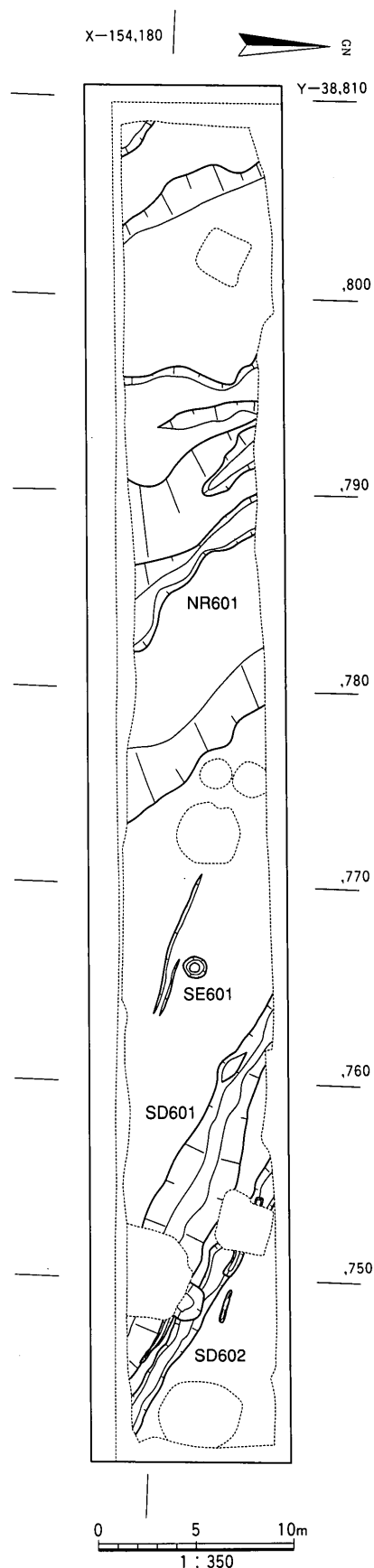


図14 第6層基底面・第7層上面検出遺構

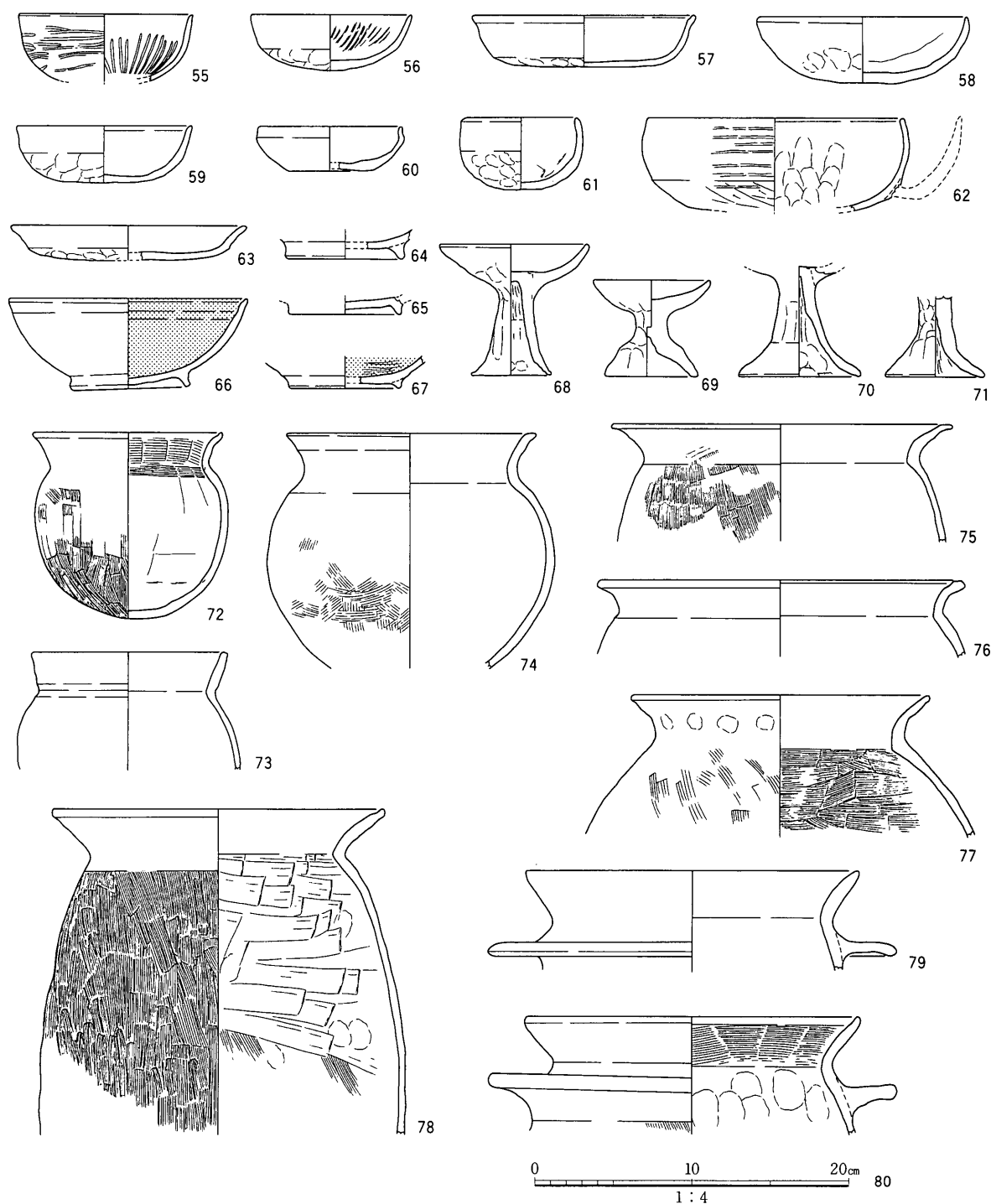


図15 NR601出土遺物(1)

は緩く内湾し、体部中位以下にはユビオサエのあとがある。

62は土師器把手付碗である。把手の部分は欠損する。口縁部は内湾し、端部は平坦な面をもつ。杯部下半はケズリ調整であり、上半にはヘラミガキが施されている。飛鳥Ⅱに位置づけられる。

63は土師器皿である。口縁端部はナデ調整により外反する。底部はユビオサエである。平安時代Ⅱ期古段階であろう。

64・65は高台を有する土師器碗で、高台部のみの破片である。

66・67は内黒の黒色土器碗である。66の口縁部内面には沈線が施されており、平安時代Ⅱ期に位

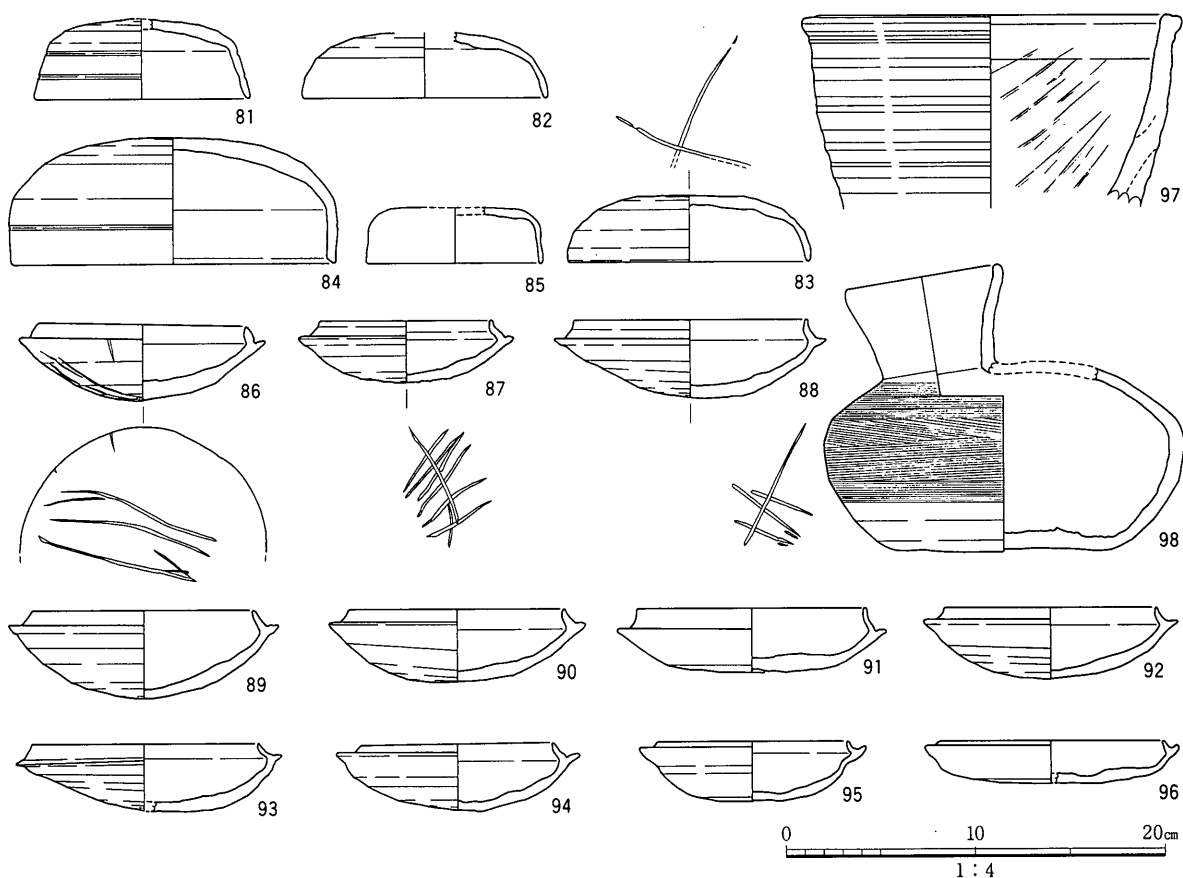


図16 NR601出土遺物(2)

置つけられる。67の内面には細かなヘラミガキが施される。これも平安時代Ⅱ期に位置づけられよう。

68～71はミニチュアの土師器高杯である。脚部が長いもの68・70・71、と短いもの69がある。いずれもユビオサエのあとを顕著に残す粗雑なつくりである。

72～78は土師器甕である。72は球形の体部に外反する口縁部を有する。口縁端部はわずかに上方につまみあげられている。体部外面には縦方向、口縁部内面には横方向のハケメ調整を施す。73の口縁部は体部に比して厚く、直線状に外上方に立ち上がり、端部は平坦な面をもつ。磨滅のため調整は不明である。74の口縁部は外反し、端部は水平な面をもつ。やや扁球形の体部外面にはハケメ調整が認められる。75の体部は長胴と考えられる。口縁部の外反は強く、端部は水平である。体部の内外面にハケメ調整が施されている。76は短く外反する口縁部で、端部は面をもつ。内外面の調整は不明である。77の体部は胴が張ると考えられる。体部の内外面にはハケメ調整が施されている。口頸部の外面にはユビオサエのあとが認められる。78は75と同じく体部は長胴であり、口縁部は外反し、端部には面をもつ。体部外面はていねいなハケメ調整、内面は下半がハケメ調整、上半が板状工具によるナデ調整が行われている。

79・80は土師器羽釜である。いずれも口縁部からわずかに下がった位置に79は水平に、80はやや斜め上方に鐳が付けられている。80の口縁部内面にはハケメ調整が施されている。飛鳥時代のものであろう。いずれも胎土は角閃石を含む生駒西麓産である。

81～98は須恵器である。81～83は杯蓋で、81は天井部と口縁部との境および口縁部の中程に沈線

が施されている。82・83は天井部から口縁部にかけて緩やかに移行する。83の天井部には直線文を交差させたヘラ記号が認められる。

84は口径が17cmある大型の蓋である。口縁部はわずかに内湾し、中程には1条の沈線が巡る。口縁端部は内傾する面をもつ。焼成はややあまい。85は壺の蓋と考えられる。全体に薄手で、天井部は平坦である。

86～96は杯身である。86～88は底部に直線を組み合わせたヘラ記号が施されている。86は平行な直線文、87・88は1条の直線に数条の直線を交差させた記号である。91は立ち上がりは長いものの、薄く、底部のヘラケズリも一部のみである。95・96は底部から受部にかけて屈曲しながら移行する。立ち上がりは低く内傾する。

97は須恵器鉢である。厚手で口縁端部は肥厚し、水平な面をもつ。外面は回転ナデ調整で、内面には板状工具による斜め方向のナデ調整が認められる。

98は平瓶である。平底で、体部上半から下半への移行は緩やかである。底部付近にはヘラケズリ調整、以上はカキメ調整が施されている。

これらの須恵器のうち81・84がTK10型式、86～91がTK43型式、82・83・92～94がTK209型式、95・96・98がTK217型式(飛鳥Ⅱ)におおむね位置づけられよう。97は奈良時代以降に降る可能性がある。

出土遺物には古墳時代後期～飛鳥時代のものが多いが、黒色土器を含むことから、NR601の年代の下限を、平安時代の10世紀と考えることができよう。一方、上限であるが、水流によって流され、下位層に由来する遺物が多く含まれている可能性は高いものの、6世紀末葉の遺物も多く含まれていることが注目される。第7層の年代観とも符号することから、上限については古墳時代後期末葉に遡る可能性を考え、平安時代まで継続した流路としておきたい。

ii) 溝(図17・18)

調査地東側で2条の並行する溝SD601・602を検出した。また、SD602の北で同じ方向の小溝SD603を検出した。北東部ではベースとなる第7層の上部は擾乱などにより遺構が認識しにくい状況であったため、第7層上部を意識的に削り込んで遺構の検出を行った。このため遺構の規模については本来よりも小さくなっている。

SD601 東南東から西北西方向の溝である。幅2.5～3.5mで検出面からの深さは、もっとも深い部分で0.3mある。埋土は下部は暗オリーブ灰色シルトで、上部は水成層起源である灰オリーブ色粗粒砂である。上部の基底付近および遺構の周囲では踏込みとみられる窪みが多く認められた。遺物は土師器小片が出土したのみである。

SD602 SD601の北に接するように並行する溝である。幅0.8～1.2mで、深さはもっとも深い部分で0.3mある。埋土は暗オリーブ灰色粗粒砂混りシルトである。遺物は土師器小片が出土したのみである。

SD603 SD602の北に位置し、幅0.25m、深さは0.05m未満とごく浅い。埋土は暗灰黄色粗粒砂である。遺物は出土しなかった。

iii) 土壇(図17・18)

調査区北端部で土壇SK601を確認した。

SK601 南北0.35m、東西0.4m以上の平面形が方形の土壇であるが、東側が攪乱により失われているため正確な形状は不明である。検出面からの深さは0.35mあり、壁面はほぼ垂直に下がり、底面は平坦である。形状から柱穴の可能性を考慮したが、柱痕跡は確認することができなかった。埋土は粘土偽礫を含む灰黄褐色シルトである。土師器片がごく少量出土したのみである。

iv) 井戸(図17～19、図版4)

調査区中央やや東よりで1基確認した。

SE601 直径0.9mの平面形が円形で、検出面からの深さは0.5mあった。曲物を積んで井戸側としている。曲物は3段分が確認できたが、腐食が著しかったため採集することはできなかった。井戸内からは遺物は出土しなかった。

本段階の出土遺物は自然流路を除いては少なく、溝や井戸などの時期を決しがたいが、わずかの出土遺物および上位層出土遺物との関係から平安時代、10世紀前半代とひとまず考えておきたい。

2) 第6層上面検出遺構と遺物(図20・21、図版4)

第6層上面では溝状の窪みが西で2箇所、東で3箇所認められた。

SD604 南東から北西方向の溝で、幅0.4m、深さ0.2mある。

SD605 SD604に並行し、幅0.5m、深さ0.2mある。

SD606 南南西から北北東方向の溝で、幅0.3m、深さ0.1mある。

SD607 SD606に並行し、幅0.6m、深さ0.3mある。

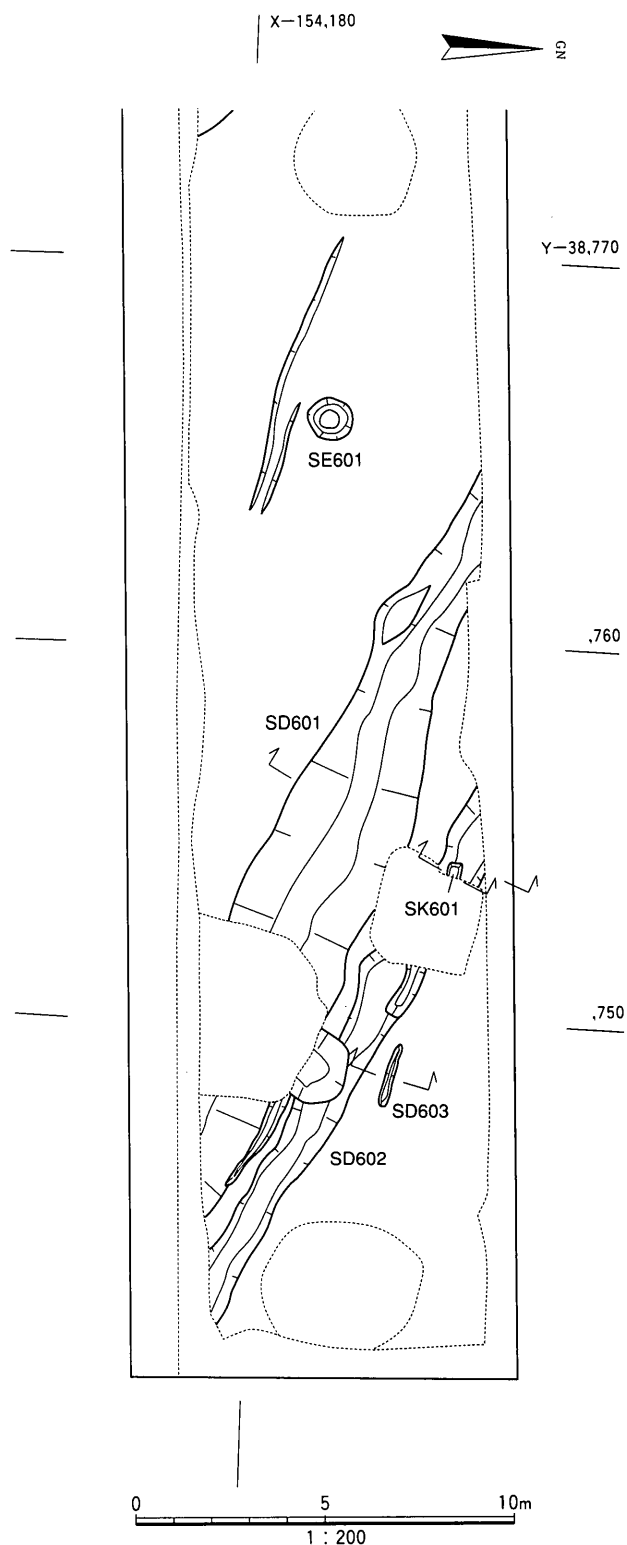


図17 東部第6層基底面・第7層上面検出遺構

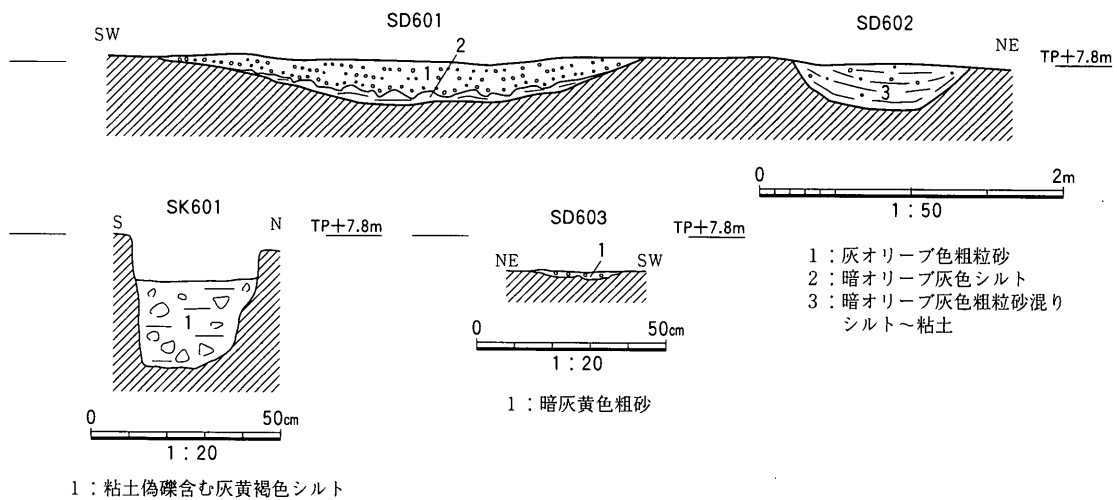


図18 SD601～603・SK601断面図

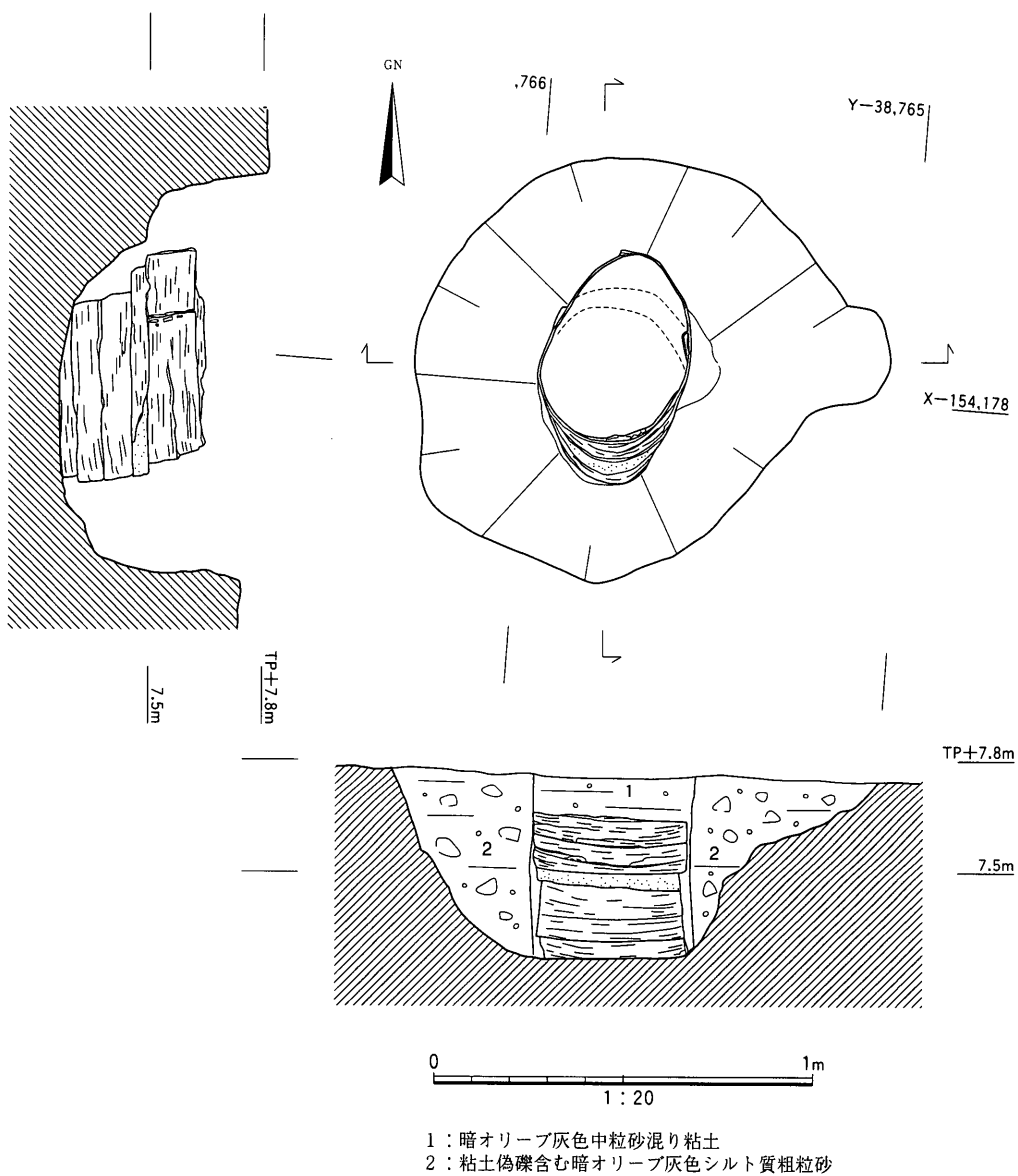


図19 SE601平・断面図

SD608 SD606・607に直交する方位で、幅0.5m、深さ0.3mある。

これらの小溝群の特徴は、色調などが部分的にやや異なる箇所もあるものの、いずれも埋土が水成層の第5層である粘土層であり、加工時形成層なども見られず、人為の痕跡が希薄である。SD606～608は直交する方位にあるなどの疑問もあるが、流路が最終的に埋没する際の自然的要因によって形成された可能性もあろう。

なお、北東部においては第6層は遺存していないことから、前段階と同様、溝などが継続していた可能性が高い。

3) 第5層出土遺物(図22、図版13・14)

第5層は東部ではごくわずかに分布するのみであるが、西部では層厚40cmの水成層として分布している。湿地のような環境で堆積したと考えられる。前段階まで存在した流路の名残は本層の堆積によってほぼ失われる。

第5層からは土師器・須恵器・黒色土器などが出土したが、数量は概して多くない。

99は土師器皿である。口縁部はナデ調整によって外反し、端部は上方にわずかにつまみあげられる。平安時代Ⅲ期新段階のものであろう。

100は土師器杯である。杯底部は平坦で、風化のため調整は明瞭でないが、杯部外面はユビオサエののちヘラミガキ調整、内面には2段の螺旋状暗文が施されている。平安時代Ⅱ期のものであろう。

101～103は土師器碗である。101・102は底部と口縁部の境がやや明瞭であるのに対し、103は不明瞭である。高台は101の高台は薄手である。体部下半にはユビオサエのあとがある。平安時代Ⅲ期古段階に位置づけられよう。

104は黒色土器碗である。高台が遺存するにすぎないが、内底面にはヘラミガキが施されている。平安時代Ⅲ期のものであろう。

105～106は土師器甕である。105の口縁部は小型で短く外上方に立つ。端部は丸くおさめる。外面はハケメ調整、内面は板状工具による強いナデ調整である。106はほぼ完形であるが、

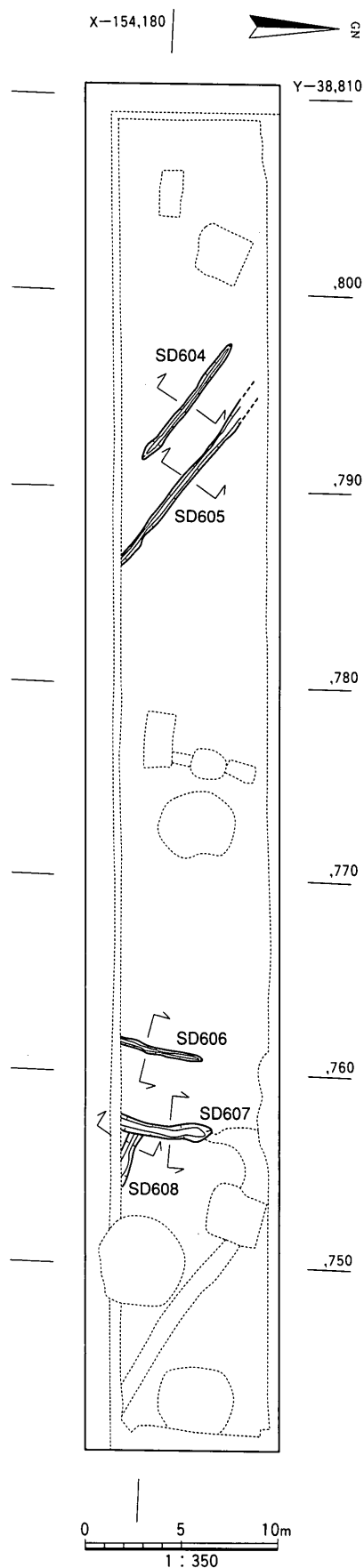


図20 第6層上面検出遺構

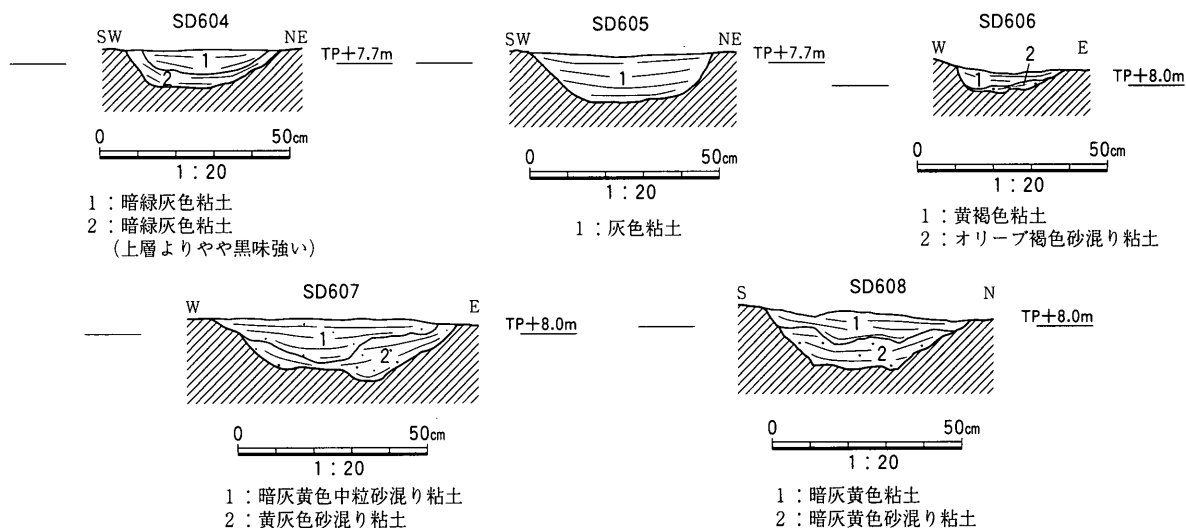


図21 SD604～608断面図

全体に粗雑なつくりの印象を受ける。球形の体部外面はハケメ調整、内面は下半がユビオサエ、上半が板状工具によるナデ調整である。

107は土師質の鉢形土器である。口縁部にナデ調整を施すほかは内外面ともユビオサエのあとを顕著に残しており、粗雑なつくりである。製塩土器と考えられよう。

108は須恵器壺の下部である。体部の最大径付近に明瞭な稜があり、高台は底部と体部との境にある。平安時代Ⅰ期ないしはⅡ期に位置づけられよう。

109は須恵器提瓶である。飛鳥時代に属するものであろう。

これらの出土遺物から、第5層の年代は平安時代中頃、10世紀末葉～11世紀中葉と考えられる。

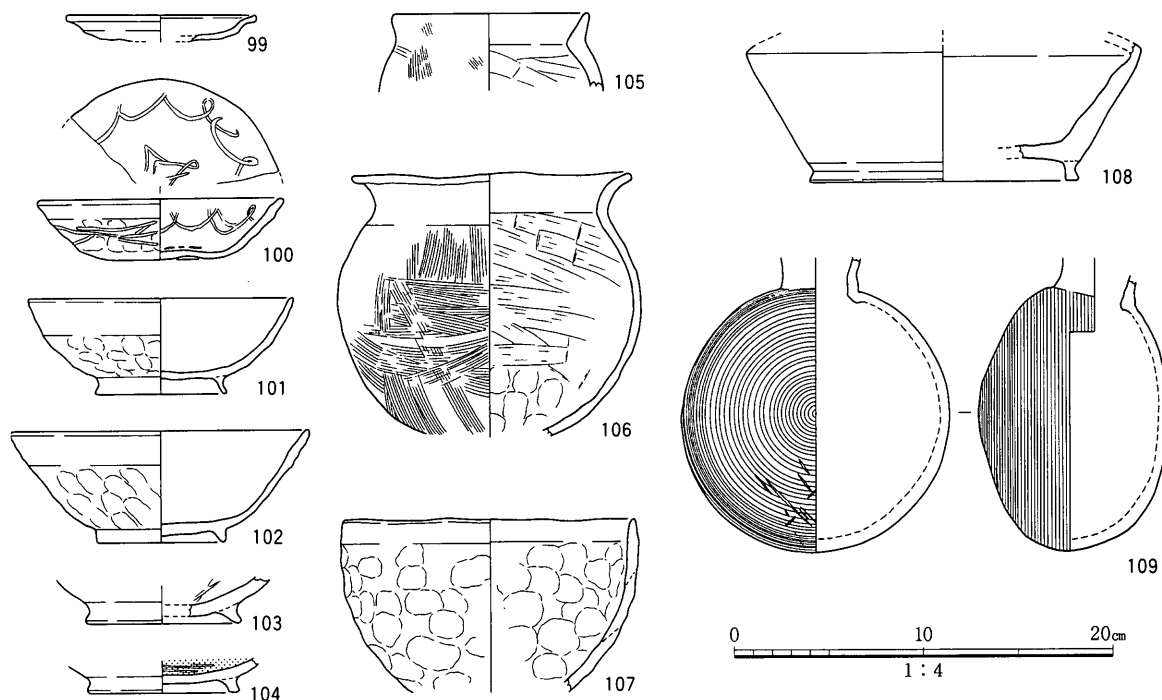


図22 第5層出土遺物

4) 第4c層内・基底面検出遺構と遺物(図23～26、原色図版1、図版4～6)

第5層を覆う第4c層の基底面においては、中央以西では不整形な落込みを確認した。一方、東端部では第4c層内より溝・土壙などを検出した。東部は集落に係わる一部であり、以前流路のあった中央部以西は水分を多く含んだ湿地のため、積極的に利用されなかったものと推定できる。

i) 溝(図24～26、図版5・14)

東端部において溝1条を確認した。

SD401 南東から北西方向の溝で、幅0.8～1.0m、深さはもっとも深い部分で0.5mある。後述の**SX401**の下位に位置する。前段階の**SD602**とほぼ同じ位置にあることが注目され、平安時代を通じてこの部分に溝が存在していた可能性がある。埋土は下部が自然堆積土、上部が人為的な埋戻し土である。土師器皿・黒色土器碗が出土した。

110は「て」字状口縁部の土師器皿である。**111**は黒色土器碗で、内底面は丸く凹む。これらは平安時代Ⅲ期新段階に位置づけられよう。

ii) 土壙(図24～26、図版6・14)

東端部において数基の土壙を検出した。

SK401 平面不整形の土壙で南が浅く、北に向かって落込む。深さは0.3m以上ある。埋土は炭化物を多く含んでおり、土師器細片が比較的多く出土したことからゴミ穴として利用された可能性がある。

SK402 北部が調査区外のため正確な形状・規模は不明であるが、直径3m程度の平面形が円形の土壙と推定できる。切合い関係から**SK403**より古い。検出面からの深さは0.3m以上ある。**SK401**同様、埋土に炭化物が多く含まれることからゴミ穴として利用された可能性があろう。

112は土師器杯で、底部外面にはユビオサエのあとが認められる。口縁部はナデ調整によってわずかに立ち上がる。平安時代Ⅰ期に属することから、本来は下位層に含まれていたものであろう。

SK403 北部が調査区外のため形状は不明である。深さは0.25m以上ある。**SK401**・**402**同様、埋土に炭化物を多く含んでお

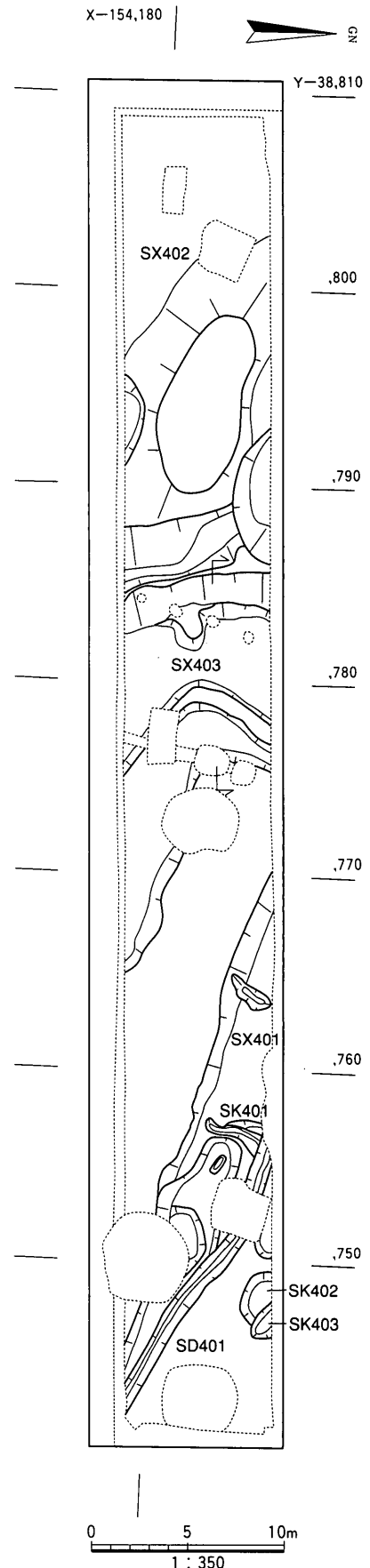


図23 第4c層内・基底面検出遺構

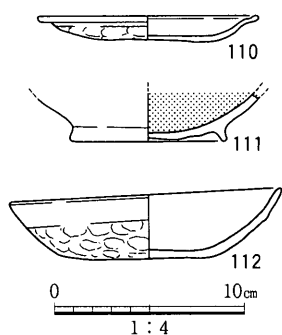


図24 SD401・SK402
出土遺物

り、同じくゴミ穴として利用された可能性がある。

iii) その他の遺構(図23・25・26、図版5・6)

その他の遺構としては調査地全域で検出した不整形な落込みがある。

SX401 調査地東部で検出した北に向かって一段下がる落込みである。肩の方位は東南東から西北西であり、前段階の流路の方位に近似する。深さは0.3～0.4mある。下位層においても同方向へいくぶん下がる堆積状況を示していることから、本来は自然に形成された窪みを改変した可能性がある。

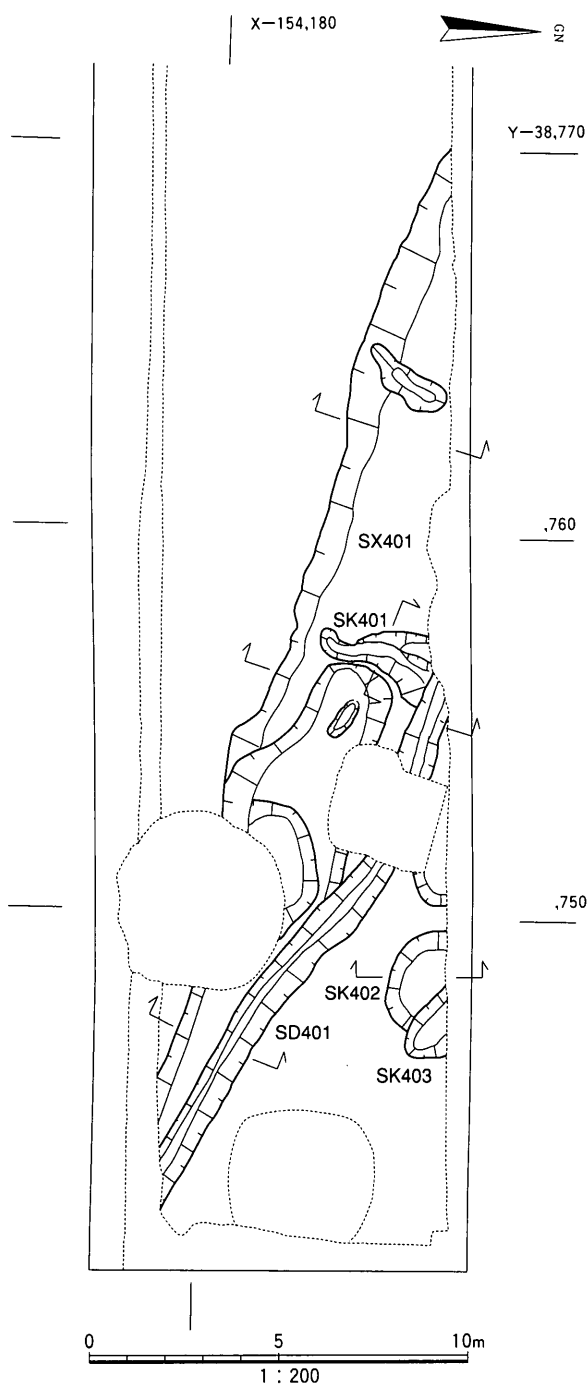


図25 東部第4c層内・基底面検出遺構

SX402 調査地西部で検出した不整形の落込みである。落込みの方位は東南東から西北西で、一部に高まりを残しながら周囲より0.2～0.3m程度窪んでいる。下位の第5層には酸化鉄の集積が顕著に認められ、植物の根の痕跡と考えられる。落込みの方位が下位の流路とほぼ同様であることから、水分を多く含んだ状態で徐々に堆積し、アシなどの植物が生い茂る環境であったのかもしれない。

SX403 調査地中央部で検出した落込みである。幅9～10mで、深さは0.2～0.3m程度である。中央に畦畔状の高まりが残されている。西北西方向に延びたのち北北東に向きを変えている。屈曲は東肩が強く、西肩は緩やかである。不整形であることから、遺構ではなく、一時的な水流などによってできた落込みと推定できよう。

これらの時期であるが、遺物は一定量出土するものの細片が多く、確実に時期を決するだけの資料はない。しかしながら第5層出土の遺物およびわずかではあるが遺構から出土した遺物の年代観から11世紀中葉～後葉に中心があると推定できる。

5) 小結

古墳時代に流路の大部分は埋没するものの、飛鳥～奈良時代を通じて調査地は河道の一部であった。その後、度重なる氾濫の結果、河道の位置が

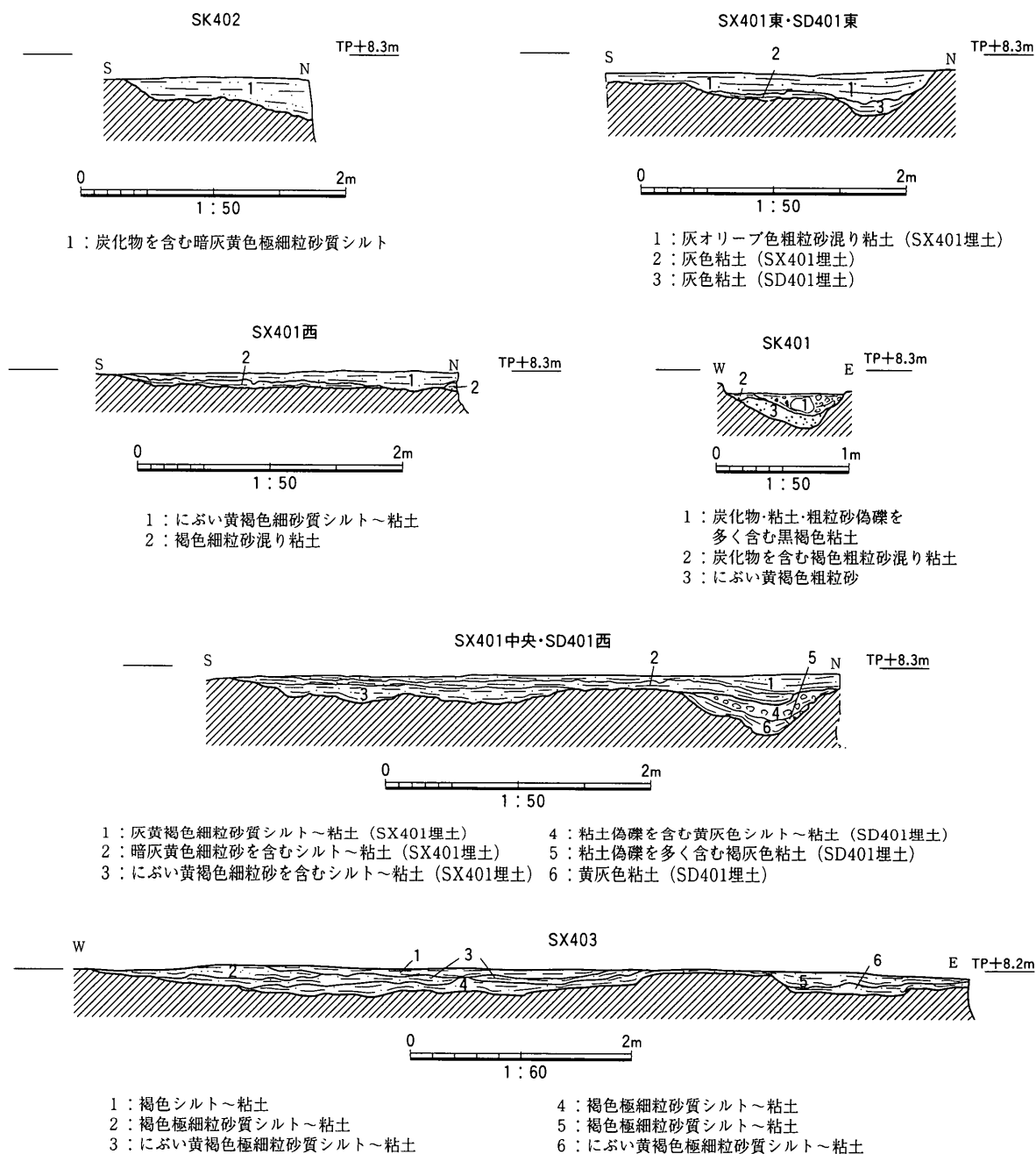


図26 SK401・402、SD401、SX401・403断面図

西に移動するにつれ、東から徐々に高燥化していったと考えられる。遅くとも平安時代、10世紀には少なくとも調査区東端部は人々が足を踏み入れる地になっている。しかしながら、西には流路が存在しており、安定した生活環境であったとはいえない。遺構としては数条の溝と井戸が検出された。SD601・602は流路の方向と同様であり、東にあったであろう生活域と河原とを画する目的で掘削されたものと考えうる。また、耕作域への用・排水路を兼ねていたかもしれない。しかし、総じて遺物の量も少なく、生活空間の縁辺部の印象を受ける。

11世紀代になると流路はほとんど埋没するものの、アシなどの生い茂る湿地状の場所として残されていたと考えられる。ベースは水分を多く含む粘土であり、活動の場としては前段階同様、不適であった。東部はさらに高燥な環境となり、いっそうの土壌化が進んでいる。この段階にも溝SD401がほぼ

同じ位置に掘られており、前段階と同様、生活域を画する目的のものであったのであろう。前段階に比べると遺物量は増加しており、ゴミ穴として利用されたとみられる土壙も複数認められる。第4c層は周辺の調査でも東に向うほど厚く遺物の包含する量も多い。11世紀代には低湿な場所にほど近いこのような縁辺部に至るまで生活域の一部として利用されるようになったと考えられよう。

第5節 鎌倉時代以降の遺構と遺物

平安時代には生活域と流路あるいは湿地状の地点と調査地は二分された土地利用であったが、鎌倉時代、第4b層の段階には作土層が認められ調査地全域が耕作域となる。一旦、第4a層の洪水に見舞われるが、その後は現代盛土層である第0層により覆われるまで、調査地は耕作域として利用され続けている。

1) 第4b層出土遺物(図27・図版14)

作土層である第4b層からの出土遺物は総じて少ないが、土師器・須恵器・瓦器などがある。

113・116～119は土師器である。113は土師器皿で口縁部は外方に屈曲し、端部はつまみあげている。平安時代Ⅳ期の資料であろう。116・117は甕で、強いナデ調整によって口頸部と体部との境は浅く凹んでいる。口縁部は短く外反し、いくぶん肥厚する端部は平坦な面をもつ。扁球形とみられる体部外面にはユビオサエのあとが顕著に残る。平安時代Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられよう。118・119は羽釜である。118は口縁部が直立するタイプのものである。119の口縁部は短く外反し、頸部から下がった位置に鐙がある。口縁端部は両者とも肥厚し、端部は平坦な面をなす。いずれも生駒西麓産の胎土である。

114は須恵器杯Bである。杯部はやや丸みをもつと考えられ、本来は下位層に属する奈良時代のものであろう。

115は瓦器碗である。高台は薄く、暗文が施される内底面は浅く凹む。外面にはユビオサエのあとがある。

これらの出土遺物から第4b層の年代は12世紀後半～13世紀代の平安時代末葉～鎌倉時代に位置づけられるであろう。

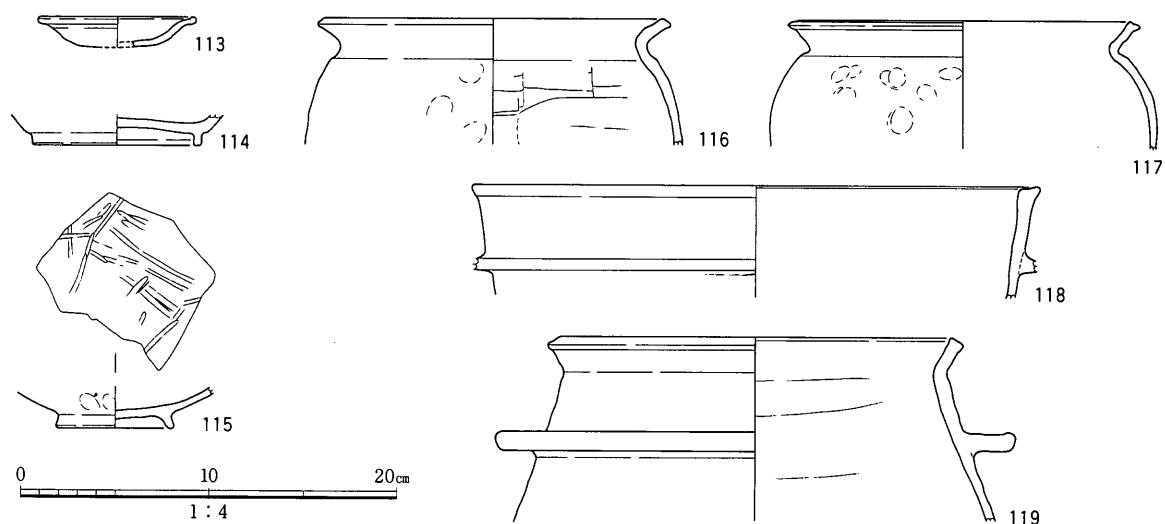


図27 第4b層出土遺物

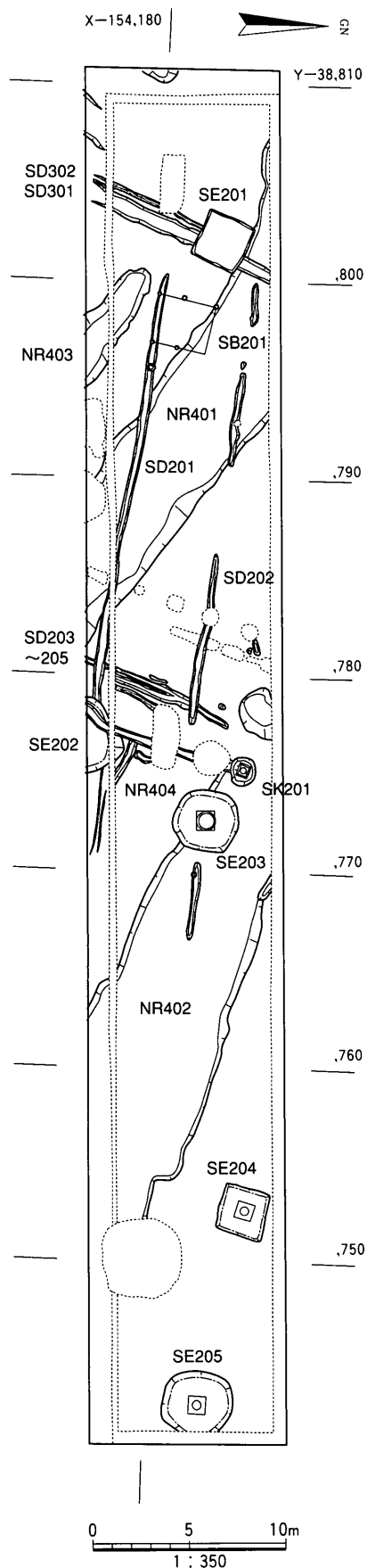


図28 第4b層上面検出遺構(1)

2) 第4b層上面検出遺構と遺物(図28～34、図版7～9・14)

重機による掘削後、調査を第4b層上面から開始したため、本来はそれより上位に遺構面があるものも一括して検出している。ここでは出土遺物のほか、調査地の南壁の観察および埋土の特徴から時期を判断して、時代別に記すこととする。

i) 鎌倉時代の遺構(図28・29)

調査地の全域で水成層である第4a層を埋土とする小流路を4条確認した。

NR401 調査区西部で確認した南東から北西方向の流路である。幅6.4m、深さはもっとも深い部分で0.3mある。

NR402 調査地中央やや東よりで確認した。東南東から西北西方向の流路である。幅5.4～7.0m、深さはもっとも深い部分で0.4mある。

NR403 NR401の西に位置し、NR401と同じ方位である。もっとも広い部分で幅2.5m、深さ0.1mある。

NR404 NR401・402の間に位置する。幅0.5m、深さ0.1mで、わずかに残存するのみである。

これらの第4a層を埋土にもつものは、肩部から底部への傾斜が緩やかであること、底が丸く窪み、平坦ではないことから、島畠の水田部分とは考えがたく、洪水の水流により第4b層が削られてできたものと判断した。耕作に係わる畦畔あるいは小溝などは第4a層および第3層の耕作によって失われたのであろう。土師器・須恵器片のほか、瓦器・瓦片などが出土したが、細片が多く図化できるものはない。

ii) 室町時代の遺構(図28～30)

本来は第3層の遺構である。調査地西部で検出した2条の溝が該当する。

SD301 調査地西部で検出した南西から北東方向の溝である。幅0.9m、深さは0.1m未満と幅に比して浅い。底には凹凸がある。形状からSD302のような小溝が繰り返し掘削され、幅広の溝として認識された可能性がある。埋土は水成層である褐色極細粒砂である。

SD302 SD301の西に位置し、同じ方位である。幅0.15mで、深さは0.1m程度である。埋土は、第4b層の偽礫を含む粗粒砂で

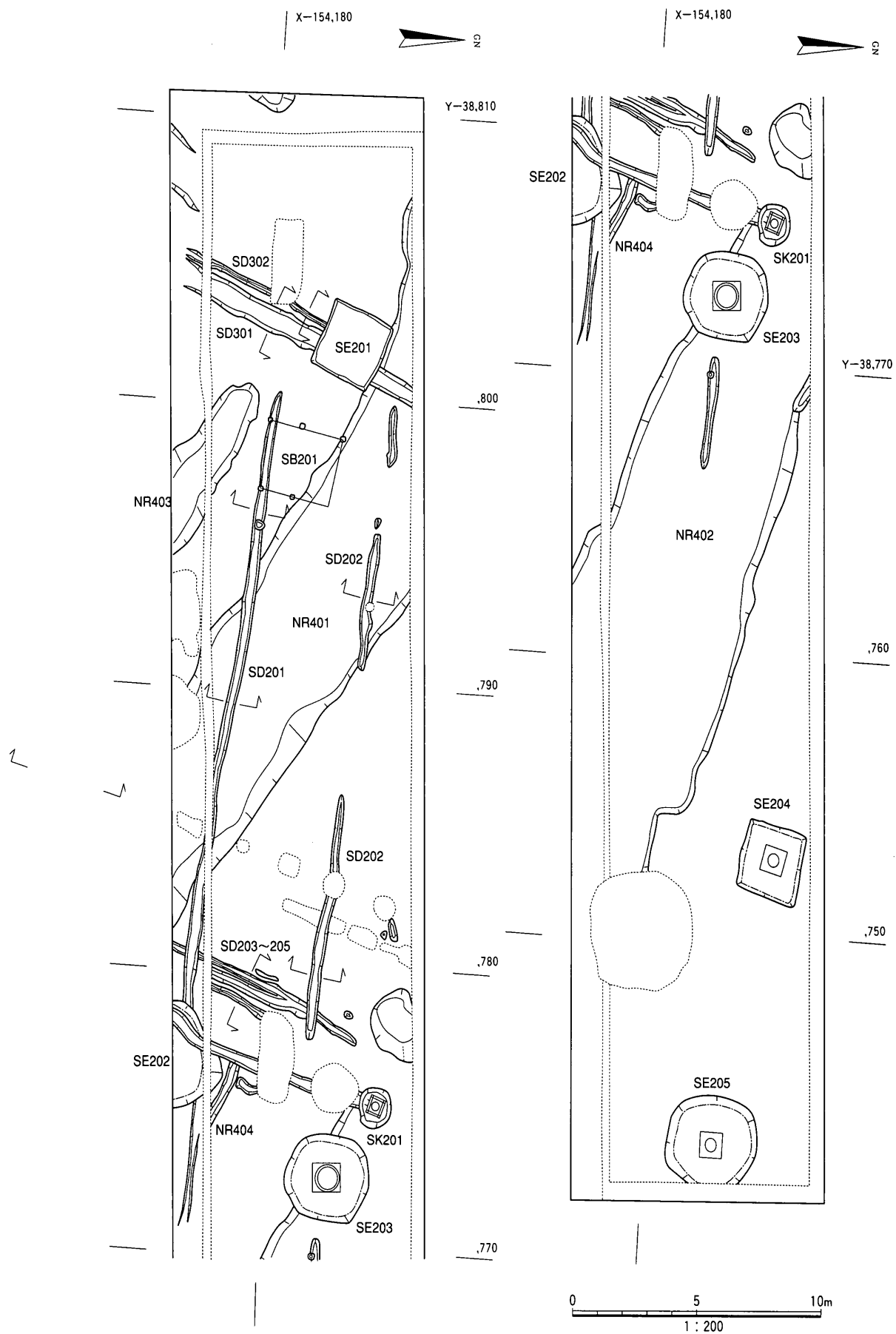


図29 第4b層上面検出遺構(2)

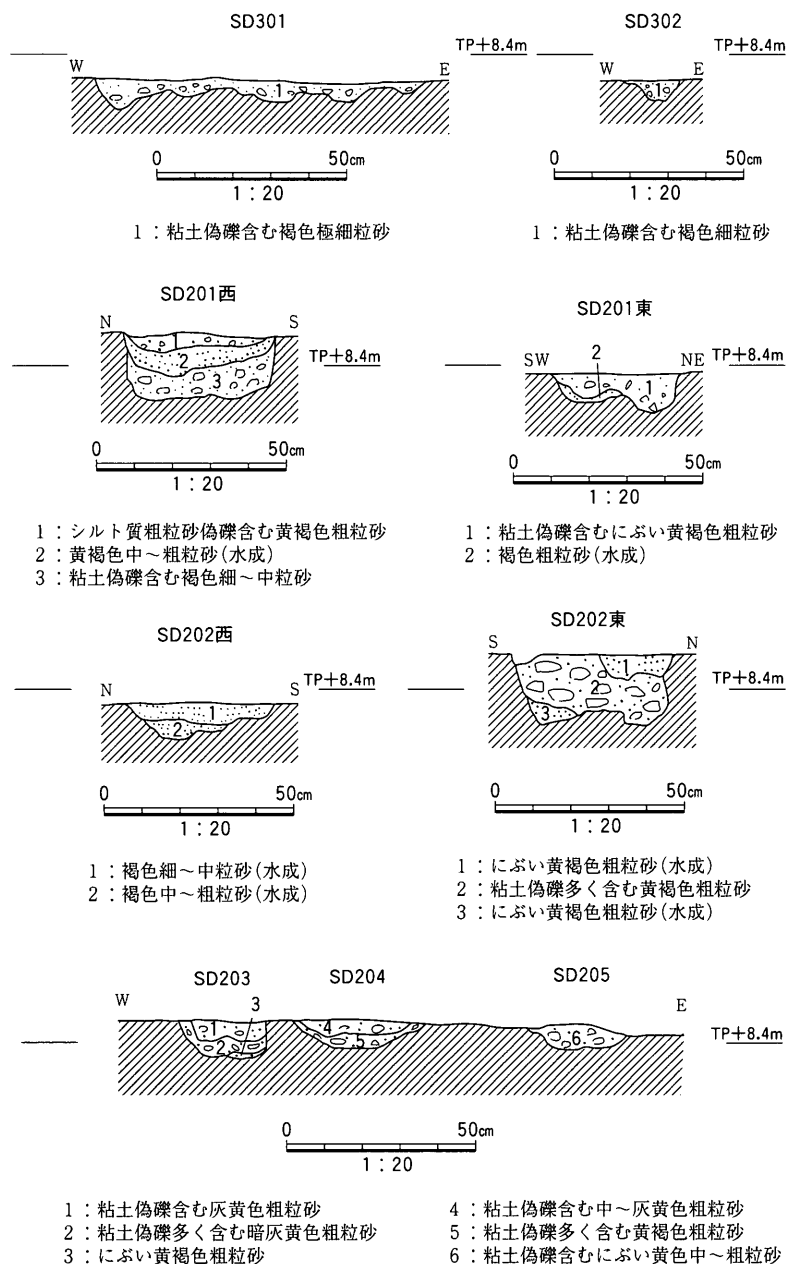


図30 SD301・302・201～205断面図

あるが、加工時の形成層のみが遺存していたのであろう。北部では本層の上部に水成層が認められている。

本層以上、現代盛土がされるまでの間、作土層が連続していることから調査地は耕作域であったと考えられる。今回検出した小溝は耕作に係わるものであろう。

iii)江戸時代以降の遺構と遺物(図28～34、図版8・9・14)

井戸・集水施設・溝・掘立柱建物などがある。本来は第2層の段階の遺構である。

井戸は5基を検出した。掘形が円形のもの(SE202・203・205)と方形のもの(SE201・204)の両者がある。これらの井戸は深く、また、周囲からの湧水が著しいため、検出面から一度に掘削することができず、周囲の調査の進行に応じて随時、内部を掘り下げる方法で調査を行った。なお、掘削限界深度付

近で下部施設が検出された井戸がいくつかあるが、墨痕の見られたSE204の板材を採集したほかは、それ以深の調査は行っていない。

SE201 調査区西部で確認した平面形が方形の井戸である。掘形の規模は一辺2.3～2.4mである。検出面から2.7mで底に達する。井戸枠などの施設は確認できなかったが、最終的に中央に円形の窪みが観察できたことから、水溜めとして桶などが使用されていたのかもしれない。

SE202 調査区中央南部で検出した平面円形の井戸である。南半が調査区外のため正確な規模は不明であるが、直径3.8m程度であると思われる。地層観察用のアゼ上に位置していたことから、検出面から1.8mまで調査できたにすぎない。井戸枠などの痕跡は確認できなかった。

SE203 調査区中央部で検出した平面円形の井戸である。直径は3.2mある。検出面から3.5mで下部構造施設が確認された。下部施設は板材を組み合わせた箱形をしており、内部に水溜めとして桶が

用いられている。同様な井戸は東接するNG97-13次調査[大阪市文化財協会2000]のほか近畿自動車道建設に伴う各調査でも見つかっている。また、桑津遺跡のKW91-18次調査[大阪市文化財協会1998c]では良好に遺存しており、まとまって検出されている。桑津遺跡例は江戸時代のものである。

また、最上部の井戸枠は明治以降になってコンクリート製に補修されている。

国産陶磁器類が出土した。

120~121は肥前系磁器碗である。122は肥前系青磁仏飯具である。脚部端および脚内は露胎である。123は施釉陶器碗で、高台はケズリによって作り出されている。124は焼締陶器播鉢である。播目は櫛状原体により、密に施されている。

SE204 調査地東部で検出した平面形が方形の井戸である。一辺は2.5mある。検出面から約2mにて下部施設を確認した。SE203同様、下部は板材を箱状に組合わせており、上部は円形に削り貫かれている。内部には水溜めとして桶を用い、下部施設の上部には瓦ないし桶を積み上げ、井戸枠としている。下部に使用された板材には墨書が記されているもの125・126があった。

125・126は井戸の下部施設に用いられていた板材である。両者ともに墨書が認められる。125は屋号と推定できる。「やまに」と読むのであろうか。126には格子目状の区画内に「大」・「小」・「×」・「●」が配されている。二つの部材が接合したことから、井戸材への転用品と考えられる。「●」がもっとも多いが、配列に規則性は見受けられない。また、図の右側に「四」など文字らしきものも認められるが、墨の残りは悪く詳細は明らかでない。これらの板材の表面には緩い弧状の加工痕が見られることから、板材の製作に鋸が用いられた可能性がある。

SE205 調査地東端で検出した平面円形の井戸である。直径3.4mある。検出面から約2.5m下で下部施設を確認した。施設の構造はSE204と同様である。

調査地中央部では水溜め部と溝からなる集水施設と考えられるSK201を検出した。

SK201 幅0.4m、深さ0.8mの溝に直径1.5m、深さ1.2mの水溜め部が連結する遺構である。水溜め部は板を枠状に組んだ内部に桶を設置する。枠の溝につながる側はU字状に開口しており、さらに板材が溝に向けて取り付けられていた。開口部と溝底の高さはほぼ同じであるが、やや溝の方が高い。形状は井戸と同じであるが、他の井戸に比べて非常に浅いこと、開口部の位置が高いこと、および傾斜から井戸から水を溝に引くのではなく、溝から桶内へ水を流すための施設と判断している。溝は幅に比して深く、埋土は人為的な埋戻し土である。このことから、溝内には本来、導水のための板組もしくは管などの何らかの施設があって水溜め部の開口部にはめ込まれていたものと考えられる。廃棄に当たって取り除かれたのであろう。また、溝部は暗渠であったと推定できよう。

調査地中央以北では数条の溝を確認した。

SD201 調査地南部で検出した東南東から西北西方向

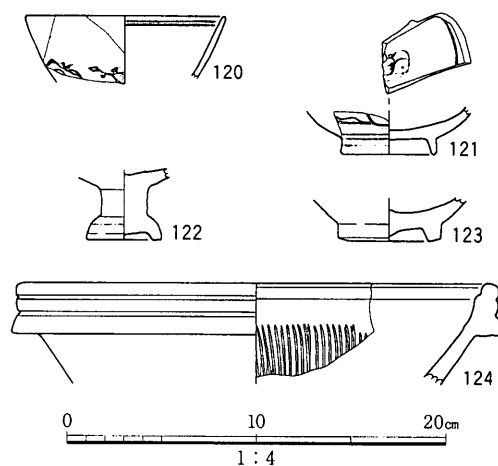
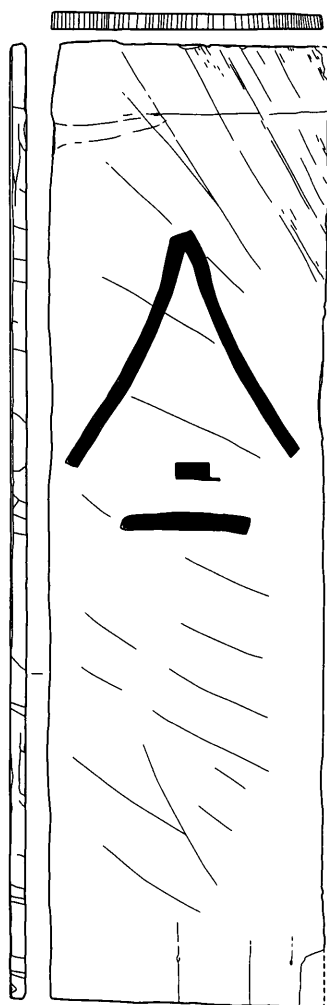
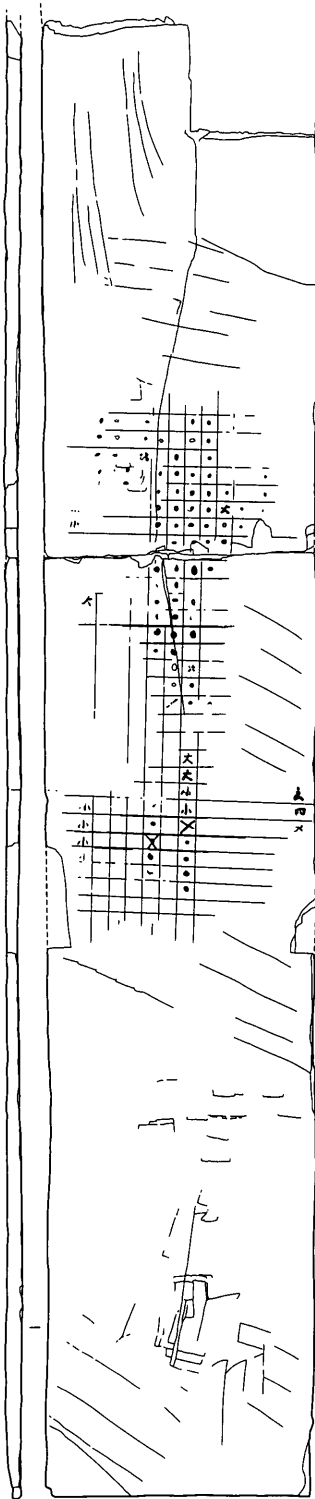


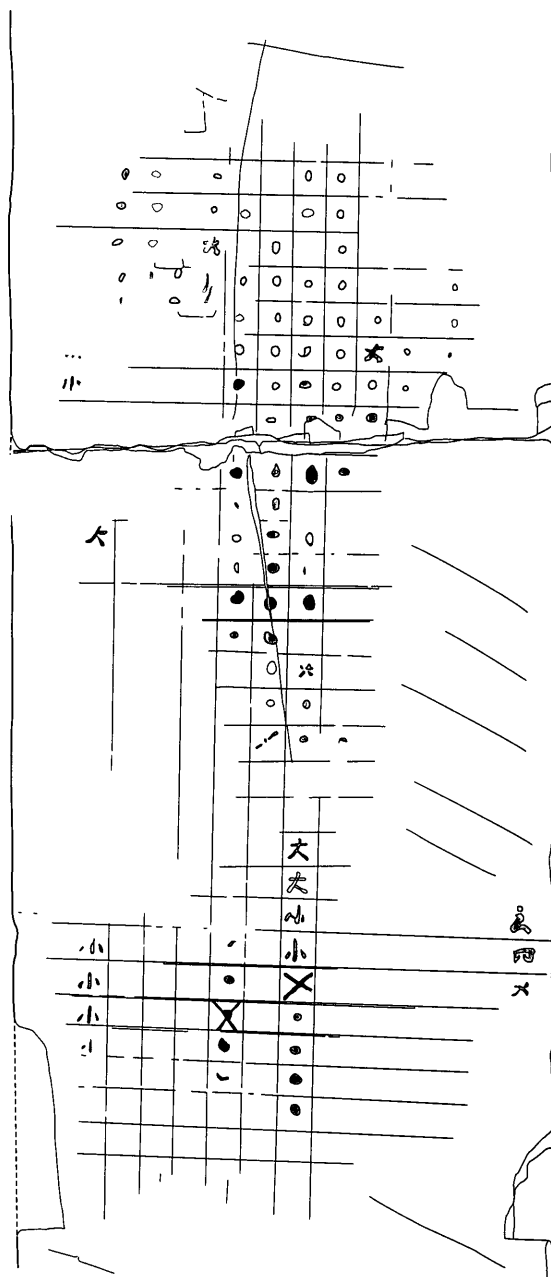
図31 SE203出土遺物



125



126



126 (部分)

0 10 20cm
1:4

0 50cm
1:8

图32 SE204出土板材

に延びる溝である。幅0.4mで深さは0.2mある。断面形は箱形で、底には掘削時の工具の痕跡とみられる凹凸が顕著に認められる。埋土は場所によって異なるが、基本的に大きく3層に分かれ、下部は第4b層の偽礫を含む加工時形成層、中部は水成層からなる機能時堆積層、上部は偽礫を多く含む人為的な埋戻し土である。

SD202 SD201とは約5mの距離をおいて並行する。形状や埋土の特徴はSD201と同じである。

SD203～205 調査地中央部で検出した南南東から西北北方向に延びる溝である。西から順にSD203、SD204、SD205とする。SD203・204は北部ではつながり、1条となる。幅0.2～0.3m、深さは0.1m程度である。切合い関係からはSD201・202より古い。

これらの溝のうちSD203～205は耕作に係わるものであろう。SD201・202は連続性が高く、両者が併行し、断面形は箱形をしていることから、何らかの区画に係わる遺構と推定できる。溝間の距離は約5.0mでほぼ一定している。

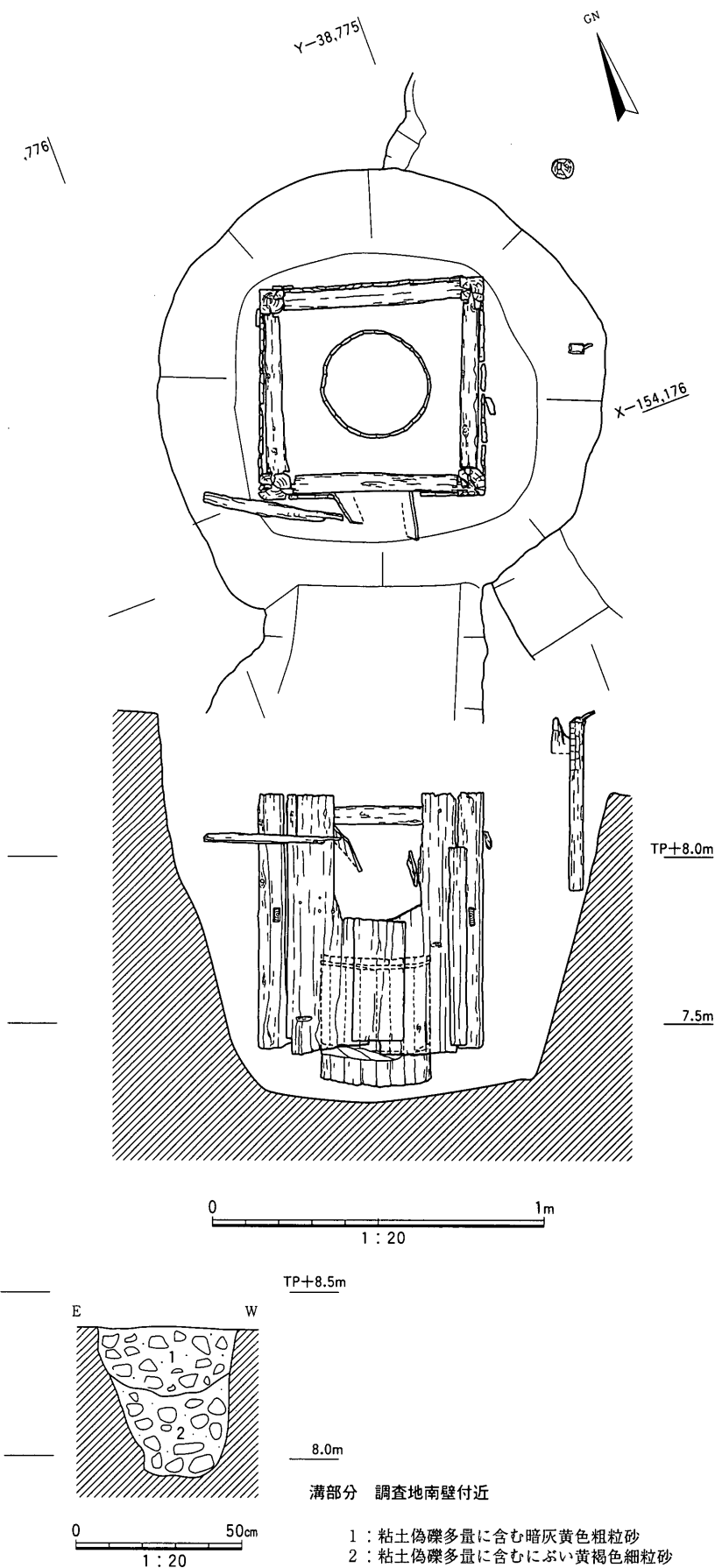


図33 SK201平・断面図

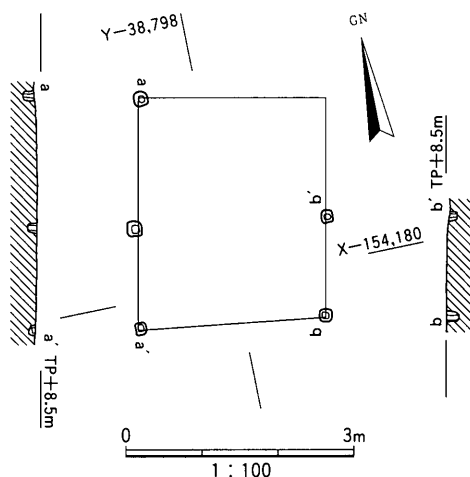


図34 SB201平・断面図

調査地北部では小規模な掘立柱建物を検出した。切合い関係ではもっとも新しく、江戸時代より新しい可能性もある。

SB201 南北2間(6.0m)、東西1間分(2.4m)を確認した。北東の柱穴については見つけることができなかった。柱穴の形状は一辺0.2mの平面円形もしくは方形で、柱痕跡は一辺0.15m程度の角材である。柱間距離にばらつきがあり、柱痕跡も細いこと、耕作域に作られていることから一般的な家屋ではなく、作業小屋あるいは納屋などの簡易な建物であったと想定できよう。

3)小結

鎌倉時代以降は調査地は基本的に耕作域として利用されている。注目すべきはその方位であり、いずれも正方位からは大きく振るものである。この方位の振れは現在の街区でも残されている。かつてあった流路と同じ方位であり、流路が存在したことにより、開発が遅れ、周囲とは異なる地割りになったことを物語るものであろう。

第Ⅲ章 調査成果のまとめ

今回の調査では、現地表下4 mまでを対象とし、古墳～平安時代の流路、平安時代の溝・土塹を初めとして、弥生時代から江戸時代の遺構・遺物を検出することができた。ここでは時期ごとの調査の成果を記すことでまとめとする。

1) 弥生時代以前

古墳時代以降の流路による削剥のため、西端を除く大部分が失われていたこと、および現地表下4 mまでの調査にとどまったことから、弥生時代以前の様相は明らかにすることができなかった。遺構としては弥生時代後期と考えられる溝を検出したのみである。ただし、弥生時代後期～終末期の土器が少なからず出土していることから近隣の調査により、同時期の集落域が検出される可能性は高い。

また、一部ではあるが、深掘りを行った結果、弥生時代以前の地層が良好に遺存していることが判明した。調査地が位置する都市計画道路長吉2号線は、調査地よりさらに西へと計画されている。流路による削剥も浅くなることが予測され、今後の発掘調査による成果が見込まれよう。なお、NG12～13層がTP+4.2m前後で確認できていることから、地表下5 mまでを調査対象とすることができれば、石器遺物の出土も期待されるところである。

2) 古墳時代から飛鳥時代

古墳～飛鳥時代は調査地全域が流路に当たっていた。流路の方向は南東から北西、あるいは東南東から西北西である。この流路は位置関係から西北西約300mでの、近畿自動車道建設に伴う調査で検出された流路[大阪文化財センター1986]につながる可能性がある。当調査ではこの流路は飛鳥時代にほとんどが埋没しているが、平安時代にも窪みとして残されていたようである。この流路は西でやや北に振る方位の六反自然堤防の南裾を流れる。六反自然堤防は古墳時代中～後期に形成された自然堤防である。流路の堆積状況の観察から、幾度もの氾濫による土砂の供給により、六反自然堤防をさらに南側へと発達させながら流下していたといえる。また、度重なる土砂の排出により、流路はしだいに幅を減じ、固定されていったと推定できる。流路からは多くの遺物が出土しているが、これらは上流側である南東方向にあった集落域から流されてきたものであろう。

3) 奈良時代から平安時代

続く奈良時代の様相は明らかでない。ただし、遺物の出土状況から考えると、前段階の流路は埋没しきらずに存在していたものと推定される。流路は幅・深さを減じながらも続く平安時代にも残されている。一方、埋没がいち早く進んだ調査地東部はしだいに高燥な状態となり、土壌化が進むことになる。10世紀には河道に平行して溝が掘削されている。これは生活域と河との境を画するものと考え

られるが、この段階では遺物の量も多くなく、あまり生活の痕跡を感じさせない。流路へとやや下がった位置では井戸が検出されたのみである。

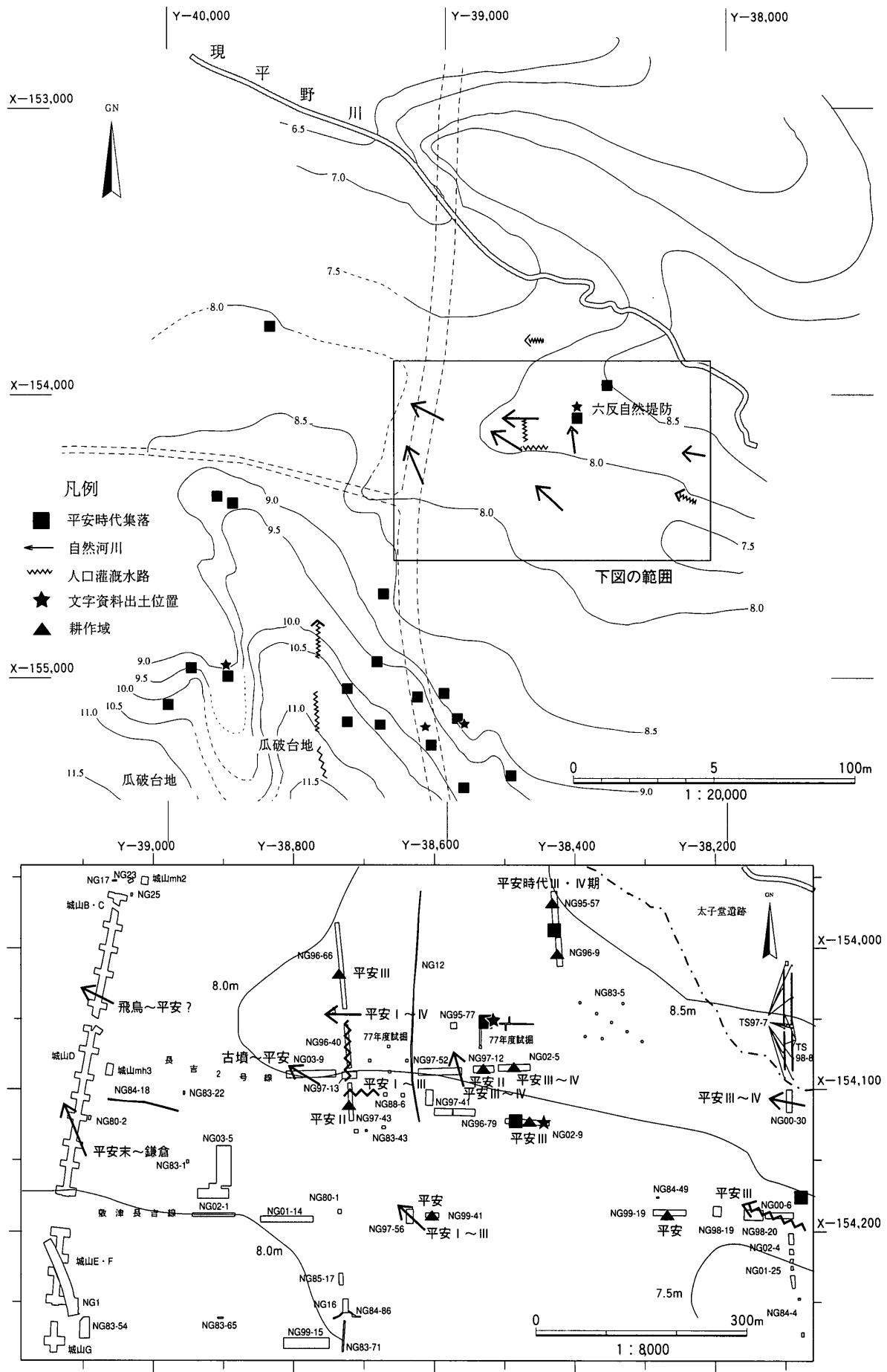
10世紀後半から11世紀代には流路はほぼ埋没するが、アシなどの繁茂する湿地状の場所であったと考えられ、人々が積極的に開発を加える状況ではなかったであろう。調査地東部では、前段階とは同じ位置に溝が掘られており、平安時代を通じて、調査地の位置が生活域との境界という意識が強かったものと考えられる。この段階になると調査地東部では、ゴミ穴と考えられる土壌も複数検出され、遺物量も増加することから、柱穴など建物の痕跡は認められなかったものの、ごく近接した位置に集落が存在していた可能性は高い。

平安時代における長原遺跡の動向についてはこれまで何度か紹介されていることから、ここでは長原遺跡の東北地域を中心として様相をみることにする。

今回の調査地の北東、六反自然堤防上に当るNG95-57次調査では平安時代Ⅲ期の遺構として、北側で耕作に伴うと考えられる東西・南北方向の小溝群、南側で掘立柱建物が3棟検出されている。また、同時期の土器埋納ピットも検出した。その上層の平安時代Ⅳ期では同様に掘立柱建物と小溝群がある。この南に当るNG96-9次調査では、平安時代Ⅲ期として耕作に係わる溝が検出された。また、平安時代Ⅳ期として掘立柱建物・井戸・土壌・土器埋納ピットが検出され、集落域と考えられる。これらの遺構群の方位はほぼ正方位である。この地点では平安時代Ⅲ～Ⅳ期には小規模な屋敷とその周囲に広がる耕作域という土地利用であったと考えることができるであろう。

今回の調査地の東側では南北方向に連続して調査が実施されており、六反自然堤防上に立地するNG96-66次調査では平安時代Ⅰ期の不整形の土壌のほか、平安時代Ⅲ～Ⅳ期の溝群が検出され、平安時代Ⅲ～Ⅳ期には耕作地であったといえる。これらの溝群の方位は西でやや北に振る。また、平安時代Ⅳ期、11世紀後半～12世紀代の東西方向の自然流路が確認されている。この南に位置するNG96-40次調査では、平安時代Ⅰ～Ⅲ期の南北方向の溝のほか、土器埋納ピットを検出している。このうち平安時代Ⅰ期に掘られ、Ⅱ期の遺物を多く出土し、Ⅲ期古段階には埋没する溝は、南のNG97-13次調査でも検出されており、総延長として90m以上ある。また、NG97-43次調査では平安時代Ⅱ期中段階に埋没する東西方向の溝が検出され、埋土の状況が類似していることから、これから派生もしくは東に屈曲する溝の可能性がある。用途としては水流の痕跡があることから、用水路の可能性が高いと考えられるが、東側の敷地で行った試掘調査の際に黒色土器が一括出土しており、集落の存在も想定される。このことから東の集落を画する溝である可能性も否定できない。NG97-43次調査ではほかに平安時代Ⅱ期の土器埋納ピットのほか、耕作に関連すると推定できる東西・南北方向の小溝群が検出されている。これらのことから、この地点では平安時代を通じて、おもに耕作域として利用され、東には溝で画される集落があった可能性がある。

今回の調査地の東方ではNG97-52・97-12・02-5次の調査が連続して実施されている。NG97-52次調査では平安時代Ⅲ～Ⅳ期の遺物を含む11世紀前半～12世紀代、瓦器を含む13世紀代の2条の流路を検出した。この流路は南南東～北北西方向から東南東～西北西方向へと向きを変えたと考えられている。また、流路と同方向の溝が掘られており、その状況は今回の調査地の状況に類似する。



東に位置するNG97-12次調査では平安時代Ⅱ期の耕作痕跡と考えられる小溝群が確認されている。方位は正方位より振っており、流路の方向と同じもしくは直交する。さらに東のNG02-5次調査では平安時代Ⅲ～Ⅳ期の耕作に係わる小溝群が多数確認されている。小溝群の方位は流路より離れた東側では正方位で、流路に近い側では流路に平行もしくは直交する方位である点が注目されよう。本調査では詳細な時期は不明であるが、さらに下位からも耕作痕跡と考えられる窪みも認められている。

これらのすぐ南ではNG97-41・96-79・02-9次調査が行われている。NG96-79次調査では、13世紀代の瓦器を含む流路が検出されている。この流路はNG97-52次調査の鎌倉時代の流路と一連のものであろう。NG02-9次調査は報告書が未刊のため詳細な検討は行われていないが、平安時代Ⅲ期と考えられる掘立柱建物および耕作跡が確認されている。

東南東方向に当るNG00-6・98-20次調査では平安時代Ⅲ期(10世紀末～11世紀前半)の東南東～西北西方向の大溝が確認されている。灌漑を目的としたものと推定されるが、多くの日常土器も出土しており、近隣に集落があったと考えられる。この流路からは人形木製品も出土している。また、遺構としては確認できていないが、北東部に飛鳥～平安時代初頭の遺物が多数出土しており、調査地より北東側に集落が広がっていた可能性が指摘される。NG98-19次調査では平安時代の作土層が確認されている。NG99-19次調査では詳細な時期は不明であるが、奈良～平安時代と考えられる南北あるいは東西方向の小溝群が見つかった。NG02-4次調査では平安時代初頭の遺構として東西方向の溝がある。平安時代Ⅲ期には北西から南東方向の大畦畔もしくは島畠がある。この南のNG01-25次調査では平安時代Ⅰ期の東西方向の溝、平安時代Ⅲ～Ⅳ期の東西方向の畦畔が確認されている。これらの調査はいずれも六反自然堤防より下がった位置にあり、耕作域としておもに利用されたと考えられる。

これらの北に当るNG00-30次調査では平安時代Ⅱ期と考えられる柱穴、小溝などを確認している。平安時代Ⅲ～Ⅳ期では流路と土手が検出されている。この流路はNG96-66・97-52次調査で検出された流路につながる可能性がある。

調査地の南東に当るNG97-56・99-41次調査地は六反自然堤防と南の出戸自然堤防に挟まれた低地に位置している。NG97-56次調査では平安時代Ⅲ期に埋没する南東から北西方向の流路が確認されている。NG99-41次調査では詳細な時期は不明であるが、平安時代と考えられる水田畦畔が確認されている。これらのことから低地に当るこの地域では耕作域としておもに利用されていたと考えられる。

調査地の南西に当るNG01-14次調査では、12世紀代の水田畦畔が確認されている。NG02-1次調査では平安時代Ⅳ期と見られる南北方向の畦畔が検出されており、この近辺は耕作域として利用されていると考えられる。

以上のことから、長原遺跡の東北地域は平安時代にはおもに耕作域として利用されていたといえよう。集落域はこれまで検出されている限りでは小規模なものが多く、散在しているようである。立地では六反自然堤防上にあるといえよう。また、注目すべきことは掘立柱建物も耕作に係わる小溝群も南北もしくは東西方向を指向する例が多く、条里に基づいていた可能性が高い。南北方向から振れる

ものは、ごく近隣に流路がある場合が多く、自然地形に規制されたと考えられる。

長原遺跡東北地区にあった流路の多くは度重なる氾濫により、自然堤防を発達させながら古墳～飛鳥時代にはほぼ埋没、あるいは規模を著しく減じている。これにより六反―出戸低地は安定した状況となる。平安時代には集落は自然堤防上に立地し、周辺には耕作域が広がっている。河川の埋積に伴って、耕作域はさらに低地へと広がっていったと考えられる。しかしながら、平安時代になってもいくつかの流路は残されており、また、一方で新たな流れを作り出したものもある。基本的にその方向は六反自然堤防に沿った方位であり、地形的に安定していたとしても、旧地形を随所に残すものであったといえよう。

4) 鎌倉時代以降

鎌倉時代には流路は完全に埋没し、作土層の存在から調査地全体が耕作地として利用されたと考えられる。ただ、その後の洪水による削剥の方位が前段階と同じであることから、この間は大きく地形を変化させるような開発はなかったものと推定できる。

また、江戸時代までに見られる各遺構の方位も、かつて存在した流路の方向と同じであり、さらに現在、地表面に見られる街区の方向も同様である。このことはかつて流路が存在していたことによる制約のため、周辺の開発・整備からこの地が取り残されていたことを意味しよう。

引用・参考文献

江浦洋1988、「古墳時代窯跡出土須恵器の技法的特長」：大阪府教育委員会・大阪文化財センター編『日置荘遺跡』

(その3)、pp.71-75

大阪市文化財協会1978、『長原遺跡発掘調査報告』

1979、『大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG16次)報告書』

1980、『大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG20-1)略報』

1981a、『大阪市下水管渠築造工事(押入口)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-1)略報』

1981b、『八尾～富田林局間同軸ケーブル方式工事(土木)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-2)略報』

1982、『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』

1984a、『下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-1)略報』

1984b、『大阪市住宅供給公社長原六反用地ボーリング調査(NG83-1)略報』

1984c、『大阪市平野区长吉出戸における下水道工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-22)略報』

1984d、『大阪市出戸六反地域幹線下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-43)略報』

1984e、『仲東産業店舗建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-54)略報』

1984f、『吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-63)略報』

1984g、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-65)略報』

1985a、『六反下水管渠推進工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-4)略報』

1985b、『長吉出戸地区下水管渠推進工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-18)略報』

1985c、『地中送電線工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-49)略報』

1985d、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-86)略報』

1986、『大阪市土木局カルバート建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG85-17)略報』

1988、『長吉中学校体育館増築に伴う長原遺跡発掘調査(NG87-67)略報』

1992、『長原遺跡発掘調査報告』V

1988、『大阪市教育委員会によるクラフトパーク建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG95-77)略報』

1998a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』I

1998b、『平成9年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG97-41)完了報告書』

1998c、『桑津遺跡発掘調査報告』

1999、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』II

2000 『長原遺跡東部地区発掘調査報告』III

2001a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』IV

2001b、『平成12年度長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡発掘調査(NG00-6)完了報告』

- 2002a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅴ
- 2002b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅷ
- 2003a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅵ
- 2003b、『平成14年度大阪市住宅局による長吉六反住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG02-9)完了報告書』
- 2004a、『長原遺跡発掘調査報告』ⅩⅠ
- 2004b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅶ
- 2005、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅷ
- 大阪文化財センター1978、『長原』
- 1986、『城山』その1～3
- 佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102-114
- 鈴木秀典1982、「瓦器碗の編年」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査』Ⅱ、pp.278-282
- 高橋工1999b、「長原遺跡東北地区の基本層序」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.7-16
- 田辺昭三1966、「出土遺物の検討」：平安学園考古学クラブ編『陶邑古窯址群』Ⅰ、pp.35-58
- 1981、『須恵器大成』 角川書店
- 趙哲済1995、「長原遺跡の標準層序」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.19-34
- 寺沢薫・森井貞雄1989、「河内地域」：『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社、pp.41-146
- 村元健一2003、「長原遺跡とその周辺における古代の様相」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅵ、pp.86-100
- 八尾市文化財調査研究会2000a、「Ⅴ 太子堂遺跡第7次調査(TS97-7)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.59-73
- 2000b、「Ⅵ 太子堂遺跡第8次調査(TS98-8)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.75-93
- 米田敏幸1989、「土師器の編年 1. 近畿」：『古墳時代の研究』6、雄山閣、pp.19-33

あ　と　が　き

1995年に長原遺跡東北地区における本格的な発掘調査が行われて以来、11年が経過した。この間に発行した報告書は本書を含め、計9冊となる。各年あたりの調査件数は決して多くなく、これまで18件の報告であり、東北地区の面積から見れば、ごくわずかにしかすぎない。しかし、調査当初は手探りの状況であったことを考えると、格段に情報量が増え、多くのことがわかりつつある。これらの成果は幸いにして関係各位のご尽力により、毎年報告書として刊行することができている。調査成果をただちに公開できることは調査担当者にとってこのうえない喜びである。

しかしながら、我々考古学に携わるものの責は、報告書刊行をもって終わるものではない。最新の情報とこれまでの解釈をつき合わせ、常に検証し続けねばならない。誤りに気づけば真摯に訂正する必要がある。継続的に刊行される本書の基本的な立場でもある。最後に、重要なことであるが、成果は研究者のためのみにあるのではなく、市民共有の財産たるべく活用していくよう肝に銘じ、努力を怠ってはならない。

(積山 洋)

索引

- M MT15型式 …… 20・23
- T TK10型式 …… 23・28
- TK23型式 …… 23
- TK43型式 …… 20・23・28
- TK47型式 …… 23
- TK208型式 …… 23
- TK209型式 …… 28
- TK217型式 …… 28
- あ 飛鳥Ⅰ …… 25
- 飛鳥Ⅱ …… 26・28
- 飛鳥Ⅲ …… 25
- い 井戸 …… 11・25・29・35・40・
41・46
- 生駒西麓（産） …… 18・27・37
- か 瓦器 …… 10・37・38・46・48
- 竈 …… 20
- き 畿内第Ⅰ様式 …… 20
- 畿内第Ⅳ様式 …… 14・17・18
- 畿内第Ⅴ様式 …… 20
- こ 古式土師器 …… 20
- 黒色土器 …… 10・11・25・26・27・28
31・33・46
- 捏鉢 …… 23
- し 庄内（式・期） …… 20
- 初期須恵器 …… 23
- せ 製塩土器 …… 32
- と 土錘 …… 23
- は 羽釜 …… 27・37
- ひ 肥前系磁器 …… 41
- ふ 布留式 …… 20
- へ 平安時代Ⅰ期 …… 32・33・46
- 平安時代Ⅱ期 …… 26・27・31・32・46・48
- 平安時代Ⅲ期 …… 31・33・37・46・48
- 平安時代Ⅳ期 …… 37・46・48
- 平城宮土器Ⅰ …… 30
- 平城宮土器Ⅱ …… 25
- 平城宮土器Ⅲ …… 25
- 平城宮土器Ⅳ …… 25
- 平城宮土器Ⅴ …… 25
- ほ 墨書 …… 41
- 掘立柱建物 …… 1・2・5・40・44・46・
48
- み ミニチュア …… 5・27
- や 弥生土器 …… 14・17・20
- り 流路（河道） …… 1・2・5・6・7・8・
10・14・16～19・23・
24・25・28・29・31・34
35・37・38・44～46・48・
49

**Archaeological Report
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume IX

A Report of Excavation
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagahara Area
in 2003

March 2006

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

NR: Natural Stream

SX : Other features

CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Excavation of northeastern sector of Nagahara Site	1
S.1 Background and Location	1
1) Outline of Nagahara Site	1
2) Background of excavation and Current research	1
S.2 Progress and Outline of excavation	6
1) Progress of research	6
2) Outline of excavation	7
Chapter II Results of research	9
S.1 Stratigraphy	9
1) Outline of Stratigraphy	9
2) Stratigraphy at the Research area	9
S.2 Features and finds before the Yayoi Period	16
1) Features of the top of stratum 10a	16
2) Finds of stratum 9b	17
3) Finds of stratum 8	17
4) Features of the top of stratum 8	18
5) Conclusion	18
S.3 Features and finds of the Kofun Period	19
1) Natural Stream of the stratum 7	19
2) Finds of stratum 7	19
3) Conclusion	23
S.4 Features and finds of from the Asuka to the Heian Period	25
1) Features and finds of the bottom of the stratum 7 and top of stratum 7	25
2) Features and finds of the top of the stratum 6	29
3) Finds of the stratum 5	31
4) Features and finds of the within and top of the stratum 4c	33
5) Conclusion	34
S.5 Features and finds of from after the Kamakura Period	37
1) Finds of the stratum 4b	37
2) Features and finds of the top of the stratum 4b	38
3) Conclusion	44
Chapter III Report Conclusion	45
1) Before the Yayoi Period	45
2) Kofun Period to Asuka Period	45
3) Heian period	45
4) After Kamakura period	49

References and Bibliogrohy	50
Postscript and Index	
English Contents	
Reference Card	

報 告 書 抄 録

ふりがな		ながはらいせきとうぶちくはつつちょうさほうこく 9						
書名		長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅹ						
副書名		2003年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名		平田洋司						
編集機関		財団法人 大阪市文化財協会						
所在地		〒540-0006 大阪府中央区法円坂1－1－35 TEL 06-6943-6833						
発行年月日		西暦 2006年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ながはらいせき 長原遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 ながよしでと 長吉出口	27126	－	34° 36' 15"	135° 34' 25"	030904～040131	700㎡	長吉東部地区土地区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
長原遺跡	集落	弥生～古墳時代		溝		弥生土器・土師器		
	その他	古墳～平安時代		自然流路		土師器・須恵器・黒色土器		
	集落	平安時代		井戸・土壇・溝		土師器・須恵器・黒色土器		
	その他	鎌倉時代		自然流路		土師器・須恵器・瓦器		
	田畑	室町時代		溝		土師器・瓦器		
	田畑	江戸時代		井戸・溝・掘立柱建物		土師器・近世陶磁器・木製品		
要約	2003年度に行った1件の調査結果を収録する。現地表下4 mまでをおもな調査対象とし、弥生時代から江戸時代までの遺構・遺物を確認した。 弥生時代から古墳時代初頭については、一部が遺存していたのみであるが、溝などを検出した。古墳時代から平安時代は調査区内に自然流路があったことがわかった。土師器・須恵器をはじめとする遺物が多く出土している。平安時代には、流路の東岸に井戸・溝・土壇を検出しており、集落の一部であったことが明らかとなった。平安時代以後は、流路のあとは湿地状となっており、鎌倉時代になっても、小規模な流路が残っている。室町時代以後は耕地として利用され、室町時代から江戸時代の遺構として井戸・小溝群などが検出された。 これら各時期の遺構の方位は、埋没した流路の方位と同様であり、古墳時代以降、現代に至るまで土地利用が流路の影響を受けていることが注目されよう。							

原 色 図 版



第4c層内・基底面検出遺構(東から)



NR601断面(北西から)

図 版

深掘り部
第10b層以下断面
(北東から)



第8層上面検出遺構
(西から)



SD801
(南東から)





第7層の河道全景
(東から)



第7層による第8層以下の
の削り込み
(東から)



西端部
第7a層と第7b層の境界
(北から)

第6層基底面・
第7層上面検出遺構
(西から)



NR601
(南東から)



NR601断面
(北西から)





SE601
(南から)

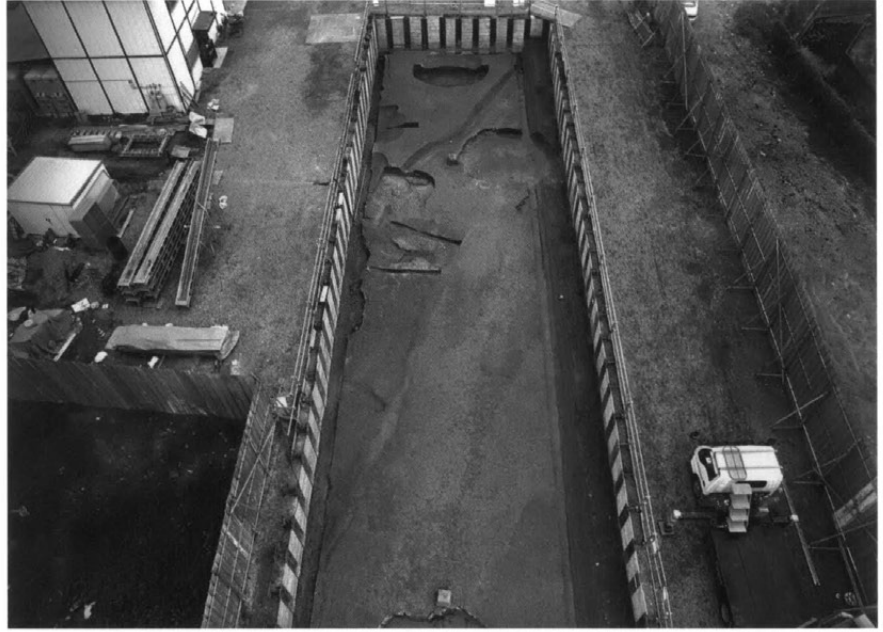


SD604・605
(南東から)



第4c層内・
基底面検出遺構
(東から)

東部第4c層内・
基底面検出遺構
(西から)



東部第4c層内・
基底面検出遺構
(北西から)

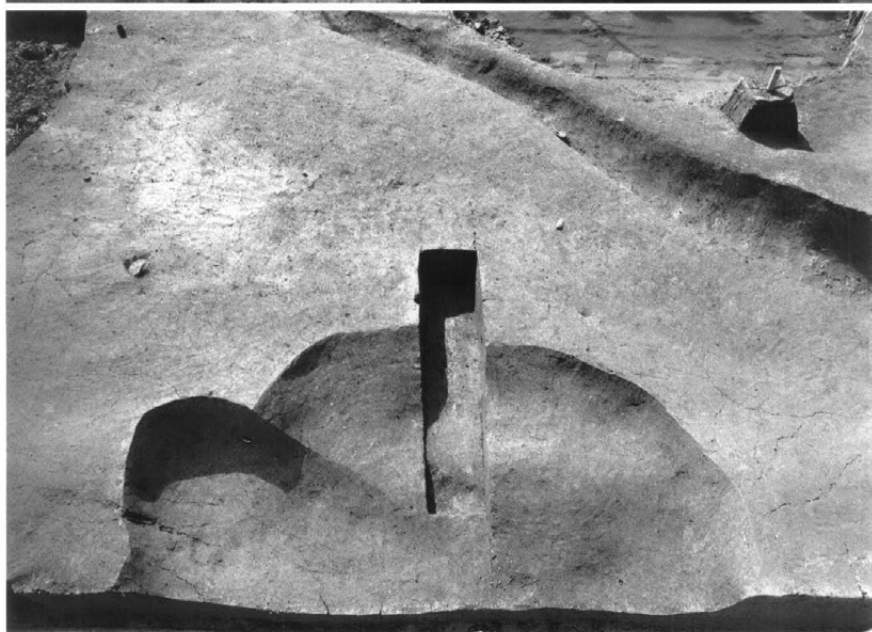


SD401・SX401
(南東から)





SK401
(北から)

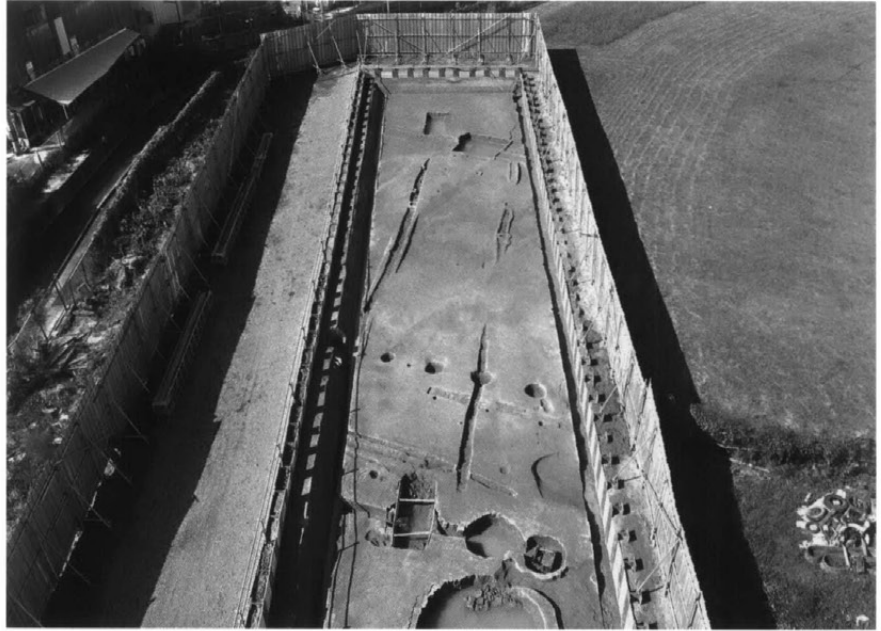


SK402・403
(北から)

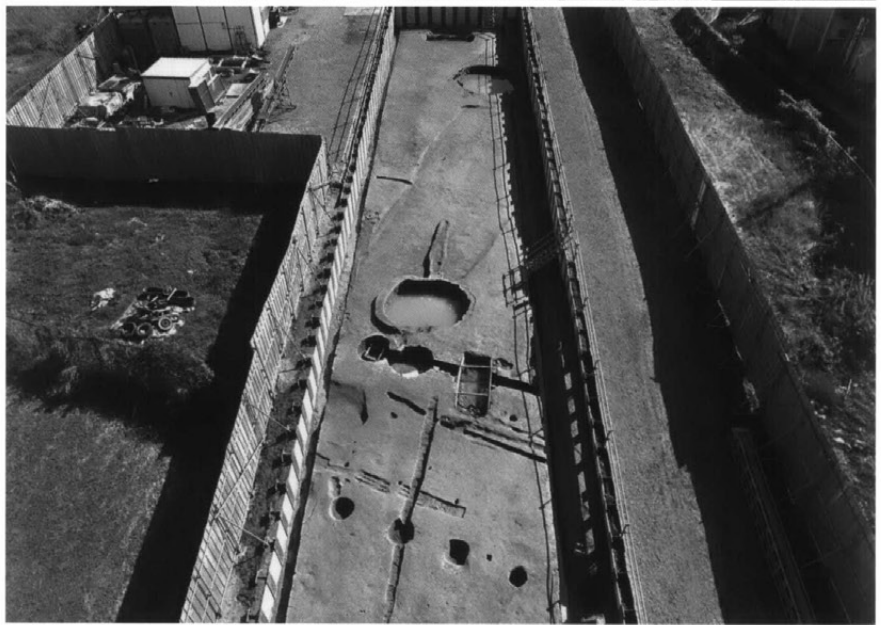


SX403
(南から)

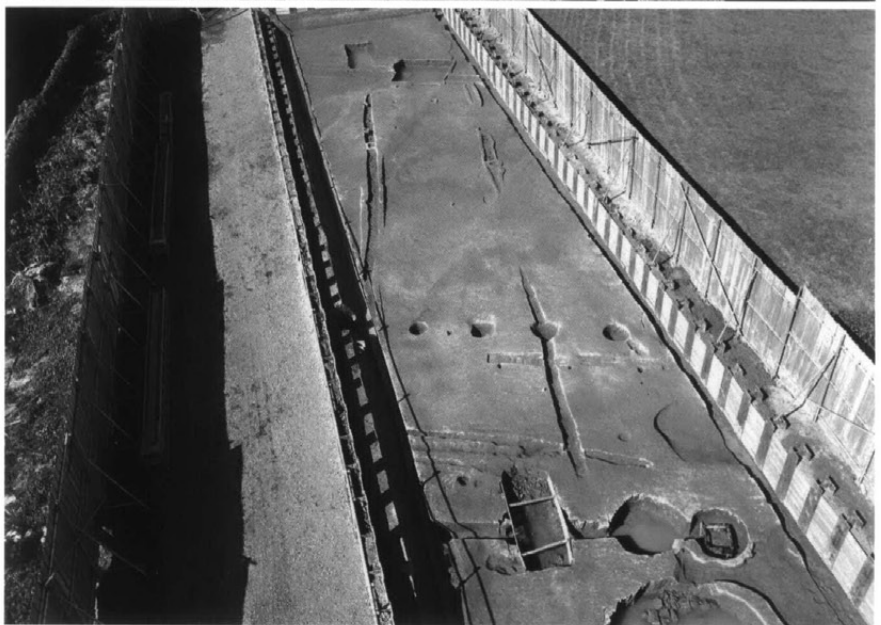
第4b層上面検出遺構
(東から)



東部第4b層上面
検出遺構
(西から)



西部第4b層上面
検出遺構
(東から)





SB201
(南から)



SK201
(南西から)



SK201
(北西から)

SE201
(南西から)

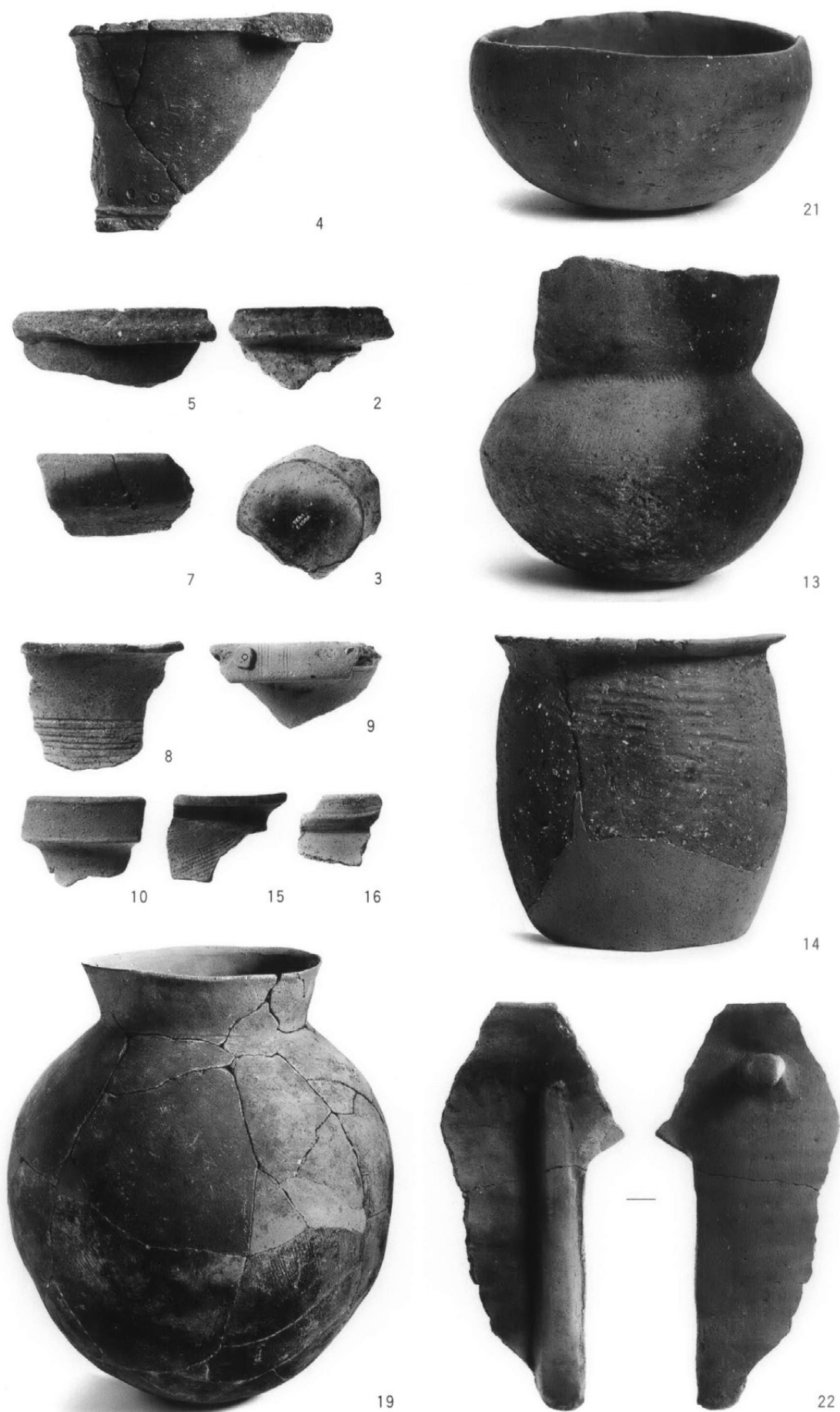


SE205
(西から)



SE204
(南西から)





第8層(2・5・7)、第7層(8・10・13・16・19・21・22)



35



42



37



46



38



49



40



50



41



51



52



54



56



80



58



72



59



66



74



61



78



68

70



83



84



86



88



89



92



90



93



95



100



101



106



102



109



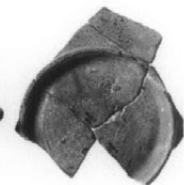
117



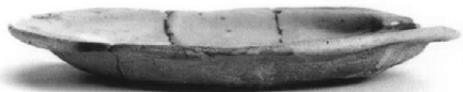
116



119



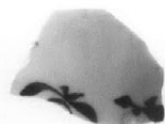
111



110



124



120



112



123



122



121



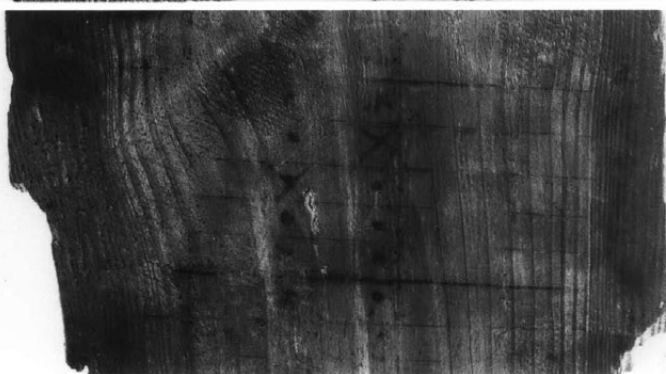
126



126



126



126

第5層(109)、SD401(110・111)、SK402(112)、第4b層(116・117・119)、SE203(120～124)、SE204(126)

大阪市平野区 長原遺跡東部地区発掘調査報告 IX

ISBN4-900687-92-8

2006年3月31日 発行©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒540-0041 大阪市中央区北浜2-1-14

**Archaeological Report
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume IX

A Report of Excavation
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in fiscal 2003

March 2006

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume IX

A Report of Excavation
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in fiscal 2003

March 2006

Osaka City Cultural Properties Association